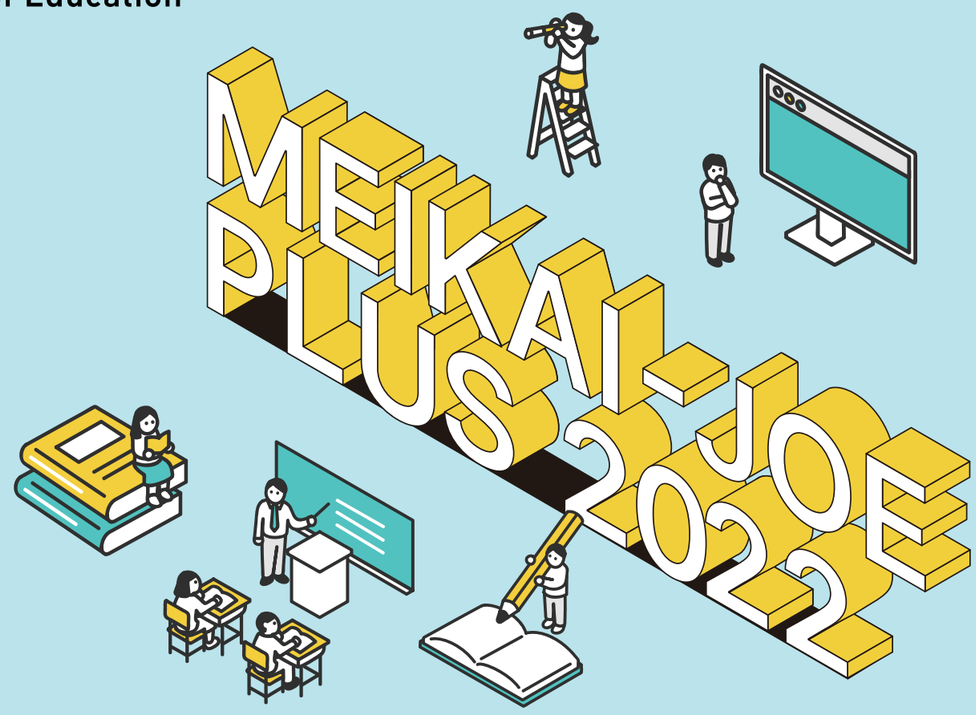
明海大学

文部科学省委託「令和四年度教育養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業」（小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業）成果報告書　令和五年三月

MEIKAI-JOE PLUS 2022

MEIKAI UNIVERSITY,
J-SHINE and
Office of Education
PLUS



文部科学省委託 令和4年度

教育養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業
（小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業）

成果報告書　MEIKAI-JOEプラス2022 小学校外国語科等講座

令和5年3月 明海大学

はじめに

明海大学は、平成28年度に、教職を目指す学生に対して、免許状の取得に必要となる教職課程の履修、教育実習、教員採用試験、赴任後に求められる授業実践力など、教職に関するさまざまな課題をトータルにサポートするために全学的な組織である「教職課程センター」を設置した。また、教職を目指す学生や教職課程担当の教員が、計画的・継続的に、浦安市をはじめ広く千葉県、東京都等に所在する小学校、中学校、高等学校、これを所管する教育委員会及び地域社会に対して、本学の教育研究の成果を発信し、還元することを目的に、「教職課程センター」の設置に併せて「地域学校教育センター」を設置した。爾来、明海大学は、公立高等学校6校、東京都足立区、千葉県浦安市教育委員会、秋田県横手市と教育に関する連携協定を締結して、連携先における児童生徒の英語力向上や教師に対する研修等を継続的に実施してきたところである。

創設以来、中学校・高等学校の英語の教員養成の取組を開始したところであるが、教職に就く学生にとっては、小学校における外国語活動や導入がすでに決定していた教科外国語についての指導内容等に関する基礎的理解の修得が不可欠であると考え、平成30年度には、小学校英語指導者認定協議会（J-SHINE）から登録団体の認証を受けるとともに、同年度から、教職課程に「小学校英語基礎概論」という科目を新設した。このように明海大学は時代を先取りして、将来英語の教員となる学生の教員養成の改善に努めてきたところである。

折しも、文部科学省は、小学校中学年での外国語活動、高学年での外国語科が導入された新学習指導要領（平成29年3月31日告示）を円滑に実施するため、教師の負担を軽減しつつ、質の高い授業を行えることを目的に、令和2年度から教員養成機関等と連携した講習等を開発実施する公募事業を実施してきている。

明海大学は、令和2年度の最初の公募事業から継続して応募して、令和2年度、令和3年度と令和4年度とこれまで3回にわたり採択決定を受け、小学校の教員等に対して講座を実施してきたところである。連携教育委員会も広がりをみせ、令和2年度では東京都足立区、千葉県浦安市、秋田県横手市の3つから、令和3年度には福島県いわき市、新潟県妙高市、さらに令和4年度からは東京都狛江市が加わり、６つの自治体の教育委員会を連携教育委員会とし講座を実施してきており、これまでの講座を受講した教員参加者数は延べ4,000名を超えた。

なお、令和4年度の本事業においては、委託決定後、事業開始前に、東京都神津島村教育委員会、茨城県土浦市教育委員会及び佐賀県伊万里市教育委員会が参加の意向を示したので、ボランティア・オブザーバー参加資格を付与して講座を実施してきたところである。更には、新規プログラムとして、講座とは別に、外国語活動や教科英語に関する現場の教員がもつ日頃の悩みや相談などに対応するため、「Zoomによる小学校英語・なんでも相談交流室」を開設した。

令和4年度の本事業成果報告書においては、公益財団法人日本英語検定協会、小学校英語指導者認定協議会（J-SHINE）や小学校英語教育学会愛知支部理事を協力機関として実施した内容について、本学が応募するまでの取組、委託決定後から講座実施前までの取組や各講座の内容を明らかにするとともに、各講座への参加者のリフレクションに関する分析、各講座参加者の評価アンケート結果や分析を詳説した。本成果報告書が広く全国の小学校英語教育の関係者の皆様方の参考となれば幸甚である。

令和5年3月
明海大学副学長
高野　敬三

目次

はじめに

Ⅰ 事業概要

1.事業委託決定までの取組 04
2.委託決定後から講座実施までの取組 06
3.事業開始前に新たに加えた取組 08
4.検討委員会設置要綱、委員名簿及び検討委員会議事概要 09
5.講座開発・実施チーム設置要項及び講座開発・実施チーム委員名簿 12
6.組織図：協力・連携体制 15

Ⅱ 講座概要

第１回講座 16
第２回講座 17
第３回講座 18
第４回講座 19
第５回講座 20
第６回講座 21
第７回講座 22
第８回講座 24
第９回講座 25
第10回講座 26
第11回講座 28
第12回講座 29
「Zoomにより小学校英語･なんでも相談交流室」 31

Ⅲ 講座受講による意識の変容

第1回から第6回 32
第7回から第12回授業研究 35

Ⅳ 講座内容に対する評価 42

Ⅴ 講座運営に対する評価

全講座総合評価アンケート結果分析 62

Ⅵ 講座全体の総括 67

Ⅶ 教育委員会･受講者等の総括

1.東京都足立区教育委員会総括 70
2.東京都足立区受講者感想 71
3.千葉県浦安市教育委員会総括 71
4.千葉県浦安市受講者感想 72
5.秋田県横手市教育委員会総括 73
6.秋田県横手市受講者感想 74
7.福島県いわき市教育委員会総括 74
8.福島県いわき市受講者感想 75
9.新潟県妙高市教育委員会総括 76
10. 新潟県妙高市受講者感想 77
11. 東京都狛江市教育委員会総括 78
12. 東京都狛江市受講者感想 79
13. 講師総括 79

終わりに

Ⅰ 事業概要

1. 事業委託決定までの取組

1 公募要領の公表

文部科学省から、教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業（小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業）に関する公募が公示され募集が始まったのが、令和4年1月11日であった。公募要領によれば、その目的に、「小学校中学年の外国語活動、高学年の外国語科が導入された新学習指導要領(平成29年3月31日告示)を円滑に実施するため、教師の負担を軽減しつつ、質の高い授業を行える指導体制を構築することが喫緊の課題である。このため、現職の小学校教師等を対象に外国語活動及び外国語科(英語科)の指導に対応する講習等を開発し、実施する。」とある。また、事業内容としては、①小学校外国語活動・外国語科、中学校・高等学校の外国語科(英語)の専門性の高い指導者養成のための講座・講習を開催することと、②小・中・高等学校を通して、より深く多様な専門性を持った外部人材を外国語(英語)教育に活用するために必要な講義・講座等の開発・実施することが示されていた。そして①では、中学校教諭免許状(外国語(英語))を取得するための免許法認定講習等の開発・実施や、現職教師や教師を目指す学生等を対象とした、小学校外国語科・外国語活動に係る専門的な指導力・英語力向上に係る講座等の開発・実施が例示されていた。

さらに、今回の公募でも、講座の開設にあたっては、新型コロナウイルス感染症に係る現下の状況を鑑み、講習、講座等の全部又は一部を対面により予定通り実施することが困難と認められる場合には、対面による講習に相当する教育効果を有すると講習開設者において認められるものについては、対面によらない講習として実施することを認めることや、受講者の負担軽減を図りながら、特に、新型コロナウイルス感染症への様々な対応で教育委員会及び現職教師等の負担が増えることに鑑み、教育委員会・受講者に負担がかからないよう配慮することが示されていた。また、実施する講習・講座については、継続的に能力の育成を図り、免許状更新講習との相互認定を可能にするため、一回限りの講演会やセミナー等ではなく、複数回にわたって行われ、かつ総時間数が少なくとも6時間以上の講習・講座であることが望ましいこと、いずれの講習・講座においても単に英語力向上のみを目的とする内容のもの(実質的に英語民間試験の対策講座となっているものを含む)については、本事業の対象外とすることや、いずれの講習・講座においても、平成29年告示の小学校および中学校の学習指導要領等の内容に対応していたり、「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」及び「小学校教員研修外国語(英語)コア・カリキュラム」「中・高等学校教員研修外国語(英語)コア・カリキュラム」を参考とした内容としていることなどが示されていた。さらに、本事業によって得られた成果等は、委託先において、報告書の配布やホームページの掲載等を通じて広く普及をすることや、講習・講座の開発に伴い、作成した教材や関連資料等をわかりやすくまとめ、成果物としてホームページで広く公表する等、講義・講座終了後も受講者が自主的に学び続けることができる、受講者以外の者もアクセスできる等、成果普及に努めることが明記されていた。

2 公募準備開始

前述の公募要領によると、公募開始が令和4年1月11日で、公募締切が2月1日となっており、以下に示すような段階を経て、企画提案書(事業実施計画書)を提出することとした。

① 学内組織の検討

事業実施主体は、昨年度同様、明海大学教職課程センター・地域学校教育センターとし、事務局には本学企画広報課が当たることとした。その上で、本事業に係る教職員の担当を決定した。

② 協力機関の検討

昨年度同様、具体的な事業実施内容を決定し実行に移していく上で、以下に示す検討に入った。過去20年にも亘り小学校英語の指導者を認定してきたJ-SHINE（小学校英語指導者認定協議会）を協力機関・外部有識者とする。具体的には、J-SHINEの藤田保・上智大学言語教育研究センター長・教授（J-SHIE専務理事）と鈴木菜津美事務局長に協力を仰ぐ。また、小学校英語に関する学会である「小学校英語教育学会」愛知支部理事である池田周・愛知県立大学教授を外部有識者とする。そして、本事業の公募への応募に際して、新たに、公益財団法人日本英語検定協会を協力機関として参入していただき、当該協会の会長である吉田研作・上智大学名誉教授の協力を仰ぐこととする。

③ 連携教育委員会の検討

前述のとおり、すでに本学と教育に関する連携協定を締結して事業を実施している、東京都足立区の教育委員会、千葉県浦安市教育委員会、秋田県横手市の教育委員会を連携教育委員会とした。さらには、本学との教育連携協定を締結してはいないものの、昨年度から本事業で連携教育委員会である福島県いわき市教育委員会（いわき市総合教育センター）、新潟県妙高市教育委員会に加え、東京都狛江市教育委員会を連携教育委員会とするよう検討に入った。

④ 再委託先の検討

公募要領では、新型コロナウイルス感染症の流行といった状況から、オンラインによる講習等の実施が可能であると記載されていた。オンラインでの講座撮影・配信は専門家に委ねることが必要と考えて、新たに、英語関係の諸事業を手掛けていて実績のある㈱ハルを再委託先として、オンライン講座の撮影・配信サポートやアーカイブ制作等オンライン環境整備を実施していただくよう検討に入った。

3　公募事業への応募

本事業に参加する小学校等の教員の服務監督者である連携教育委員会を決定しなければならないことから、昨年度実施したMEIKAI-JOEで連携教育委員会とした東京都足立区教育委員会、千葉県浦安市教育委員会、秋田県横手市教育委員会、福島県いわき市教育委員会や新潟県妙高市教育委員会に打診したところ、1月上旬には、参加の意思が確認できた。また、1月下旬には、東京都狛江市教育委員会が本事業に参加の表明があった。協力機関や再委託先としては、1月中旬に本事業参加の意思表明のあった公益財団法人日本英語検定協会に加え、昨年度までの協力機関であるJ-SHINE、小学校英語教育学会愛知支部理事や再委託先として(株)ハルからも本事業への公募について了解が得られた。その上で、明海大学は、事業の実施体制、実施内容、実施方法や実施日程などを定め、1月28日に企画提案書(事業実施計画書)を、そして、2月18日付文部科学省からの指摘事項を踏まえて、修正企画提案書（事業実施計画書）を3月1日に、文部科学省に提出した。

4　文部科学省からの決定通知

2月18日には、文部科学省から、明海大学に事業を委託することを予定していること、事業採択に当たり改善・見直しを行うべきことなどが文書で指摘された。これを受け、明海大学は、企画提案書(事業実施計画書)を修正して、文部科学省に3月1日に提出した。そして、4月1日、文部科学省から明海大学を委託先として正式に決定した旨、文書通知があった。

2. 委託決定後から講座実施までの取組

委託決定を受け、明海大学はその旨を連携教育委員会と協力機関・外部有識者や再委託先である㈱ハルに通知して、実施に向けての準備に入った。まずは、事業を遂行するための検討委員会の設置要綱並びに講座内容の開発のための「講座開発・実施チーム」の設置要項を4月20日に決定した。ここで事業名についても、昨年度との違いが分かるように、MEIKAI-JOEプラス2022という略称を使用することとした(昨年度は、明海大学のMEIKAI、協力機関のJ-SHINEのJ、そして教育委員会のOffice of Educationの頭文字をとって、協力機関が増えたことからプラスと加えて、MEIKAI-JOEプラスという略称を使用)。

以下が、令和4年度におけるMEIKAI-JOEプラス2022の事業を円滑に進めるために取り組んだ内容である。

1　明海大学事務局の取組

事業の正式決定を受け、企画提案書(事業実施計画書)に基づき事業運営を円滑かつ適切に行う必要があることから、以下の取組を行った。

① MEIKAI-JOEプラス2022・ミーティングの実施

学内組織ではあるが、本事業の進行管理のため、「MEIKAI-JOEプラス2022・ミーティング」を事業正式決定直後の4月から毎週月曜日に定例開催することとした。本事業に係る組織には、明海大学と関係する協力機関が3つ、再委託先が１つ、教育委員会が6つあり、明海大学がそれぞれとの連絡調整を行ったり、協力機関・再委託先・教育委員会相互間の中で明海大学が本事業実施主体として連絡調整することが多くあることから、事業の進行管理のために実施してきた。

また、MEIKAI-JOEプラス2022の事業の肝となる講座内容については、関係する教員が共通理解の下、教材開発を行う必要があることから、教材開発の検討も行ってきた。特に、明海大学教員が担当する回の講座については、その開発した教材について、協力機関に指導を仰いだ上で、微修正を行い講座実施日に備えた。

② MEIKAI-JOEプラス2022共有アドレスの運用開始

MEIKAI-JOEプラス2022事業に参加する各区市の小学校等の先生方、各区市教育委員会事務局、協力機関及び㈱ハルとの連絡専用の共有アドレスの運用を4月から開始した。

③ 各区市教育委員会に対する貸与機材等の配備

12回の講座を円滑に実施するため、明海大学は各区市の拠点校に対してレンタル機器等(ビデオカンファレンスツールCONNECT1台、第7回講座から第12回講座までの授業動画撮影用・iPad1台、三脚1台及びボイスレコーダー1台)を郵送して講座実施に備えた。

④ 検討委員会の企画・開催

企画提案書(事業実施計画書)や4月20日に決定されたMEIKAI-JOEプラス2022検討委員会の設置要綱等に基づき、事業期間中の検討委員会の開催の準備を行った。新型コロナウイルス感染拡大が続く中であったので、3回行うこととしていた検討委員会を、すべてzoomで開催するとともに、MEIKAI-JOEプラス2022検討委員会の下部組織である講座開発実施チームとの合同会議とすることとした。

第1回MEIKAI-JOEプラス検討委員会は、5月12日に実施してすべての協議題については賛同をいただいた。中間期の事業評価を協議するため、第2回検討委員会を9月15日に開催し、これまで実施してきた第1回から第8回までの講座に関する受講者のアンケート結果を説明して評価と改善点を協議した。そして、令和5年2月27日には、本事業の締めくくりとして検討委員会を開催して、事業の最終評価を確認した。(検討委員会についての詳細は後述。)

2　教育委員会への連絡・調整

本事業の連携教育委員会とは、4月27日と28日にzoomによる会議を開催して、本事業の説明を行い講座内容について企画提案書(事業実施計画書)に基づき説明を行うとともに、各回の講座において、具体的に取り上げてほしい講座

内容のアンケート調査の回答を依頼した。併せて、全12回の講座内容、実施日及び時程の調整作業に入るとともに、各教育委員会管下における拠点校(会場校)や参加教員の決定を依頼した。

3 ㈱ハルとの連絡・調整

事業の正式委託を受け、4月5日には、(株)ハルと具体的な講座配信について打合せを実施した。昨年度同様に、明海大学をスタジオとして動画を配信することとし、どのように各区市の参加者にZoomを使用した動画配信を実施するかについて協議を行った。その後、5月2日には、実際に本学に来学していただき、スタジオとなる講義室を確認していただくとともに必要機材の検討を行った。また、併せて、参加する小学校の先生方に提供するMEIKAI-JOEプラス2022事業の専用のWeb pageについて協議した。このようにして、5月から開始する講座の実施に万全を期した。

4 協力機関・外部有識者との連絡・調整

事業の正式決定を受け、4月26日には、財団法人日本英語検定協会の吉田研作会長、J-SHINEの藤田保・上智大学言語教育研究センター長・教授、鈴木菜津美・J-SHINE事務局長、池田周・小学校英語教育学会愛知支部理事・愛知県立大学教授及び井熊ひとみ・J-SHINE理事とZoom会議を開催した。ここで、MEIKAI-JOEプラス2022全12回の講座内容、実施方法や実施日等について合意を得た。

上記1から4までの連絡・調整を行うとともに、後述の第1回検討委員会を開催した。ここで、講座内容について連携教育委員会の意向を参酌して、文部科学省に提出した企画提案書(事業実施計画書)を微修正した。

その上で、以下の表に示す講座日程、講座内容等を決定した。日程については、受講する各連携教育委員会の先生方の授業日における多忙な業務を考慮して、長期休業中に、2回連続の講座を実施することが適当であると考え、2回講座を連続して受講する日を3日間とった。

拠点校については、MEIKAI-JOEプラス2022の全12回の講座開始前に、最終決定をみた。拠点校(会場校)については、足立区が区立寺地小学校、浦安市は市立高洲小学校、横手市は市立横手南小学校、いわき市は総合教育センター、妙高市は市立妙高小学校と市立新井小学校、そして、狛江市が、市立狛江第一小学校と決定した。

講座回	日　程	時　程	講　　師	講　座　内　容
第1回	5月24日(火)	15:20 ～ 16:20	吉田　研作(上智大学名誉教授)	新学習指導要領の原点
第2回	6月28日(火)	15:20 ～ 16:20	百瀬　美帆、米村　珠子、タイソン、パトリツィア(明海大学)	ティーム・ティーチングにおける評価について
第3回	7月28日(木)	13:30 ～ 14:40	井熊　ひとみ(J-SHINE理事)	「聞くこと」「話すこと」の指導
第4回		14:50 ～ 16:00	池田　周(愛知県立大学教授)	「読むこと」「書くこと」の指導
第5回	8月1日(月)	9:30 ～ 10:40	金子　義隆(明海大学)	言語活動の効果を高めるための工夫とパフォーマンス評価
第6回		10:50 ～ 12:00	石鍋　浩、坂本　純一(明海大学)	学校段階間の接続の重要性
第7回	8月2日(火)	9:30 ～ 10:40	百瀬　美帆、米村　珠子、タイソン、パトリツィア(明海大学)	授業研究① Team-Teaching（浦安市）
第8回		10:50 ～ 12:00	池田　周(愛知県立大学教授)	授業研究② 読むこと・書くことの指導(足立区)
第9回	9月22日(木)	15:20 ～ 16:20	井熊　ひとみ(J-SHINE理事)	授業研究③ 聞くこと・話すことの指導(いわき市)
第10回	10月25日(火)	15:20 ～ 16:20	百瀬　美帆、米村　珠子、タイソン、パトリツィア(明海大学)	授業研究④ Team-Teaching（横手市）
第11回	11月14日(月)	15:20 ～ 16:20	井熊　ひとみ(J-SHINE理事)	授業研究⑤ 聞くこと・話すことの指導(妙高市)
第12回	12月13日(火)	15:20 ～ 16:20	石鍋　浩、坂本　純一(明海大学)	授業研究⑥ 小中接続(狛江市)

3. 事業開始前に新たに加えた取組

以下に示す内容は、文科省に提出した修正版の企画提案書(事業実施計画書)には記載されていないものであるが、令和4年5月12日に開催した第1回検討委員会において了解されたものである。

1　本事業の連携教育委員会以外からの教育委員会の参加の許可

文部科学省が明海大学を正式に委託決定した後に、本事業に参加意向を示した、茨城県土浦市、東京都神津島村教育委員会及び佐賀県伊万里市教育委員会に対して、ボランティア・オブザーバー資格で参加を認めることとした。この資格の受講者は明海大学が提供する全12回の講座を視聴することはできるものの、講師とのやり取りや受講者間の協議などには参加できないといった一定の条件で参加していただくこととした。ただし、この資格で参加する受講者への配慮として、講座実施後のアーカイブの視聴は認めることとした。これにより、本事業への参加教育委員会数は連携教育委員会6にボランティア・オブザーバー参加教育委員会3を加えて、合計９つとなった。

2　Zoomによる小学校英語英語・なんでも相談交流室の開設

令和2年度及び令和3年度に実施した事業では、各講座回において、当該テーマに即した質疑応答は、リアルタイム又は講座後の質問に対する回答で受講した教員に対応してきた。しかしながら、その質疑応答が、講座回のテーマに即した質問に限られていたため、連携教育委員会の教員が日頃の授業実践を行うなかで生じた疑問点には必ずしも対応しきれていなかった。また、昨年度の事業で初めて実施した授業研究でも、区市の垣根を超えて受講した教員は情報共有をすることができたが、こうした情報共有も時間的な制約があった。

こうしたことから、令和4年度の本事業の中で、12回の講座とは別に「Zoomによる小学校英語・なんでも相談交流室」を7月、10月、12月の3回開設した。なお、いずれの回も1時間という限定で行うこととした。講師は、J-SHINE専務理事・藤田保上智大学教授にお願いすることとした。

4. 検討委員会設置要綱、委員名簿及び検討委員会議事概要

本事業を円滑に遂行するため、以下のとおり、設置要綱及び構成メンバーを定めた。また、検討委員会は３回実施した。議事概要も併せて示す。

1　設置要綱

令和4年4月20日

令和4年度教員養成機関等との連携による専門人材育成･確保事業に係る明海大学とJ-SHINE等及び連携教育委員会との検討委員会設置要綱

（設置目的）

第１　明海大学は、文部科学省から委託認可を受けた「令和4年度教員養成機関等との連携による専門人材育成･確保事業（以下、「本事業」という。）」を遂行するため、標記の検討委員会（以下、「MEIKAI-JOEプラス2022（MEIKAI, J-SHINE and Office of Education Plus 2022；メイカイジョー･プラス2022）検討委員会」という。）を設置し、本事業を遂行する。

（検討内容）

第２　MEIKAI-JOE プラス2022検討委員会は、次の事項を所掌する。

⑴ 本事業の全体進行管理に関すること。

⑵ 本事業に係る連携教育委員会との間の調整に関すること。

⑶ 本事業の在り方及び成果目標の検討に関すること。

⑷ 本事業の中間評価の実施及び改善策の検討に関すること。

⑸ 本事業の成果公表に関すること。

⑹ その他必要な事項に関すること。

（構成）

第３　MEIKAI-JOE プラス2022検討委員会は、次の委員をもって構成する。

明海大学教員、協力機関（J-SHINE、公益財団法人日本英語検定協会及び小学校英語教育学会愛知支部理事）、足立区教育委員会、浦安市教育委員会、横手市教育委員会、いわき市教育委会、妙高市教育委員会及び狛江市教育委員会の職員

2 MEIKAI-JOE プラス2022検討委員会には、委員長及び副委員長を置く。

3 委員長は、明海大学副学長の職にある者を当てる。

4 副委員長は、委員長が指名する。副委員長は、委員長を補佐し、委員長が不在のときはその職務を代理する。

5 委員長は、必要があると認めるときは、関係者の出席を求め、その意見を聞くことができる。

6 委員は、別表１のとおりとする。

（設置期間）

第４　MEIKAI-JOE プラス2022検討委員会の設置期間は、MEIKAI-JOE プラス2022検討委員会が設置された日から令和5年3月23日までとする。

（講座開発･実施チーム）

第５　MEIKAI-JOE プラス2022検討委員会の下に、専門人材の育成･確保のための講座内容を決定し実施するための、講座開発･実施チームを設置する。

2. 講座開発･実施チームの委員は、別表２のとおりとする。

（庶務）

第６　MEIKAI-JOEプラス2022 検討委員会の庶務は、明海大学企画広報課及び明海大学地域学校教育センターにおいて処理する。

（その他）

第７　この要綱に定めるもののほか、MEIKAI-JOE プラス2022検討委員会の運営に関し必要な事項は、明海大学企画広報課及び明海大学地域学校教育センターが別に定める。

附　則

この要綱は、令和4年4月20日から施行する。

2　MEIKAI-JOEプラス2022検討委員会　委員名簿

別表１

	氏名	所属部署・職名	役割分担（専門分野等）
明海大学	高野　敬三	副学長	委員長 （教育行政、英語教育等）
	石鍋　浩	教職課程センター・ 地域学校教育センター教授	講座開発・実施リーダー （学校経営、英語教育等）
	金子　義隆	教職課程センター・ 地域学校教育センター教授	講座開発・実施サブリーダー （応用言語学、第二言語習得、英語教育等）
協力機関	吉田　研作	公益財団法人日本英語検定協会会長 (上智大学名誉教授)	副委員長、講座開発・実施チーフアドバイザー等 （英語教育、言語学）
	藤田　保	J-SHINE専務理事 (上智大学言語教育研究センター長・教授)	講座開発・実施アドバイザー等 （言語学、英語教育）
	井熊　ひとみ	J-SHINE理事（共愛学園前橋国際大学 客員教授、育英短期大学非常勤講師）	講座開発・実施アドバイザー等 （言語学、英語教育）
	池田　周	小学校英語教育学会愛知支部理事 （愛知県立大学外国語学部教授）	講座開発・実施アドバイザー等 （英語教育、言語学）
	古畑　儀行	公益財団法人日本英語検定協会 参与	講座開発・実施推進調整担当
連携教育委員会	田巻　正義	足立区教育委員会 学力定着推進課長	講座開発・実施推進調整担当
	石川　三佳	浦安市教育委員会 指導課長	講座開発・実施推進調整担当
	桐原　悦子	横手市教育委員会 教育指導課長	講座開発・実施推進調整担当
	津田　直人	いわき市教育委員会 総合教育センター研修調査室長	講座開発・実施推進調整担当
	江口　賢哉	妙高市教育委員会 こども教育課参事	講座開発・実施推進調整担当
	角田　恒一	狛江市教育委員会 教育部指導室　統括指導主事	講座開発・実施推進調整担当

3　MEIKAI-JOEプラス2022検討委員会事務局

	氏名	所属部署・職名	役割分担（専門分野等）
事務局	永田　美絵	企画広報課長	全体統括
	磯見　隆行	企画広報課課長補佐	経理事務・広報総括
	辻井　文男	企画広報課主任	経理事務・広報
	玉貫　美幸	学事課・教務担当	経理事務補助
	坂本　純一	教職課程センター・ 地域学校教育センター教授	調整担当
	米村　珠子	教職課程センター・ 地域学校教育センター教授	調整担当

4　検討委員会議事概要

会　議　名	第1回検討委員会
日　　時	令和4年5月12日(木)　午前9時00分から1時間程度
場　　所	Zoomによる開催
出席者（敬称略）	高野委員長、石鍋委員、金子委員、吉田委員、藤田委員、井熊委員、池田委員、古畑委員、田巻委員、石川委員、桐原委員、津田委員、江口委員、角田委員

【議題】

1　学長あいさつ　　明海大学長　安井　利一
2　検討委員会委員長あいさつ　　明海大学副学長　高野　敬三
3　検討委員会委員自己紹介
　＊事務局及び講座開発･実施チーム、再委託機関も自己紹介
4　協議
　(1) 事業実施計画書について
　(2) 検討委員会設置要綱(案)について
　(3) 検討委員会委員名簿について
　(4) 講座開発･実施チームに係る設置要項(案)について
　(5) 講座開発･実施チーム委員名簿について
　(6) 事業推進計画について
　(7) MEIKAI-JOEプラス2022講座内容等一覧(案)について
　(8) MEIKAI-JOEプラス2022講座内容調査回答まとめについて
　(9) MEIKAI-JOEプラス2022第7回～第12回講座の授業研究について
　(10) 各教育委員会へのレンタル機器の配備について
　(11) MEIKAI-JOEプラス2022共有アドレスの活用方法について
　(12) 講座評価アンケートについて
　(13) リフレクションシートについて
　(14) 各講座に係るZoomのURL等及びアンケート、リフレクションシートに係るGoogle FormsのURLの送付について
　(15) 「Zoomによる小学校英語･なんでも相談交流室」の開設について
　(16) MEIKAI-JOEプラス2022 ボランティア･オブザーバー参加について
　(17) 再委託先ハルからの講義配信への参加方法の説明について
　(18) 再委託先ハルからの授業動画の撮影について
　(19) MEIKAI-JOEプラス2022講座日程、講座内容及びWebページアップロード関係について
5　その他
　⇒特になし。
　＊協議の結果、すべてに異論なし。

会　議　名	第2回検討委員会
日　　時	令和4年9月15日(木)　午前9時から1時間程度
場　　所	Zoomによる開催
出席者(敬称略)	高野委員長、石鍋委員、金子委員、吉田委員、藤田委員、井熊委員、池田委員、古畑委員、田巻委員、石川委員、桐原委員、津田委員、江口委員、角田委員

【議題】

1　検討委員会委員長あいさつ　　明海大学副学長　高野　敬三
2　協議
　(1) 評価アンケート結果(第1回～第8回)について
　(2) リフレクションシート記述概要(第1回～第8回)について
　(3) MEIKAI-JOEプラス2022　出席者数一覧について
　(4) 第1回「Zoomによる小学校英語･なんでも相談交流室」の実施内容等について
　(5) 全講座総合評価アンケートについて
　(6) MEIKAI-JOEプラス報告書について(執筆依頼)
3　その他
　⇒特になし。
4　検討委員会副委員長あいさつ　　日本英語検定協会会長　吉田　研作
　＊協議の結果、すべてに異論なし。

会　議　名	第3回検討委員会
日　　時	令和5年2月27日(月)　午前9時から1時間程度
場　　所	Zoomによる開催
出席者(敬称略)	高野委員長、石鍋委員、金子委員、吉田委員、藤田委員、井熊委員、池田委員、古畑委員、田巻委員、石川委員、桐原委員、津田委員、江口委員、角田委員

【議題】

1　検討委員会委員長あいさつ　　明海大学副学長　高野　敬三
2　協議
　(1) MEIKAI-JOEプラス2022各講座出席者数について
　(2) 講座内容に対する評価について(第９回～第12回講座を中心に)
　(3) 講座受講による意識の変容について(第９回～第12回講座を中心に)
　(4) 「Zoomによる小学校英語･なんでも相談交流室」の実施内容について
　(5) 講座運営に対する評価について
　(6) 各教育委員会からの総括
　(7) 各講座からの総括
3　その他
　⇒特になし。
4　検討委員会副委員長あいさつ　　日本英語検定協会会長　吉田　研作

5. 講座開発・実施チーム設置要項及び講座開発・実施チーム委員名簿

本事業を円滑に遂行するため、以下のとおり、設置要項及び構成メンバーを定めた。

1　設置要項

令和4年4月20日

講座開発・実施チームに係る設置要項

（設置）

第１　明海大学は、文部科学省から委託認可を受けた「令和4年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業（以下、「本事業」という。）」を遂行するため、「令和4年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業に係る明海大学とJ-SHINE等及び連携教育委員会との検討委員会設置要綱」第5に規定された、講座開発・実施チームを設置する。

（検討内容）

第２　講座開発・実施チームは、本事業を遂行するために、文部科学省から認可を受けた本事業の事業実施計画書に示した講座を開発し実施する。

⑴ オンラインによる12回の講座の開発に関すること。

⑵ 各講座について、オンデマンド配信する講座内容・資料の作成に関すること。

⑶ オンライン講座の実施に関すること。

⑷ 各講座間の調整に関すること。

⑸ その他必要な事項に関すること。

（構成）

第３　講座開発・実施チームは、次の各号に掲げる委員をもって構成する。

⑴ 明海大学教員、協力機関（J-SHINE、公益財団法人日本英語検定協会及び小学校英語教育学会愛知支部理事）、足立区教育委員会、浦安市教育委員会、横手市教育委員会、いわき市教育委員会、妙高市教育委員会及び狛江市教育委員会の職員

⑵ 再委託業者として、㈱ハル職員

２ 講座開発・実施チームには、講座開発統括責任者及び講座開発・実施リーダーと講座開発・実施サブリーダーを置く。

３ 講座開発統括責任者は、明海大学副学長の職にある者を当てる。

４ 講座開発・実施リーダーは、講座開発統括責任者が指名する。講座開発・実施リーダーは本事業の講座の内容決定や実施に係る職務に当たるとともに、講座開発統括責任者を補佐し、講座開発統括責任者が不在のときはその職務を代理する。

５ 講座開発・実施サブリーダーは講座開発・実施リーダーを補佐する。

６ 全12回の講座の実施に関して、講座開発・実施チーフアドバイザーの下、講座開発・実施アドバイザーを置く。チーフアドバイザー及びアドバイザーは全12回の講座内容や実施方法などについて指導・助言を行う。

７ 委員は、別表２のとおりとする。

（設置期間）

第４　講座開発・実施チームの設置期間は、講座内容・実施チームが設置された日から令和5年3月23日までとする。

（再委託機関）

第５　講座開発・実施チームが円滑に講座を実施するために、㈱ハルを本事業の再委託機関とする。

２ 再委託機関は講座開発・実施チームと連携して事業の遂行に当たる。

（庶務）

第６　講座開発･実施チームの庶務は、地域学校教育センター及び明海大学企画広報課において処理する。

（その他）

第７　この要項に定めるもののほか、講座内容実施チームの運営に関し必要な事項は、明海大学地域学校教育センター及び明海大学企画広報課が別に定める。

附　則

この要項は、令和４年4月20日から施行する。

2　講座開発･実施チーム委員名簿

別表２

	氏名	所属部署･職名	役割分担（専門分野等）
明海大学	高野　敬三	副学長	検討委員会委員長、講座開発総括責任者
	石鍋　浩	教職課程センター･地域学校教育センター教授	講座開発･実施リーダー （学校経営、英語教育等）
	金子　義隆	教職課程センター･地域学校教育センター教授	講座開発･実施サブリーダー （応用言語学、第二言語習得、英語教育等）
	百瀬　美帆	教職課程センター･地域学校教育センター教授	講座開発･実施担当者 （英語教育等）
	坂本　純一	教職課程センター･地域学校教育センター教授	講座開発･実施担当者 （学校経営、英語教育等）
	米村　珠子	教職課程センター･地域学校教育センター教授	講座開発･実施担当者 （学校経営、英語教育等）
	Patrizia Hayashi	多言語コミュニケーションセンター教授	講座開発･実施担当者 （英語教育等）
	Tyson Rode	多言語コミュニケーションセンター准教授	講座開発･実施担当者 （英語教育等）
協力機関	吉田　研作	公益財団法人日本英語検定協会会長 (上智大学名誉教授)	検討委員会副委員長、 講座開発･実施チーフアドバイザー等 （英語教育、言語学）
	古畑　儀行	公益財団法人日本英語検定協会参与	講座開発･実施アドバイザー
	藤田　保	J-SHINE専務理事 (上智大学言語教育研究センター長･教授)	講座開発･実施アドバイザー等 （言語学、英語教育）
	井熊　ひとみ	J-SHINE理事（共愛学園前橋国際大学 客員教授、育英短期大学非常勤講師）	講座開発･実施アドバイザー等 （言語学、英語教育）
	鈴木　菜津美	J-SHINE事務局長	講座開発･実施アドバイザー
	池田　周	小学校英語教育学会愛知支部理事 （愛知県立大学外国語学部教授）	講座開発･実施アドバイザー等 （英語教育、言語学）
連携教育委員会	三輪　政継	足立区教育委員会 学力定着推進課統括指導主事	講座開発･実施推進調整担当者 （英語教育等）
	高島　健治	浦安市教育委員会 指導課主任主事	講座開発･実施推進調整担当者 （英語教育等）
	鈴木　真弓	横手市教育委員会 教育指導課指導主事	講座開発･実施推進調整担当者 （英語教育等）
	磯上　優美	いわき市教育委員会総合教育センター 研修調査室指導主事	講座開発･実施推進調整担当者 （英語教育等）
	重野　準司	妙高市教育委員会 こども教育課指導主事	講座開発･実施推進調整担当者 （英語教育等）
	吉田　浩幸	狛江市教育委員会 教育部指導室指導主事	講座開発･実施推進調整担当者

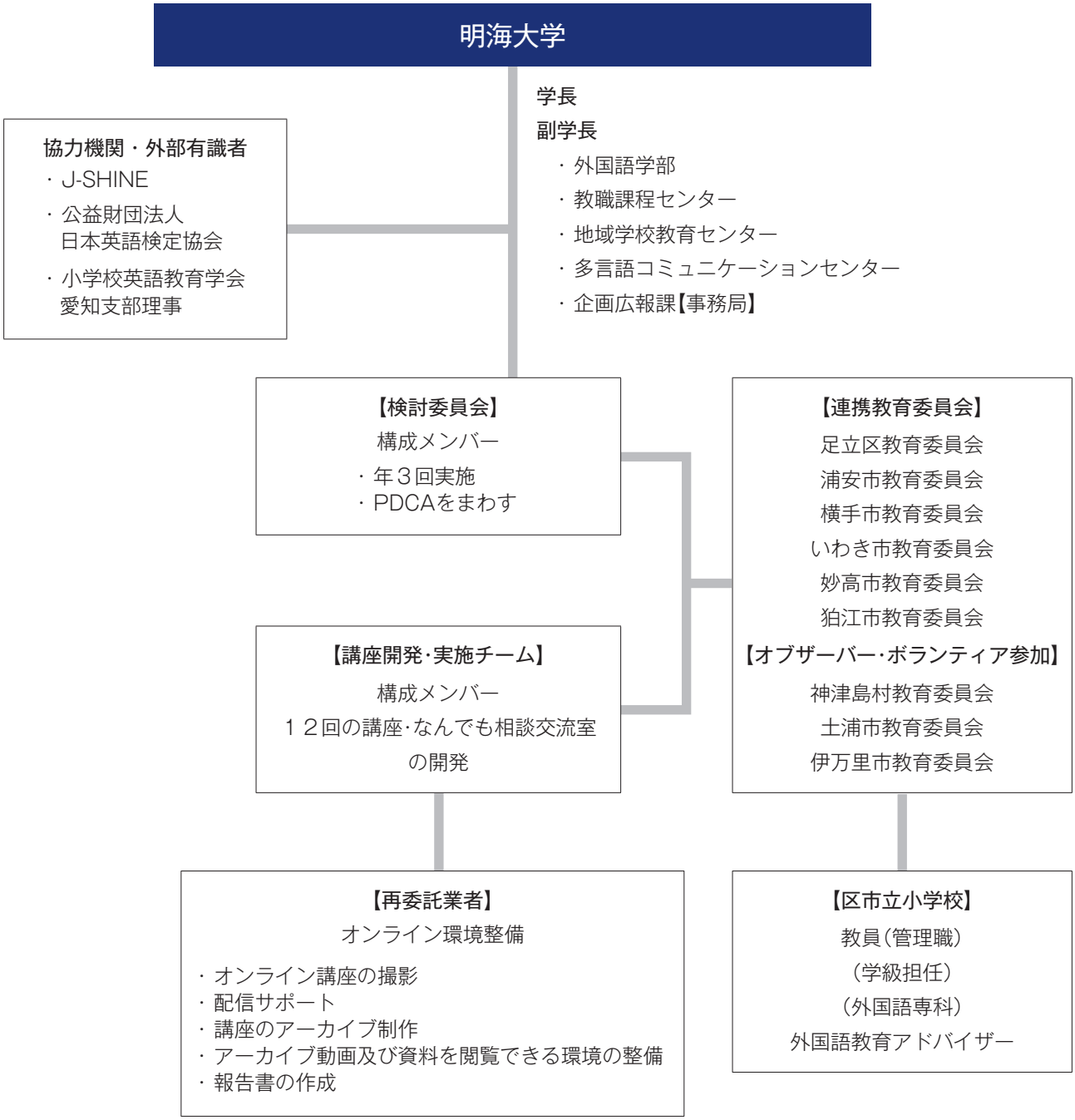
再委託機関 ㈱ハル

	氏名	所属部署・職名	役割分担（専門分野等）
再委託機　関	武藤　雅飛	㈱ハル 執行役員	委託業務統括責任者
	木藤　美紗希	㈱ハル 第1営業部	オンライン環境整備 （講座撮影配信、アーカイブ作成）等担当者
	平岡　夏実	㈱ハル　アライアンス企業 株式会社ワンダーストラック	
	三谷　奈菜子	㈱ハル　アライアンス企業 株式会社ワンダーストラック	
	畑　季枝	㈱ハル 第2営業部	委託業務担当者

講座開発・実施チーム　事務局

	氏名	所属部署・職名	役割分担（専門分野等）
事務局	永田　美絵	企画広報課長	全体統括
	磯見　隆行	企画広報課課長補佐	経理事務・広報総括
	辻井　文男	企画広報課主任	経理事務・広報
	坂本　純一	教職課程センター・地域学校教育センター教授	全体統括
	米村　珠子	教職課程センター・地域学校教育センター教授	全体統括
	玉貫　美幸	学事課・教務担当	経理事務補助

6. 組織図：協力・連携体制


明海大学
学長
副学長
・外国語学部
・教職課程センター
・地域学校教育センター
・多言語コミュニケーションセンター
・企画広報課【事務局】
協力機関・外部有識者
・J-SHINE
・公益財団法人
日本英語検定協会
・小学校英語教育学会
愛知支部理事
【検討委員会】
構成メンバー
・年３回実施
・PDCAをまわす
【連携教育委員会】
足立区教育委員会
浦安市教育委員会
横手市教育委員会
いわき市教育委員会
妙高市教育委員会
狛江市教育委員会
【オブザーバー・ボランティア参加】
神津島村教育委員会
土浦市教育委員会
伊万里市教育委員会
【講座開発・実施チーム】
構成メンバー
１２回の講座・なんでも相談交流室
の開発
【再委託業者】
オンライン環境整備
・オンライン講座の撮影
・配信サポート
・講座のアーカイブ制作
・アーカイブ動画及び資料を閲覧できる環境の整備
・報告書の作成
【区市立小学校】
教員（管理職）
（学級担任）
（外国語専科）
外国語教育アドバイザー

Ⅱ 講座概要

第1回講座　令和4年5月24日（火）午後3時20分～午後4時20分

新学習指導要領の原点

講座詳細ページ▶

上智大学名誉教授　日本英語検定協会会長
吉田 研作

参加者　拠点校 85名　拠点校外 64名

概要

本講座では今回の学習指導要領が従来のものとどう違うのかについて説明しました。なぜ、今回の学習指導要領が今までにないものになっているのかについてその理論的背景を考えながら、具体的な教育理念と学習、指導のあり方について見ていきました。現在はまだまだ「教室」という「金魚鉢」的な環境の中での英語教育が中心に議論されていますが、今後は、そこで学んだ英語をどのように活かすかについて考えなければならなくなるでしょう。現代のネット時代における「教室」の概念は従来のものとは変わってきています。そして、そのような新時代の教育環境に見合った英語教育は、まさに「大海」で英語が使えることを念頭に置いたものでなければなりません。本講座では、このような点について皆さんと一緒に考えていきました。

事前課題

平成20年の学習指導要領の中学校英語（小学校はまだ外国語活動しかないので）の目標と内容と、新学習指導要領の中学校英語の目標と内容を比べて、その違いについて考えてみてください。

講座の流れ

Fish Bowl（金魚鉢）モデル /Open Seas（大海）モデル	・金魚鉢の金魚 ・大海を泳ぎ回る魚
新学習指導要領の考え方	・従来の考え方（演繹的学習） ・新学習指導要領の考え方（帰納的学習）
新学習指導要領の基準	・Can-do statements（～ができる）　・Can-do に基づくコミュニカティブな基準 ・中高レベルのコミュニケーション能力の基準
学習指導要領の基本的考え方	・新学習指導要領における知識、技能と思考力、判断力、表現力の関係、Can-do と言語形式を結びつける具体例 ・AccuracyとAcceptabilityの関係
大海で泳げるようになるための英語教育	・何を知っているかではなく何ができるか（Can-do） ・教室は徐々にOpen Seas 化されてきている

事後課題

小学校学習指導要領の4技能5領域から一つ選び、配布資料の例を参考に3･4人のグループでできる具体的な言語活動とそこで用いられる言語材料を考えてみよう。

第2回講座　令和4年6月28日（火）午後3時20分～午後4時20分

ティーム・ティーチングにおける評価 について

講座詳細ページ▶

明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授
百瀬 美帆
米村 珠子

明海大学多言語コミュニケーンションセンター教授
パトリツィア・ハヤシ

明海大学多言語コミュニケーションセンター准教授
タイソン・ロード

参加者　拠点校 72名　拠点校外 62名

概要

本講座ではティーム・ティーチングにおける評価について説明しました。冒頭の講義に続きワークショップでは、形成的評価を行う学級担任や専科教員（T1）がALT（T2）に協力を求めながら授業を進める方法を講師が実演した後、受講者も演習を行いました。また講師との質疑応答において、受講者が日ごろのティーム・ティーチング時に感じている疑問や不安を受講者間で共有し、講師から助言を行いました。

事前課題

文部科学省mextchannel「「なるほど！小学校外国語③」学習評価」の動画（35分49秒）を視聴し、学習評価についての理解を確認してください。

講座の流れ

学習評価の概要	・学習評価の意義 ・観点別評価の留意点 ・指導と評価の単元計画例
ティーム・ティーチングにおける評価の役割分担	・２種類の評価（記録に残さない評価・指導（学習）に生かす評価と記録に残す評価） ・全体をほめる 個別にほめる ・効果的にほめる ・チェックリストの活用
まとめ	・「ほめことば」を使って学習改善を促し自信を育む

事後課題

[講座詳細ページ]の二次元コードより、教師用表現付き評価用チェックリストをダウンロードして、自身の授業において形成的評価を行う際の活用方法等を学校で同僚と分かち合い、さらなる授業及び評価実践に活かしてください。

第3回講座　令和4年7月28日（木）午後1時30分～午後2時40分

「聞くこと」「話すこと」の指導

講座詳細ページ▶

J-SHINE理事　共愛学園前橋国際大学客員教授　育英短期大学非常勤講師
井熊 ひとみ

参加者　拠点校 94名　拠点校外 59名

概要

「小学校外国語活動」・「外国語」の授業において学習指導要領で求められている目標を理解し、その技能や資質、能力をどのような手順で育成するかを学びました。日本に育つ子どもたちが英語に触れ、学ぶプロセスからコミュニケーションに意欲をもって学びを進められるかを先生方と一緒に探していきました。そのための目的、場面設定、状況をどのように創り出していくか、そのためにはどのようなコミュニケーションが必要で子どもたちの気付きを促せるような活動を行うかを考えていきました。

事前課題

①「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」（文部科学省）をよく読んでおいてください。
②文科省「なるほど！小学校外国語①」言語活動　YouTube動画を視聴しておいてください。

講座の流れ

「聞くこと」「話すこと」の指導法について	・本講座の目的 ・「言語活動」の設定、「言語活動を通して」 ・「言語活動」って何？
「ことばを学ぶ」とは	・言葉を学ぶことの始めは「体験」から ・「体験」のためには、「場面」が必要 ・「目的」のためには、「言いたい活動」が必要 ・Small Talkで単元のねらいを導入してみる

事後課題

夏休み明けのそれぞれの学校における単元について、どのような「聞く」「話す」活動ができるか校内で話し合ってみましょう。

第4回講座　令和4年7月28日（木）午後2時50分～午後4時00分

「読むこと」「書くこと」の指導

講座詳細ページ▶

小学校英語教育学会愛知支部長 愛知県立大学教授
池田 周

参加者　拠点校 95名　拠点校外 59名

概要

小学校「外国語」では、「読むこと」の領域の目標イとして「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする」が設定されています。この目標に向けた指導について、小学校学習指導要領（平成29年告示）外国語・外国語活動編には、「児童の学習の段階に応じて，語の中で用いられる場合の文字が示す音の読み方を指導することとする。その際，中学校で発音と綴りとを関連付けて指導することに留意し，小学校では音声と文字とを関連付ける指導に留めることに留意する必要がある。」と述べられています (p.78)。本講座では、この指導の目指すところは何か、また、どのような理論に基づくものかの理解を目標とするとともに、そこから発展させた「読むこと」と「書くこと」の領域の指導における支援や工夫のあり方について具体的に考えていきました。

事前課題

文部科学省 mextchannel より、【なるほど！なっとく！小学校外国語(1)】教科指導の留意点を視聴してください。

講座の流れ（略案）

音韻認識について	・文節、語、音の数 ・なぜ音韻認識が必要なのか ・学習指導要領はどう表しているか
初期読み指導にどう生かすか	・音韻認識を育むワーク
「読むこと」「書くこと」の小中接続に向けて	・読むこと ・書くこと

事後課題

講座内容を基に、各校で使用する検定教科書で「読むこと」の領域の目標イが、どのような活動として扱われているかを確認してみましょう。また、その指導においてどのような支援や工夫を行うことができるか、同僚と話し合ってみましょう。

第5回講座　令和4年8月1日（月）午前9時30分～午前10時40分

言語活動の効果を高めるための工夫とパフォーマンス評価

講座詳細ページ▶

明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授
金子 義隆

参加者　拠点校 81名　拠点校外 60名

概要

本講座では、「言語活動」の基本的な考え方を確認した後に言語活動の効果を高めるための工夫について、受講者の皆さんと考えました。学習指導要領で意図された言語活動を実践するために３つの工夫（必然性のある場面設定、インタラクションの働き、フィードバック）について扱いました。最後に、評価の基本的な考え方について確認しました。

事前課題

文部科学省mextchannelの「小学校の外国語教育はこう変わる！⑧～児童の意欲を高めるゴール設定の在り方～」（12分弱）を視聴して、ビデオ内のコミュニケーション活動を行う際の必然性のある場面設定のやり方を参考にして、学んだことや疑問に思ったことなどを考えておいてください。

講座の流れ（略案）

言語活動とその意義	・「言語活動」とは ・授業の中心は言語活動
言語活動の効果を高める３つの工夫	・必然性の設定 ・インタラクション中のuh-huhを大事に。 ・教師のフィードバックの活用
言語活動の評価：パフォーマンス評価と実施までのプロセス	・パフォーマンス評価の重要性 ・パフォーマンス評価のルーブリックとは ・パフォーマンス評価を実施するまでのプロセス ・パフォーマンス評価における留意点

事後課題

この講座で学んだことを基にして、自身の外国語（活動）の授業を振り返り、その優れた点・改善すべき点について学校で同僚と分かち合い、更なる授業実践に活かしてください。

第6回講座　令和4年8月1日（月）午前10時50分～午前12時00分

学校段階間の接続の重要性

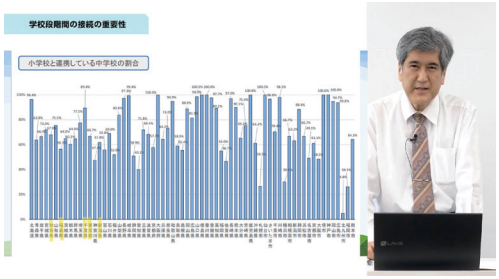
講座詳細ページ▶

明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授
石鍋 浩
坂本 純一

参加者　拠点校 75名　拠点校外 56名

概要

小学校段階において育むべき資質・能力を、三つの柱に沿って、教育課程全体及び教科等ごとに明確化し、中学校以後の学びに円滑に接続させることが求められています。本講座では、各地区における学校段階間の接続の成果と課題を出し合い、小学校から中学校以後の指導へ円滑に接続できるようにするための指導方法や言語活動等について考えていきました。



事前課題

各地区における学校段階間の接続の成果と課題について他校・他地区の参加者と協議できるようにしておきましょう。

講座の流れ（略案）

これからの時代に求められる資質・能力	・小・中・高に共通する「見方・考え方」 ・各地区の連携・接続の状況
小学校・中学校間の連携・接続の成果と課題	・ 各地区における「成果」と「課題」 ・外国語科の目標 ・ 小中接続の具体例 ・ ＋αとして（提案）

事後課題

中学校以後の学びへの円滑な接続を意識した指導を実践し、指導方法・内容や児童生徒の変容を他の先生方と情報交換しましょう。

第7回講座　令和4年8月2日（火）午前9時30分～午前10時40分

授業研究①
Team-Teaching

講座詳細ページ▶

授業者氏名	小西 了太 メアリー ビアンカ インフェブル
学校名	浦安市立日の出南小学校
担当学年	第6学年
使用教科書	NEW HORIZON Elementary English Course6（東京書籍）
単元名	Unit 3　Let's go to Italy.
講 師	百瀬美帆（明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授） 米村珠子（明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授） パトリツィア・ハヤシ（明海大学多言語コミュニケーンションセンター教授） タイソン・ロード（明海大学多言語コミュニケーションセンター准教授）

参加者　拠点校 92名　拠点校外 59名

概要

本時は、全８時間中の２時間目の授業でした。旅行代理店のスタッフとして、外国について紹介をする活動につなげる前段階の授業としました。児童に提示するめあては、「行きたい国について話そう」としましたが、授業の構成としては、前半を単語や文を聞き取るための活動、後半を「話すこと［やり取り］」につなげるための活動としました。

事前課題

授業動画（浦安市立日の出南小学校）の視聴

協議概要

浦安市では、文部科学省から教育課程特例校の指定を受け、市独自のカリキュラム（小学校１・２年生で年間14時間）の外国語活動を行っている。授業は、学級担任（一部、英語専科教員）とALTのティーム・ティーチングの体制を基本としており、早い時期から児童がALTとコミュニケーションをとりながら、英語に慣れ親しむことができるよう工夫をしている。こうした環境を十分に生かしていきたいところだが、学級担任によっては、ALTとの役割分担が適切に行われず、ティーム・ティーチングの利点が最大限生かし切れていない面が見受けられ、本市の課題となっている。

そこで、今回授業を行うにあたり、「ティーム・ティーチングの役割分担が適切であるか」を動画視聴のポイントとして掲げ、各地区の先生方に協議を行っていただいた。その際、視聴いただいた先生方からの主な意見は、以下のとおりである。

各市より

・ALTとしっかり打ち合わせをして役割分担をしながら授業を進められていることが感じられた。
・ALTだけでなく、英語専科教員も英語をたくさん話しておりバランスがよかった。
・児童を指名する際、英語専科教員だけでなく、ALTも児童を指名しているところがよかった。
・児童がALTの話を聞く機会がたくさんあってよかった。
・英語専科教員の褒め言葉や、学級全体でも仲間をほめる掛け声などが多くあり、話しやすい雰囲気が教室に生まれている。
・児童の発言に対して英語専科教員の反応がとてもよいので、ALTにも同じように反応をしてもらえるとよい。
・各活動のはじめに英語専科教員がリードして、これからどのような活動を行うのかを（日本語でもいいので）伝えると、もっと授業内容がわかりやすくなるのではないか。
・行きたい国について話したり聞いたりする活動なので、児童が本当に行きたいと思っている国を考えさせる時間をとったり、「友達の行きたい国を聞きたい！」と思わせたりするような場面を授業内につくると、より活動が活発になる。

第8回講座　令和4年8月2日（火）午前10時50分～午前12時00分

講座詳細ページ▶

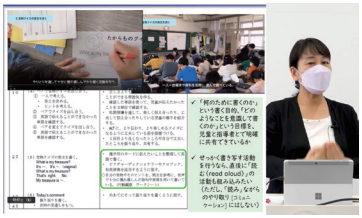
授業研究②
読むこと・書くことの指導

授業者氏名	下田 祐子
学校名	足立区立寺地小学校
担当学年	第6学年
使用教科書	NEW HORIZON Elementary English Course6（東京書籍）
単元名	Unit 2 How is your school life?
講 師	小学校英語教育学会愛知支部長 池田周（愛知県立大学教授）

参加者　拠点校 85名　拠点校外 60名

概要

足立区では、第６学年の授業を提案しました。本動画では、「ALTに伝わるような宝物クイズを出して考えよう」というめあてのもと、友達とのやり取りを繰り返し行い、表現に十分に慣れ親しんだ上でワークシートに書く活動場面を収めました。子どもたちが「書くこと」の資質能力を身に付けていくための効果的な指導方法についてみなさんと一緒に考えていきました。



事前課題

授業動画（足立区立寺地小学校）の視聴

協議概要

動画視聴にあたり、以下の２点の視点を提示し、小グループに分かれて協議を行った。参加者から寄せられた主な意見及び質問とその回答を記す。

本時の目標を達成するための手立てについて（特に、「やり取り」、「中間指導」を繰り返し、児童が表現に十分に慣れ親しんだ上で、宝物クイズを「書く」活動を行う展開について）

・やり取りを十分に行い、音声で十分に慣れ親しんでから書く活動を行っていた。ワークシートにはなぞる部分があり、無理なく子どもたちが取組むことができていた。

・一生懸命伝えようとしたり、クイズをわかりやすくしたりしようとする児童の思いが感じられる授業だった。伝えたい内容があるが、どう表現したらよいかわからないときに、みんなで考える中間指導の時間があったことで、子どもたちが安心して表現できていた。

小学校の段階で「書くこと」の指導を行う際、どの程度とするかについて。

・本時の計画では書く時間が１５分設定されていた。クイズがもう仕上がっている児童もいるように見えた。次時（第７時）も書く活動が中心であることから、クイズを完成させてしまった子にはどのような指導をしたのか。
→やりとりを十分に行っているとはいえ、書く活動は子どもたちにとって難しい活動であると考えていた。次時の書く活動までに添削の時間を確保したかった。また、児童の書く活動の様子を見て次時の展開を考えることができるようにした。早い段階でクイズを完成させた児童には、よりよい表現を考えたり、苦手な子に教えたりするように言葉掛けをした。

授業全体について

・子どもたちの意欲が高い。
・コミュニケーションの必然性があった。
・振り返りの視点が明確だった。
・子どもたちが間違いを恐れずに表現していた。
・学習の積み重ねを感じた。

第9回講座　令和4年9月22日（木）午後3時20分～午後4時20分

講座詳細ページ▶

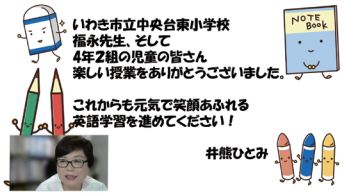
授業研究③
聞くこと・話すことの指導

授業者氏名	福永 祐一郎
学校名	いわき市立中央台東小学校
担当学年	第4学年
使用教科書	Let't try 2（文部科学省）
単元名	Unit5 Do you have a pen?
講 師	井熊ひとみ （J-SHINE理事　共愛学園前橋国際大学客員教授　育英短期大学非常勤講師）

参加者　拠点校 62名　拠点校外 63名

概要

いわき市では、「児童の伝えたいという思いを引き出し、英語表現を使って伝えることの楽しさや相手に伝わった時の喜びを感じながら、外国語に慣れ親しむ児童の育成」というテーマで、第４学年の授業を提案しました。本動画には、単元（総時数４時間）の第３時の「友達に自分の文房具セットを伝えよう」という場面を収めました。授業者と児童、また児童同士が、自然な流れの中で英語でのやり取りができるよう、場面設定を工夫しました。



事前課題

授業動画（いわき市立中央台東小学校）の視聴

協議概要

成果として考えられる点

・英語のあいさつで始まり、学級担任がSmall Talkで児童とやり取りをしてから、本日のめあての確認という授業の流れが良かった。
・学級担任が元気でテンションが高いので、児童もテンションが高かった。
・学級担任と児童との信頼関係があり、児童は安心感をもって学習していた。
・学級担任がゆっくり話していたので、児童にとって分かりやすかった。
・児童に使わせたい英語表現を、何度も繰り返して使わせていた。
・児童が、相手に自分の英語が伝わったという喜びを感じていた。
・終末に本時の学習の振り返りをして、学級全体で共有していた。

改善や検討が必要と思われる点

・言語活動の場面設定について、文房具の紹介をするのであれば、紹介する相手に「Do you have ～　?」と質問を加えるのが自然ではないか。
・学校では、あまり多彩な文房具を使用することはできないので、児童がGIGA端末で家庭にある文房具を撮影して、授業で活用すると良いのではないか。
・キーセンテンスを言いたくなるような場面設定をすると良いのではないか。例えば、忘れ物をした児童が、文房具をもっているかについて友達に質問するなど。
・言語活動の中間指導の際に、ジェスチャーに注目した児童モデルを取り上げていたが、友達とのやり取りの内容にも注目したほうが良いのではないか。

第10回講座　令和4年10月25日（火）午後3時20分～午後4時20分

授業研究④
Team-Teaching

講座詳細ページ▶

授業者氏名	菊地 大地
学校名	横手市立横手南小学校
担当学年	第4学年
使用教科書	Let't try 2（文部科学省）
単元名	Unit5 Do you have a pen?
講 師	百瀬美帆（明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授） 米村珠子（明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授） パトリツィア・ハヤシ（明海大学多言語コミュニケーンションセンター教授） タイソン・ロード（明海大学多言語コミュニケーションセンター准教授）

参加者　拠点校 85名　拠点校外 66名

概要

横手市では、効果的なティーム・ティーチングによる学びの充実を目指して、第４学年の授業を提案しました。本動画には、単元（全４時間）の４時間目の学習場面を収めました。指導者が協働して授業をつくり、充実した指導・評価ができるように、ご参加の皆様と共に考えていきました。

事前課題

授業動画（横手市立横手南小学校）の視聴

協議概要

授業動画の視聴後に、グループに分かれて、次の２点について協議した。それぞれの観点について、参加者から寄せられた主な意見を記す。

（１）参考にしたい点

①学習の流れがスムーズであった。

⑴ 興味関心を高める学級担任とALTとのデモンストレーション

⑵ 本時のねらいの確認

⑶ 見通しと自信をもたせるALTと児童とのやり取り、児童同士のやり取り

⑷ 全体でのコミュニケーション活動

一つ一つに意味があり、効果的な学習過程であった。

②「必然性のあるコミュニケーション活動」が設定されていた。各児童が自分のお気に入りの物を入れたマイバッグを持参することで、ワクワクしながら互いのバッグの中身をたずね合っていた。言語活動を行う際の場面設定の大切さとその効果を実感した。

③「やり取りの広がり」を意識した指導が行われていた。指導者はターゲットセンテンスに１・２文を加えて楽しく自然なやり取りをし、モデルを提示していた。また好意的なリアクションが行われているペアの姿を全体で共有するなど、自ら考え、場面に応じたやり取りを楽しむことができる工夫がされていた。

④学級担任とALTとの役割分担がよくなされていた。特に、Hi, friends!の当該単元では扱われていない語がやり取りの中で必要になった時には、”What is ○○ in English?”と学級担任がALTにたずね、ALTが英語での言い方を紹介し、児童が語彙を習得していく場面が参考になった。

（２）ALTとのティーム・ティーチングを充実させるための改善案

①本時のコミュニケーション活動においては、Hi,friends!では扱われていない語彙が多く使われていた。それらのことばをALTにたずねる機会を設け、さらなることばの習得につなげられるようにすること。例えば、中間評価の機会を設け、「英語で伝えたかったが、言えなかったことば」を共有し、ALTに教えてもらう機会を作るなど。

②評価においても、学級担任とALTが協力して行うように協働すること。

第11回講座　令和4年11月14日（火）午後3時20分～午後4時20分

講座詳細ページ▶

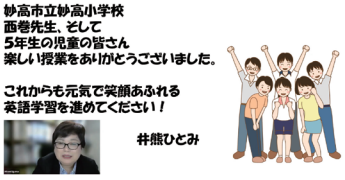
授業研究⑤
聞くこと・話すことの指導

授業者氏名	西巻 愛海 マイケル・レーダー
学校名	妙高市立妙高小学校
担当学年	第5学年
使用教科書	Blue Sky elementary 5（啓林館）
単元名	Unit 4　She can sing well.
講 師	井熊ひとみ （J-SHINE理事　共愛学園前橋国際大学客員教授　育英短期大学非常勤講師）

参加者　拠点校 49名　拠点校外 55名

概要

妙高市では、５年生の授業を提案しました。本時のゴールを「妙高小学校の先生のことをもっとよく知るために、『Who am I?クイズ』を通して、できることやできないこと、好きなものなどについてやり取りすることができる」と設定しました。そして、単元の指導計画や本時の展開における活動を、バックワードで、かつ、スモールステップで配列し、児童が無理なくゴールに到達できるように工夫して指導しました。児童が自信をもって英語で表現しようとするための指導の在り方についてご協議いただきました。



事前課題

授業動画（妙高市立妙高小学校）の視聴

協議概要

授業動画の視聴後、市区単位でグループ協議を実施した。以下に、協議内容の発表で寄せられた主な意見を記す。

良かった点、継続すべき点

児童がとても落ち着いた雰囲気の中で学習に臨めていた。

- 新出の言語材料であるcanだけでなく、既習事項のAre you ~?やDo you ~?など、様々な表現を使ってWho am I?クイズのやり取りをしていたところが評価できる。
- 窓際に掲示物があって、そこに様々な表現が示されていて、視覚的に復習ができてよかったのではないか。
- 最後にフィードバックの時間が設けられていて、全体で共有することによって、児童が自分の課題なども見つかってよかった。
- 児童からなかなか声が出にくいという空気の中、スモールステップの指導のおかげで児童が少しずつほぐれて、声が出るようになったことが見て取れた。
- 既習事項として児童が使っていたDo you teach P.E.?やDo you have glasses?などの表現は、日ごろから児童がそうした表現に慣れ親しみ、それらを身に付けているということで、少し驚いた。

・中間指導を交えて児童に気づきを与えていたことや言語活動の過程で児童が何をどう話そうかを一生懸命に考えていたことから、コミュニケーションの難しさと同時に、楽しさもこれから味わっていけるのではないか。
・先生方がジェスチャーを多用していたことで、英語が苦手だなと思っている児童も、安心して学習に取り組めていた。
・ペアのやり取りの中で、友だちが考えているときにきちんと待ってあげていて、そこから、教えあったり、支え合ったりする姿が見られてとてもよかった。

課題点、代案

動画を視聴した限りでは繰り返しの活動をあまり見ることができなかったことや、中間指導や机間指導で、先生がどのように児童の表現を引き出したり、修正したりしたのかが気になった。

・クイズのやり取りの際にもっとジェスチャーなどを使った方がよかったと思う。
・新出言語材料のCan you~?の表現があまり児童の中から出てなかったので、教師の指導の在り方として、今回はCan you~?の表現をできるだけ使ってみようというように焦点化するような指導があってもよかった。
・中間指導で、いい取組をしていた児童のやり取りの良さを先生が説明していたが、できれば児童からその良さを引き出させたかったなあと思った。そうすることで、児童がアイコンタクト等のコミュニケーションスキルを、後半はもっと意識して取り組むことができたのではないか。
・最後の振り返りは、視点を与えた振り返りの方がよかった。
・児童は、クイズのネタとなった先生方の情報はどういうふうにもっていたのか。事前に集めた情報をきちんと整理することで、それによってCan you~?の表現をもっと使うことができたのではないか。
・児童の中で、Are you~?とDo you~?の表現の使用について混乱していたと思うが、これらを小学５年生が正しく使い分けるのは難しいと思った。

第12回講座　令和4年12月13日（火）午後3時20分～午後4時20分

授業研究⑥
小中接続

講座詳細ページ▶

授業者氏名	髙山 るり子 楢崎 友哉
学校名	狛江市立和泉小学校・狛江市立狛江第三中学校
担当学年	第6学年（小学校）・第1学年（中学校）
使用教科書	小学校　JUNIOR TOTAL ENGLISH（学校図書） 中学校　Here We Go!（光村図書）
単元名	小学校　Lesson1　自己紹介 中学校　Unit4　Our New Friend Unit6　Cheer Up, Tina
講 師	石鍋浩（明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授） 坂本純一（明海大学教職課程センター・地域学校教育センター教授）

参加者　拠点校 65名　拠点校外 56名

概要

狛江市では「かけはしプロジェクト」として小中の連携を推進する取り組みを行っています。昨年度は小学校から中学校への「学びの接続」のために、「教材」の共有、「内容」の共有、「指導法」の共有という３つの視点を設定して研究を進め、連携授業案を作成しました。今回は、小学校６年生が実際に中学校を訪問し、中学校１年生と直接交流を行った授業を提案しました。小中連携についてお気付きの点や各地区の実践について、ご参加の皆様と協議を深めました。

事前課題

授業動画（狛江市立和泉小学校・狛江市立狛江第三中学校）の視聴

協議概要

【協議の視点①】英語科を軸とした小中連携としてふさわしいものであったか。

参考にしたい点

・小中学生共によく聞き合い、身振り手振りを交えて交流していた。
・活動前に中学生のデモンストレーションがあったので、活動の見通しをもつことができていた。
・お互いに紹介し合うという場面設定が良かったので積極的に活動していた。
・中学校の学習の雰囲気等を体験できる活動は小中連携としてふさわしいと思った。
・小学生にとっては、中学校の学習に向けて目標ができた。中学生にとっては、学習したことを復習するだけではなく、相手意識をもってゆっくり話したり、ジェスチャーをつけて伝えようとしたりする、活用の場面であった。
・小学生にとっては自分の学習の成果を試せる場であった。また、一対一での活動であったため、お互いに相手意識をもった活動となっていた。

改善点・課題点

・小学生にとっては難しい活動であったのかもしれない。
・活動を行うに当たり、準備に時間がかかるのではないか。
・活動のねらいや目標の設定。
・中学生にとっては復習にしかならないのではないか。
・英語力を高めるものとしてはどうか。
・T1 がオールイングリッシュで進めていたが、小学生は分かっていたか。

【協議の視点②】地区の英語科に関する小中連携の実践紹介

・６年生が選択式で、中学校の授業を体験する。
・小中の教員がお互いの授業を見合う。
・中学校教員が、小学校に出前授業を行う。
・中学校で行っている帯活動の一部を小学校でも行う。
・ワークシートの共有。
・Can-Doリストの共有だけではなく、どんな言語活動をしたのか、どんな教材を使ったのかというところまで共有。
・小中でクラスルームイングリッシュを共有。

「Zoom による小学校英語・なんでも相談交流室」

今年度の委託事業から、全12回の講座に加え、新たに追加した、自由参加の相談・交流コーナーである。全3回実施した。実施方法は、再委託機関を通さず、明海大学が指定したZoomに希望者が入室することとした。全3回とも、指導者は、藤田保・上智大学言語教育センター長、教授（J-SHINE専務理事）とした。以下がその概要である。

	実施日	参加者	相談内容	講師からの回答
第1回	7/26（火）15:20～16:20	足立区専科教員 浦安市専科教員 いわき市教員	私は小学校１年生から４年生までの外国語活動を教えている専科教員である。その中で、特に、1、2年生の英語の授業を45分間で楽しく実施することが難しい。	あまり学校で決めているCAN-DO Listに縛られなくてもいいかと思う。歌やゲームなどで活動中心に授業を行ったらいいと考える。アウトプットよりはインプットを重視した方がいいかと思う。そうすることで、アウトプットは３年生からの外国語活動につながっていく。
			私は３年生の外国語活動を教えている学級担任である。どうしても日本語ではこういう意味だと教え、習得させたくなるが、週１回の授業では、習得は難しい。	確かに週１回の授業では定着はしにくい面がある。例えば朝の会や帰りの会などで帯活動として１分程度でいいからフラッシュカードや絵カードなどで英語の単語の復習を行うなどを継続してやることもできる。
			英語の発音は完全には日本語に置き換えることはできないことは分かっているが、英語にひらがなやカタカナでルビを振ることはあまりいい方法ではないと言われているがいかがか。	先生がルビを書いてしまうと、児童は英語そのものに目がいかなくなり、英語に馴染むチャンスがなくなってしまうことになる。また、カタカナあるいはひらがな読みをすることとなり、英語の発音にならないこととなる。したがって、先生がルビを振ることはあまり勧められない。ただし、児童が自分が聞こえた通りに、自分でカタカナやひらがなでルビを振ることはあっていいと考える。
			コロナ禍においては、英語の授業はマスクをしての活動となるが、教師の言っていることがきちんと伝わっているか、また、子どもたちの言っていることをきちんと教師が分かっているか、疑わしい状況にある。	現実問題として学校ではマスク着用で授業をせざるを得ない。これは切実な問題である。ただ、児童に正しい英語の音の出し方を確認させる方法としては、先生が口の形を見せるとき、一瞬マスクを外し、児童に確認させることはできると考える。あるいは、ビデオやスライドの活用も考えられる。
			私は小学校３年と４年の外国語活動を担当している専科教員である。学級担任と異なり、授業以外での子どもたちとの接点が少ない、英語の授業以外で日頃の補強ができない悩みがある。	学級担任にお願いして、教室の横や後方の掲示可能な部分に、学習した単語や表現などを貼っていただくことなどはできるかもしれない。あるいは、朝の会や帰りの会などで、ほんの１分程度でもいいから学習した単語などをフラッシュカードや絵カードなどでやっていただくようにお願いすることも考えられる。
			単元の終わりに、まとめの活動を行わせたいが、何かいい方法はないか悩んでいる。	単元の内容によって、まとめの活動は変わってくると考える。これも学級担任にお願いすることとなるかと思うが、他教科、たとえば社会や理科などで学んだ内容とリンクさせ教科横断的なまとめの活動を行うことなどで、単元で学んだ内容を深めることができると思う。自ら何をやりたいかといった自己選択権を児童に与えれば、モティベーションが高まるまとめの活動を行うことができると考える。
第2回	10/14（金）15:20～16:20	足立区教員 いわき市教員	私は小学校４年生の担任で外国語活動を教えている。小学校と中学校の接続に関して、中学校の先生の認識と小学校の先生の認識の温度差がある。具体的には、中学校の先生方には、小学校で英語をやってきているのに英語を書けないなどの意見がある。	中学校の先生には、小学校での学習内容を学習指導要領などでよく理解していただかなければならない。小学校では、英語の文字や単語を書き写すまでが求められている。こうしたことを分かっていただくためには、教員個人というよりは、教育委員会が小中連携の取組を通して進めていくことが大切である。
			本校は中学校を併設している。私は小学校３年の学級担任をやっていて、外国語活動の時間に中学校の英語の先生と一緒にT.Tで授業を行っている。中学校の先生は、児童の授業の理解度をあまり理解しようとはせず、理解度の低い児童を「置いておく」授業となりがちであり、小学校の先生は私を含めて、「置いておかない」授業を心がけている。どのように対応すべきか。	小学校の先生は萎縮しないでほしい。やはり、児童のことを一番理解しているのは小学校の先生であるから、小学校の先生がT1となって主導権をとり、中学校の先生は、英語の専門家であるから、「これって英語で何と言うのか」などについて児童の支援をT2として行うことがいいと考える。小学校３年生の外国語活動の時間であるからには、児童が英語を楽しんで学ぶことが肝要である。
第3回	12/2（金）15:20～16:20	足立区教員 いわき市教員	私は小学校４年生の担任で外国語活動を教えている。学級では自信のない子が多く進んで外国語活動の授業に参加してくれない。どうしたらいいか。	英語ができないのが当たり前ということを児童に理解させることが大事である。コミュニケーションについては、心理的安全性という概念があるがこれは安心して話すことができる環境について言ったものである。そうした学級の環境づくりが一番大切である。学級づくりにおいてお互いがそれぞれリスペクトできる環境を作り、子どもが自由に英語を口に出す、そんな学級にしていくことが必要である。場合によっては、単語レベルであれば、日本語が多少入っていいとも思う。
			小学校の３年生を担当している。もうこの時期であるから、外国語活動の評価について、何を基準にして、できた、できなかったという線引きをするかについて分からない。	児童が活動に参加していることで良しとしていいのではないか。何から何まで教師がすべて評価するということよりも、CAN-DO Listを提示して、児童自身に評価させ、それを教師として重視することもあると考える。

Ⅲ 講座受講による意識の変容

第１回から第６回

それぞれの講座終了後、受講者には次の6項目についてリフレクションシートに回答するよう求めた。

1	名前
2	所属
3	勤務校
4	講座を受講して新たに学んだことや気づいたことは何ですか？
5	今回学んだことを今後どのように活用したいですか？
6	質問

質問項目５についてのリフレクションシートの内容の集約を１とし、２としてリフレクションシートから見える成果と課題を付記した。

第１回　新学習指導要領の原点

1. リフレクションシートの集約

I can speak Englishと自信をもって言える子どもを育てることを目指して、子どもの反応をほめて伸ばしていきたい。

子どもたちの「話したい」「伝えたい」気持ちを引き出し、「正確さ」でなく「適切さ」ということを意識して指導していきたい。「～ではなくて、～と言うんだよ」と言いがちだった自分と決別したい。

英語は言語なので、間違えながら、話せるようになるものだということを、子どもたちにも伝えていきたい。中学校･高校になると、文法や新しい単語にどんどん悩まされ、苦手な意識が生まれる子が多いのではないかと思うが、小学校のうちに、自分の伝えたいことを英語で話せたという経験、そして自分が頑張って表現した英語が相手に伝わったという経験をたくさんして、中学校や高校ではもっと自分の表現できることが増えて楽しいと思える外国語教育であるといいと思う。そんな経験をさせてあげられる授業を目指したい。

帰納的学習を重視しながら、Noticingをいかに見取ってコミュニカティブな活動を展開できるよう工夫していきたい。

「正確さよりも適切さ」についてこれまでに自分も感じることがあったので、今回の講義を聞きすっきりしたところがある。適切さについても、既習事項や知識の活用に関わる部分だと考えるので、Open seasを見据えて取り組めるよう努めていきたい。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

児童が英語を使う体験を通して「伝えたい」と言う気持ちを醸成し、参加者の多くが「正確さよりも適切さ」にフォーカスした指導が重要であることを認識した。一人でも多くの教員にこの認識を拡大することが今後の課題である。

第２回　ティーム･ティーチングにおける評価について

1. リフレクションシートの集約

ALTと授業を進めていく場合、本時での評価ポイントも事前に打ち合わせてから行いたい。

外国語の授業内だけではなく、子どもをほめるあらゆる場面で活用したい。

全体をほめたり、個別にほめたりできるようなほめ方のバリエーションが増えたので、活用していきたい。子どもの頑張りやチャレンジしようとする気持ちをたくさんほめて、外国語活動への意欲を高めてあげたい。

ほめ言葉を外国語ルームに掲示し、誰でもほめ言葉を使える環境を整えていきたい。

"Good", "Nice"などのほめ言葉だけでなく、子どもの具体的な姿をほめるようにしていきたい。また評価チェックリストを自校化し他の先生方と共有して活用したい。

児童の「コミュニケーションの素地」を育てるために、「失敗して話したくない」という後ろ向きな気持ちにさせず、「もっと話したい」「話すのが楽しい」という状態につなげていく非常に有効な手段を学べたと思う。受け止め方、励まし方は他教科でも行かせる部分が多いので、さまざまな場面で生かしたい。

これまでの授業では、児童にわかりやすく伝えることばかり優先し、日本語で説明することが多かったが、簡単な言葉でも英語をたくさん伝えることが大切だと改めて感じた。また、児童がミスをした時に、受け止めて会話をしながら、本時の内容に戻すことで、理解していない児童もスムーズに正しい会話に戻ることができるとわかったので、今後は児童の考えや言葉を受け止めながら、児童の「学びたい」という気持ちを育める指導をしていきたい。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

教師が適時に「ほめ言葉」を活用することが児童の外国語学習に対する意欲を伸ばすこと、授業中の日本語の使用率を下げることが望ましいことが認知された。ティーム・ティーチングにおける評価についてさらなる研修の必要性がある。

第３回　「聞くこと」「話すこと」の指導

1. リフレクションシートの集約

small talkを実際の授業に取り入れていきたい。ALTと協力しながら、こんなやり取りを友達とやってみたいと児童が思うような導入にして、教師の動作や声のトーンにも気をつけていきたい。何度も聞かせることも大切にしていきたい。

会話を多く取り入れ、繰り返し学習した上で、個に戻していく。デジタル教科書を使用するだけでなく、身近な教師の経験やデモンストレーションを行うことで、児童の興味を引き出していく。

常に子どもたちから「聞きたい」「話したい」を引き出せるような授業を構築して、言いたい活動を工夫していきたい。推測から知識へ、知識から技能へ、思考・判断・表現を働かせた「発表」へとつなげていきたい。

必要感をもった課題設定にすること、児童のエラーに対して必要以上に神経質にならないこと、言語活動に思考・判断が伴っているかを意識することを今後の授業づくりに活用していきたい。

ねらい達成のためにただ繰り返し言わせるのではなく、負荷をかけることやチャンツやけゲームなどを通して楽しく学ぶための手立てなど、定着への様々な指導方法を研修できたので、これらをぜひ実践していきたい。

「聞く」→「練習する」→「話す」という授業のサイクルを作ることや、児童が「話す」活動をする際の話題の選定に役立てたい。

何度も繰り返し聞かせることで、推測する力から知識を身に付けることにつなげていきたい。また、いくつかの選択肢を提示し、自分の考えを表現できるようにしていきたい。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

「知識・技能」を活用した言語活動を行うことで「思考・判断・表現」の力をつける指導法について受講者が認知した。指導法を実践する際の教師の指導技術についてさらに研修の必要がある。

第４回　「読むこと」「書くこと」の指導

1. リフレクションシートの集約

教師が音の構造を意識するだけで、児童の捉えも変わってくると思った。講座で学んだ音の捉え方も、Sounds and lettersで取り組んでみたい。書くときにも、ただ写すだけでなくなるべく見ないで書かせるなど、日々の積み重ねを行いたい。

Phonicsを指導する際には、１音ずつの指導だけではなく、オンセット・ライム区切りを意識して母音挿入を減らせるようにしていきたい。

文字の音に気づかせるような音遊びを取り入れていきたい。

書くこと、読むことは児童にとってもハードルが高いので、十分に音声に慣れ親しむことが必要であり、その場面を十分に確保する。現在５年生を担任しているため、アルファベットの大文字・小文字について適切に書くことができるように指導することを大切にしていきたい。

発音の練習をする際に、どの音で区切るのかを意識して自身も発音していきたい。

外国語を書くことについて、ローマ字においても児童がただ見て写すだけではなく、発音しながらとか音を言いながら、名前をいいながらなどさまざまなバリエーションで指導していきたい。

ALTとも連携しながら、自分自身が正しく音韻を理解し「読むこと」の指導に当たっていきたい。また、児童の耳を鍛えるためにも、演習で行ったような体験的な発音練習も積極的に取り入れていきたい。

音韻を生かした学習・指導方法に興味をもった。楽しみながら学習するために活用したい。また、支援の必要な子どもが日本語を学ぶ上でも参考になることもあった。

２. リフレクションシートから見える成果と課題

受講者は音声指導に活用すべき専門的知識を得ることができた。今後の指導での活用が望まれる。

第５回　言語活動の効果を高めるための工夫とパフォーマンス評価

１. リフレクションシートの集約

教師が一対一で評価する時間の確保が難しいような児童間の日常会話も、タブレット端末を使ってペアで撮影しておくと評価に使用できると感じた。自分でも実践したい。

外国語活動、外国語科の学習をするときに、あまりエラーに厳しくならずに、RecastやElicitationを取り入れて、児童自身が間違いを修正できるように進めていきたい。

授業においてCan-Do形式の目標を取り入れたり、児童にとってより必然性のある言語活動を考えたりしていきたい。

本校では単元の導入・単元目標の設定の仕方に悩みをもつ教師が多いので、本研修の内容とともに文部科学省mextchannelを活用しながら伝達したい。

A評価、B評価の基準について明確にして２学期からの授業に生かしたい。ルーブリック評価を作成し児童の評価に活用したい。

パフォーマンス評価は外国語だけでなく、他教科にも言えることだと思うので、さまざまな場で活用していきたい。

子どものエラーに寛容になり、グローバルエラーにフォーカスしていきたい。

ALTを活用しながら、適切なモデルを児童に示したり、パフォーマンスを録画し評価や次年度の学習に生かしたりすることに、早速夏休み明けから取り組んでいきたい。

２. リフレクションシートから見える成果と課題

評価についてのヒントを得た受講者が多かった。実際にパフォーマンス評価を行うための教師間の情報共有や準備が求められる。

第６回　学校段階間の接続の重要性

１. リフレクションシートの集約

Can Doリストの交換や年間指導計画の交換など、できるところから動いていきたい。

クラスルームイングリッシュの共有や、動画による授業交流などに挑戦してみたい。
足立区は小中連携に力を入れているので、「人」「もの」「方法」の視点から今後どのような連携ができるのか考えていきたい。
妙高市では、外国語活動コーディネーターにより園・小・中の連携を密に行っている。引き続き行っていくとともに、校区の接続の課題を考え、自分にできることに取り組んでいく。
中学校との連携（狛江ではコミュニティスクール）意識をもって指導を進めたい。児童の学習意欲を高めるだけでなく、初任者である私自身の指導の向上にも努めたい。
児童生徒同士、または教員同士が大勢集まって交流することが難しく、様々な面で不自由さを感じていたが、動画撮影やZoomなどを生かして交流するなど新しいアイディアも得られたので、ICTを活用しながら取り組む方法を考えていきたい。
小中間の授業参観の機会はあっても、実際にそれが普段の指導に生かせているのか、小中のなめらかな接続につながっているのかどうかという実感があまりなかったが、今回紹介された「小中の教員が互いの学校でティーム・ティーチングする」というアイデアを提案してみようと思う。
年間でどのように外国語活動に取り組んでいくのか、近隣の小中（可能であれば高校）の教員が集まれる機会を設け、試行錯誤を繰り返しながら、英語を使ってコミュニケーションをとることに自信をもてるようにしていきたい。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

受講者は小中の連携を進めるための裏付けとなる情報や具体策を知ることができた。教員個々の理解から学校間の連携へと広げるためには、学校全体さらに自治体の協力が必要である。

第７回から第１２回　授業研究

それぞれの講座終了後、受講者には次の6項目についてリフレクションシートに回答するよう求めた。

1	名前
2	所属
3	勤務校
4	授業実践発表を見て新しく学んだことや気づいたことは何ですか？
5	振り返り協議後に新しく気づいたことは何ですか？
6	講師の指導助言から学んだことや気付いたことはなんですか？

質問項目４、５、６についてのリフレクションシートの内容の集約を１とし、２としてリフレクションシートから見える成果と課題を付記した。

第７回　授業研究①　（浦安市）

1. リフレクションシートの集約

（１）　受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気づいたこと」（質問４）

黒板とピクチャーカードの併用による視覚的な理解の促進、全体で個人の頑張りを認め合う雰囲気を醸し出す手立て。
ALTとのモデル提示や児童に必然性を感じさせる授業の進め方。
授業者のポジティブなフィードバックの大切さについて改めて気付かされた。授業者の全体や個人に対する具体的なフィードバックがとてもよかったので、自分でもフィードバックのバリエーションを今後もっと増やしていきたいと感じた。
ALTとJTEとがしっかりと役割分担をして授業を進めていた。事前の打ち合わせを入念に行っているのだと思う。授業の中でほめ言葉をたくさんかけており、いい雰囲気の中で多くの発話を引き出していた。子どもの語彙が不足し困っているときに、上手にALTを活用して英語で何というのかを気付かせていた。

（2） 受講者が「振り返り協議後に新しく気付いたこと」（質問５）

教師のフィードバックだけでなく児童自身のフィードバック、友達同士でのフィードバックがあると良いこと。活動に必然性を更にもたせられたら良いこと。
JTEとALTの役割分担について、発話のバランスもそうだが、JTEが授業をコントロールすることがやはり大切だと気付いた。
ねらいを達成するために様々な学習活動を設定していくわけだが、その必然性を児童がどれだけ感じているのか、またそれぞれの学習活動が有機的に結びついていくことが大事だと感じた。
T1が授業を先導・コーディネートし、授業を進めながら、T2との役割分担をしていくこと。
子どもの回答が合っていても間違っていても、ほめて子どもたち全員で受け入れることを徹底していた。

（3） 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気づいたこと」（質問６）

全ての活動がToday's goalにつながるものであるべきで、活動を意味づけてやることがＴ1の役割であることを改めて理解した。
単語だけでなくひとつながりの文でリキャストすることにより活動がつながっていくとよいこと。
ほめ言葉にワンモアセンテンスで意味をもたせるという指摘が大変参考になった。子どもたちが何をほめられたのか具体的に理解することで、子どもたちの英語がステップアップしていくのだとわかったので授業で実践したい。
外国語の学習において、受容的で協力的なクラスの雰囲気が土台にあることが大事だと痛感した。その上でTTであってもJTEがしっかりと授業の流れをコントロールし、この時間は何を学ばせるのか、何ができるようになるようにするのかを常に念頭において進めていくことが大事なのだとわかった。また、児童の発達段階や学習経験に応じて学びの設定をしていくことが大切だということもわかった。
具体的なフィードバックの言葉がけ、文化的な内容は日本語でワンポイント説明があると良いこと、動画やチャンツの練習もなぜそれを見たり聞いたりしているのか必然性やその後の活動につながりを作ること。
講師の具体的なデモンストレーションがわかりやすかった。授業始まりのあいさつは、ALTがやってしまうことが多かったので、示されたのやり方を取り入れていきたい。児童の発表や発言を褒めてから、正しい知識や言い回しを教える、という順序も意識していきたい。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

HRTとALTとの役割分担とポジティブ・フィードバックの効果について受講者の理解が促された。今後の授業において、得た知識・技能が活用されることが望まれる。

第８回　授業研究②　（足立区）

1. リフレクションシートの集約

（1） 受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気づいたこと」（質問４）

やり取りをして、そこから疑問を持ち、みんなとその疑問を共有すること、話し合うことに価値がある。自分の知っている表現に言い換えたり、資料や今までの知識から推測したりすることの大切さ。何でも言い合える学級の雰囲気作り。児童の振り返りの視点が分かりやすかった。
中間指導で分からないことを共有し、児童から“Idea please.”で学びあっていたところがいいと思った。間違っても伝えようとするチャレンジする気持ち、何より伝えることを楽しんでほしいという教師の願いが感じられて、しっかりとした学級経営が基盤になっていると思った。
授業の初めにデモンストレーションを行い、ゴールの姿を示していた。T・Tでなくても、子どもたちに何をするのか、何ができるようになるとよいのかを示すことができるのだとわかった。また、中間評価を何度も行い、より適切な語の選択や表現の工夫ができるようにしていて、中間評価後の児童の変容からも、その大切さがあらためてわかった。
これまで小学校外国語での書く活動の授業をあまり観る機会がなかったが、書くためにもたくさん話す活動が有効であることを学んだ。また、表現したいことを考える時も、全員で考えを共有しながら、より伝わりやすい表現に気付いたり、語句を知ったりすることができることを学んだ。

学級経営がすばらしく、担任が英語を担当することの良さもあること。教員が答えを教えることよりもどう伝えたら良いか考えさせることに注力していること。

（2） 受講者が「振り返り協議後に新しく気づいたこと」（質問５）

ALTがほとんど来なくても、これだけのコミュニケーション能力が育つという例を見ることができた。

教師の意図的な言葉かけや、グループ活動の中にも支援がたくさんあることに気付いた。

授業者より、学級に特別支援を要する児童がいる環境の中で、英語で活動することに重点を置く場面と、活動の仕方や見通しを日本語で伝え見通しを持たせる場面とでわけたという説明があった。特別支援学級においても、児童に活動の見通しや活動の方法がわかるように伝えることがやはり大切なのだと改めてわかった。

何と言ったらいいのかわからない、適切な語がわからない時に、全体に投げかけて子どもたちに考えさせていた。自分が知っている言葉から何とかして言いたいことに行き着こうという子どもたちの真剣さが伝わってきた。正しい語、適切な語を学ぶ機会も大事だが、こうした自分の知識の中から言葉を広げていく経験も、将来を見通すととても大事なことだと改めて思った。

（3） 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気づいたこと」（質問６）

書くことについて、必然性や目的･目標をもたせること。特に書くことについては読み手がいることを意識させた上で学習に取り組むことができると良いこと。また、大文字と小文字、ピリオド、語の間のスペース、単語のまとまり、４線に正しく書くなど、各授業で児童にどの部分を意識させるか明確にすることが大切であるということ。

デモンストレーションでさまざまなパターンを例示することで、よい表現に気付かせるということ。

「書く」「発表する」という２つの活動においても、「意欲的な態度」「技能の習得」「相手に伝わるようにする工夫」等、1回1回で児童に身に付けさせたい内容を、それぞれの場面ごとに目標設定することの必要性がわかった。

書くことのチェックリストを用意し、書くたびに何度も使うことで定着を図ることができると思った。書き写しの時に文字の名称を言いながらだけではなく、単語や語のかたまりを言いながら書き写すように一緒に取り組んでいきたい。

「書くこと」の指導を行う際には、「何のために書くのか」という目的や、「どのようなことを意識して書くのか」といった視点を示すことが必要であることを学んだ。「言ったり聞いたりしてきたものを記録するため」という視点は、英語に限らず大切な視点になると思うし、目的を共有しながら進めていくことはどの教科でも求められることだと思った。また、書いて終わりではなく、書いたものを示しながら「読む」ことまで活動の中で取り入れられるようにしたい。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

受講者は中間指導の方法、「書くこと」の指導法を学んだ。また日ごろの学級経営が授業の基盤となることについて学んだ。小学校外国語における「書くこと」の具体的指導法のさらなる研修が求められている。

第９回　授業研究③　（いわき市）

1. リフレクションシートの集約

（1） 受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気づいたこと」（質問４）

教師自身が楽しんで授業を行うことが大切だと改めて感じた。また、日頃の積み重ねを感じる実践で、子ども達が着実に楽しみながら英語に親しんでいる雰囲気が感じられた。

導入時の挨拶からSmall Talk、Today's goalまでの流れがテンポよく、外国語を学ぼうとする児童や教師の熱意が感じられた。

チャンツやゲームを通して、十分に音声に親しむことで、児童は自信をもって自分の気持ちや思いを英語で伝えられるようになると気付いた。

単元のゴールを設定し、児童とそれを共有しながら授業を進めていくことで、１時間ごとの目的を明確にしていること。

（2） 受講者が「振り返り協議後に新しく気づいたこと」（質問５）

協議の中で、“Do you have a pen?”を話す必然性のある流れを作るには、どうしたらよいかという意見が出た。自然な流れと場面の設定を考えることが難しいと思った。

活動内容と取り上げていたフレーズの関係性をうまく作ることが難しいと感じた。子どもにうまく浸透していく言語活動を作り、取り上げているワードの必要性を感じられるように気をつけたい。

単元の評価領域が「話すこと（発表）」であり、それにつながるペアワークの自然な場面設定、自然な使用言語の流れ（対話の流れ）を吟味する必要があると思った。また、自分らしい内容で発信するためには文房具などの実物をツールとして使ったり、写真やイラストを使用したりするなどの工夫が必要だと思った。

キーセンテンス（扱わなければならない文や語句等）と授業の流れをどのようにマッチングさせていくべきか、自然な流れ（児童の思考に沿ったもの）になるようにしていくことが重要だと感じた。

（3） 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気づいたこと」（質問６）

外国語の定着のために①教師対児童の全体でのやり取り練習、②グループ（学級の半分）でのやり取り練習、③ペアでのやり取り練習、というようにスモールステップで話していくことが大切。

児童がイメージをもちながら、不安なく言語活動を行うために、教師のモデルが有効であることを確認できた。また、場面やコミュニケーションの目的に合った言語材料を指導者がしっかりと想定したり、対話の流れによって子どもが使いたいと思うであろう言語材料を予測したりすること、また児童のこれまでの学びが生かせるやり取りの内容を設定したりすることが大事だと思った。

ひとつひとつ丁寧にスモールステップを重ねていくことで、多くの児童が自信をもってコミュニケーションが図れるようになること。児童が目的意識をもてるような教材の提示や課題の提示をしていくこと。教師自身は、正しい英語を使うことを意識すること。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

授業における必然性のある場面設定と、スモールステップを踏む指導の重要性が認知された。教師が正しい英語を使うことについては、今後の課題と考えられる。

第10回　授業研究④　（横手市）

1. リフレクションシートの集約

（1） 受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気づいたこと」（質問４）

役割分担が明確であれば、ALT、HRTそれぞれの良さを生かした外国語活動を実施することができる。HRTは児童の実態を知っているからこその指名や発問ができ、良き学習者モデルとして子ども達に手本を示すことができる。特にSmall talkでは、ALTがいるからこそ自然なやり取りが、子ども達に具体的な場面を想定させる良い手立てであると感じた。

定型文を教えるための授業より、やり取りの広がりをほめることで「もっと英語で話したい」と児童に思わせる授業をつくりたいと思った。

教科書に掲載されている言語材料以外にも、water bottleやhandball等の単語も取り上げたことで、子どもたちはそれらを聞き出そうとして必然的に発話量が増えていた。

（2） 受講者が「振り返り協議後に新しく気づいたこと」（質問５）

場面設定が大切であると感じた。「仕方がないから話す」のではなく、「話してみたい」「聞いてみたい」という児童の気持ち、必然性を生む設定を今後も考えていきたい。

ALTがいるからこその自然なやり取りを児童に見せることができると改めて気づいた。Small talkで児童に本時のめあてを共有する際に、めあてを共有した後に再度やり取りの流れを見せることで、児童は目的や場面を具体的に想像しながら英語を聞くことができると感じた。そのためにもALTとのTT授業では明確な役割分担が必要であると実感した。

（3） 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気づいたこと」（質問６）

ALTと授業者とのやり取りが必要不可欠だと感じた。それは授業の中での模範会話をする際や、単語の発音を聞いて子どもたちに発音させる場面でもALTが上手に関わっていけるようにHRTが主導していくことが大事だと改めて思った。

英語母語話者または使用者であるALTは、文化について指導することができ、英語を使う必然性を作り出すことができる。

インプットを増やすためにも、リアクション表現や既習表現などを積極的に使い、会話を広げるモデルを示していくことの積み重ねが大切なのだと改めて感じた。自分のほめ言葉の引き出しをさらに充実させ、子どもたちのモデルとなっていきたいと思った。

ポジティブフィードバックを全体だけでなく個人に具体的に行うことが大切だと学んだ。個々の児童の頑張りに合った言葉がけができるように、教師自身も様々なフレーズを習得したいと思った。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

受講者はALTとのTTにより自然なやり取りを児童に提示できることや、HRTが授業を主導すべきであることを学んだ。会話を広げたり、児童をほめるための教師自身の表現力向上が今後の課題である。

第11回　授業研究⑤　（妙高市）

1. リフレクションシートの集約

（1） 受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気づいたこと」（質問４）

単元末の言語活動をいつ、どこで、どのように提示するかが大切であると感じた。今回の場合では、児童が既習事項を使おうとする姿が多く見られたが、本単元で扱う“Can ～ ?”の使用機会が少ないように思った。児童自身が「～ができる、～が得意な先生」を知る必要性を感じ、自ら進んで“Can”を使用していくことができるのではないか。単元全体を通して、どういった言語活動をどのようなプロセスで学び、何ができるようにさせたいのか、指導者が明確に構想することの重要性を学ぶことができた。

単元全体だけでなく、本時の中でも既習事項を繰り返し使用する活動ができる点や、視覚的にわかりやすい掲示物がある点が児童が自信をもって発話できる理由であると学んだ。活動を前半と後半に分け、中間発表をすると、教師の意図を児童に伝えることができるので良いと感じたが、その良さを児童に気付かせるよう支援する必要があると思った。

子どもたちにとってコミュニケーションの中で必要感を感じてこそ、使用される言語が生きて働く知識･技能となっていくと思った。

学級担任だからこそできる教室掲示の活用が大変参考になった。子どもたちがつまずきやすいポイントを掲示しておくことで児童の困り感を軽減でき、自ら気づいたり友達同士で指摘しあったりできる環境を整備できる。

（2） 受講者が「振り返り協議後に新しく気づいたこと」（質問５）

単元のゴールの言語活動に至るまでの積み重ねは非常に大切であるということと、この単元の言語活動のコミュニケーションの目的にあった英語表現を想定して指導をしていくことが必要であること。

振り返りの際に、「何でもいい」ではなく、視点を与えて児童自身ができたのか、もうちょっとだったのかを考えさせるのが大切だと気づいた。また、ペア学習でmistakeがあったときに、子ども同士で修正せずに進んでしまう場合があることに気づき、教師の指導の仕方が難しいと感じた。

既習事項と新出事項のバランスを単元中の進度に合わせて調整したり、注目させる手立てを講じるとよいと思った。

既習表現を使うことで幅は広がるが、使う児童にとってはどれをつかっていいのか分からず、表現の使い方があいまいになってしまうこと。その単元で学習するべき表現は特にしっかりとおさえること。

（3） 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気づいたこと」（質問６）

既習事項をたくさん授業で組み込み活動していくことが大切だと学んだ。また、ゴール設定→ゴールの共有→動機付け→導入→活動（練習）→振り返りの流れで授業を進めていきたいと思った。

「見て学ぶ、真似て学ぶ、考えて表現する」を意識させたり、ゴールを共有することで双方向で目的意識を明確化したりすることをこれから取り入れていきたい。子どもたちが本当の気持ちを表現したくなるような目的･場面･状況を考えていくことが大事だと改めて思った。

既習はスパイラルして繰り返し使っていくことが効果的だとわかった。またゴールの設定、共有、動機付け、導入、活動、振り返りの流れを学ぶことができた。
「できた、できなかった」ではなく、「できなかったけれど努力した」ことや「できなかったから次は～しよう」と振り返らせることの大切さを学んだ。
児童へのゴールの可視化が納得感につながること、教師と児童が目指すゴールは一致していることを意識していきたいと思った。
中間評価は、児童が自分の到達目標を自己調整できるように促すもの。できなかったことをどう捉え、今後どのようにしていったらいいか学ぶためのもの。

2. リフレクションシートから見える成果と課題

受講者は既習事項を繰り返し使いながら目標表現を指導するプロセスを学んだ。また掲示物の活用についても学んだ。既習事項と目標表現のバランスを考えながら指導にあたることが課題である。

第12回　授業研究⑥　（狛江市）

1. リフレクションシートの集約

（1）　受講者が「授業実践発表を見て新しく学んだことと気づいたこと」（質問４）

小中連携の授業を初めて見た。ペアの児童と生徒同士がしっかり教えあう・聞きあう姿や中学生のモデルがあることで安心して小学生が取り組む姿など、子どもたちにとってプラスになる面が多くある。また、異年齢の交流に対しての意欲も高く、授業も盛り上がっていると感じた。拍手やうなずきなど温かい雰囲気も大切なのだと改めて感じた。
児童生徒が皆一生懸命話そうとしているのが印象的であった。小学生は、知っている外国語を使ったり身振りをしたりして、「頑張って中学生について行こう」とする前向きな姿勢が印象的であった。
小中連携して授業を行うことで、小学生は中学校での学習の見通しをもつことができ、中学生も教えることで復習でき、お互いにやる気を高めることができると思った。小学生がオールイングリッシュの授業を経験できてよかったと思った。
小学校と中学校の連携では、各学校の教員同士が内容をすり合わせることで、見通しを持った教育ができることに利点がある。中学生だけが小学生に教える活動だけでなく、小学生から質問するなどの活動もあるとよい。
小中それぞれの学習内容や段階をお互いに把握して指導に当たることの大切さを学んだ。会議などの教員間での話し合いでの連携ではなく、子ども同士の直接的な連携を行う方法もあったことを知り、大変ではあろうが、こうした子どもに直接的に関わるような連携や取り組みが増えるといいと思う。
小学生が中学校の授業を体験する機会が、小学生にとっても中学生にとってもよい動機付けになり得ること。子ども同士の教え合いには、難しさもあるが、教師の指導とは違う学びの面白さがある。

（2）　受講者が「振り返り協議後に新しく気づいたこと」（質問５）

どの自治体においても、小中連携で様々な取り組みをしていることがわかった。
今まで中学校の教科書を読んだことがなかったが、連携と接続を考えるときに、ぜひとも一度は読んでおくべきだと感じた。
小学校における教室英語の使用量を、学年に応じて中学校に近づける必要があると感じた。
「何のために中学生と話をするのか」（何のために小学生と話をするのか）という動機付けがあるとさらに良い授業になるのではないかと感じた。英語を話す必然性を持たせることの大切さを再確認した。
子ども同士の学びが大きいと感じたが、その時間を通して子どもが何ができるようになったのかを実感するためには、もう少し振り返りを充実させたほうが良いと協議の中で気づいた。
小学生と中学生の学習のめあては違うものになるということと、その学年段階に応じたきめ細かい手立てが必要であると思った。また、コミュニケーションの目的が児童、生徒の両方にはっきりと分かるような始まりのデモンストレーションの工夫や、自然な言語活動の場面設定が大切であると思った。

（3） 受講者が「講師の指導助言から学んだことや気づいたこと」（質問６）

「人」「もの」「方法」の連携が必要であることとその重要性。
小学校と中学校で学習内容が違うため、それぞれのレベルにあった学習内容を考えることが大切だと思った。また、目的を明確にすることで、その日だけのイベントとして終わるのではなく外国語を学ぶ意義を感じることができると思った。
無理のない範囲, 状況でできることから行っていくこと。それぞれの校種における学習指導要領の内容を把握した上で、双方が自校種での学びを伝え合いすり合わせていくことでより小中連携の効果が発揮されていくのだと思った。
小学生には英語で文章を書くことが難しい事や、中学生の学習範囲を確認するなど小中の教師間の準備も大切だと学んだ。
小学校外国語科の目標及び指導内容に沿った実践を行うためにも、指導要領解説に立ち返って考えることが大切だと思った。
小学校と中学校の連携だけでなく、中学年と高学年の連携についても考えていく必要があると思った。
教えることができる子はその内容がよく理解できている、というのはその通りだと思う。中学生たちも復習になり、教えるためにまた学習し、学びを深めていた。我々にできることは、小学校・中学校が連携するために、互いに身に付けるべき内容を理解する必要があることが分かった。
「書く」と「書き写す」は異なる。小学校から中学校に上がるにつれ、「書き写す」から「書く」ことへと成長させていく必要がある。人に教えることが、学習の定着を最も高めるものであること。
小学生は「書き写す」がメインであるため、英語でメモをとらなければいけないというのは厳しいと講師の先生が指摘していて、その通りだと思った。事前に小学校の先生と中学校の先生で確認をする必要があると感じた。どんな力をつけて中学に入学してほしいかという願いと、小学校でできることを擦り合わせていけたら良い。
小学校では、指導事項に文法が含まれないため、三人称単数のｓの説明等、中学生が小学生に教える場面では、文法の説明に偏りすぎないよう、配慮する必要があるということ。交流する学習内容を、事前に十分に確認をして進めることが大切であると学んだ。

２. リフレクションシートから見える成果と課題

受講者は小中連携授業の意義、具体的な方法を具体的に理解することができた。また他の自治体での取組について情報を交換することができた。小中連携授業を実現するためには、教師個々の努力だけでなく、学校全体や自治体との連携が必要である。

Ⅳ 講座内容に対する評価

各講座終了後に受講者に対して講座内容に関する評価アンケートを実施した。受講者には講座終了後3日以内に回答をしてもらった。ここからは、第1回から第12回までの各講座の評価アンケートの結果と分析を記す。

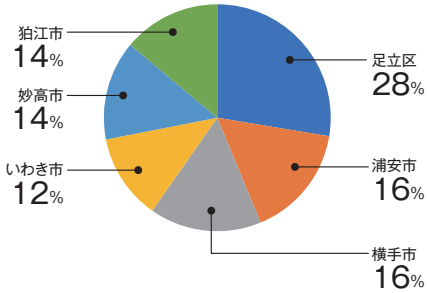
講座は第1回から第6回までが講義形式で、第7回から第12回までは授業研究形式の2種類の形式であった。そのため、アンケートの質問も講座形式によっていくつかを変更した。どちらの形式でも、最初に受講者の属性を知るための4つの質問を設けた。その後に講義形式では15個の質問を、授業研究形式では11個の質問を設けた。

全12回講座受講者の属性に関する質問の結果分析

最初に、受講者の属性に関するアンケート結果を分析する。各講座終了後に評価アンケートに協力してくれた受講者は全12回合わせて延べ1065人であった。

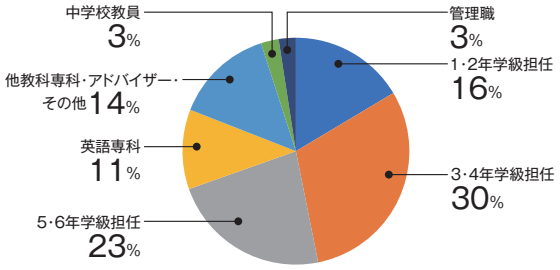
属性① 所属地区

全回答者1065人中、足立区からの受講者が28%、浦安市16%、横手市16%、妙高市14%、狛江市14%、そしていわき市12%という結果であった。



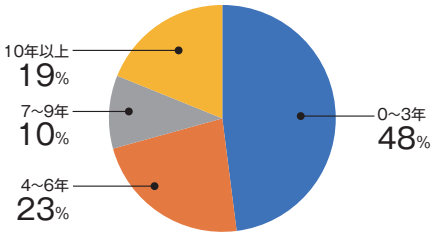
属性② 立場

「3･4年学級担任」が全体の30%で最大であった。次に、「5･6年学級担任」が23%で続き、「1･2年学級担任」が16%、「他教科専科･アドバイザー･その他」が14%、「英語専科」が11%、中学校教員3%、「管理職」3%であった。小学校で「外国語活動」を担当する「3･4年学級担任」と「外国語」を担当する「5･6年学級担任」が全体の半分以上を占めた。



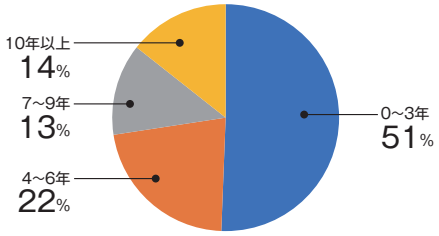
属性③ 外国語（活動）指導経験年数

「0 ～ 3年」が最大の48%を占めた。次に、「4～6年」が23%、10年以上が19%、「7～9年」が10%と続いた。
この結果から、比較的経験の浅い受講者が多かったことが分かった。また、7年以上の経験のある受講者もある程度受講しており、「10年以上」というベテラン教員も19%という高い割合を占めていた。



属性④ 外国語（活動） TT経験年数（日本人とのTTも含む）

属性④の結果は、属性③のそれとほとんど類似していた。TT経験者は属性③の「外国語（活動）指導経験年数」より若干少ないことが分かった。この結果から、学校での外国語（活動）指導では、TT指導もほぼ同時に取り入れているということが分かった。

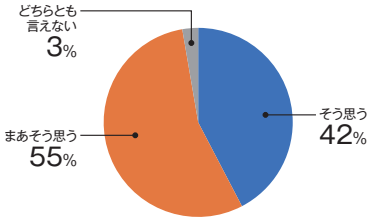


ここからは、第１回から第６回講座までの講義形式の講座に対する評価アンケートの結果と分析を記す。

第1回講座　評価アンケート　結果分析

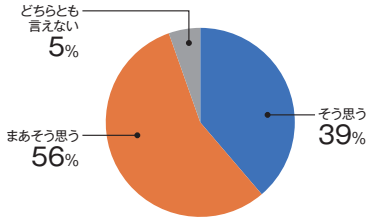
質問１　講座内容は理解できましたか。

「そう思う」（42%）と「まあそう思う」（55%）を合わせて肯定的回答が97%を占めた。否定的な回答はゼロであった。



質問２　講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「そう思う」（39%）と「まあそう思う」（56%）を合わせて肯定的回答が95%であった。否定的回答はゼロであった。

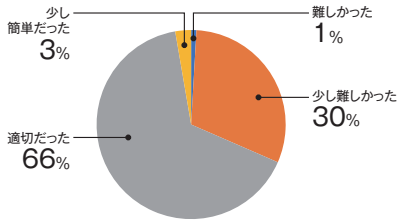


質問３　質問２で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

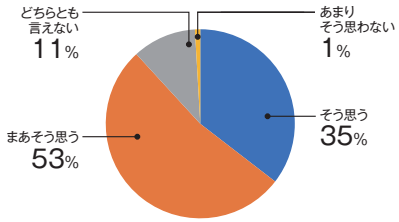
質問４　講座内容はご自分にとって適切でしたか。

「適切だった」との回答がちょうど3分の２あった。「少し難しかった」が30%を占めた。「少し簡単だった」が3%あった。



質問５　講座で提示された資料は今後活用できますか。

肯定的回答が88%を占めた。否定的回答が1%あった。

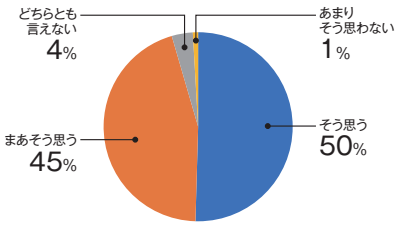


質問６　質問５で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 黒板上のスクリーンに表示されたが、文字が小さくほとんど読み取ることができなかった。

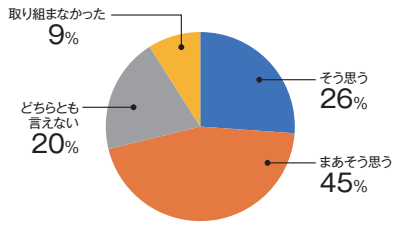
質問７　講師の説明は分かりやすかったですか。

「そう思う」が50%で、「まあそう思う」が45%となり、肯定的回答は合わせて95%となった。否定的回答が1%あった。



質問８　講座前タスクは役に立ちましたか。

肯定的回答が71%を占めた。「どちらとも言えない」も20%と比較的多かった。また、「取り組まなかった」も9%を占めた。

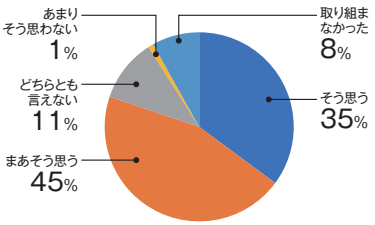


質問９　質問８で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問10　講座中のタスクは役に立ちましたか。

80%は肯定的に回答した。否定的回答が1%あった。「取り組まなかった」も8%を占めた。

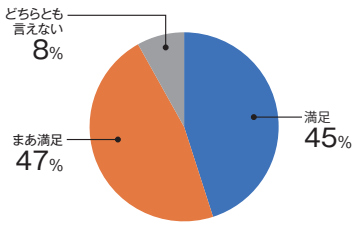


質問11　質問10で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 指導要領の比較をして講座に臨みましたが、特に有効だと感じなかったため。

質問12　総合的にこの講座に満足できましたか。

第1回講座の総合的満足度だが、92%が肯定的回答をした。「どちらとも言えない」は8%占めた。否定的回答はゼロだった。

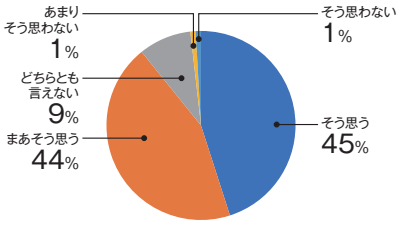


質問13　質問12で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問14　このような機会がまたあれば、受講したいですか。

89%の受講者が肯定的に回答した。「どちらとも言えない」は9%であった。否定的な回答は2%だった。



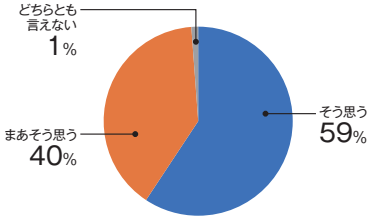
自由コメント

- Recastの大事さを改めて感じました。児童が間違いを恐れず楽しく英語学習に取り組めるよう、Recast、そして変化を待つ姿勢を大事にしたいと思います。
- お世話になりました。興味深かったです。
- 普段授業をしていて、子どもによって語彙サイズや言葉の運用力にかなりの差があると感じています。塾や英会話教室などですでに学習している子どもがいたり、英語圏にルーツをもつ子どもがいたり、どなたかの質問にあったように特別な支援を要する子どもがいたりと、実に様々な子どもたちがいます。みんなで考え、助け合いながら学習を深めていく楽しさや素晴らしさもありますが、金魚鉢の部分が大いに助けになる子どもたちもいます。金魚鉢部分と大海部分のバランスを考えなければならないと思いました。大変勉強になりました。また受講させていただきたいと思います。
- 本講座を受講し、inputからの児童の気づきやrecastの大切さを改めて実感し、実践したいと思いました。
- 今回、教えていただけたことをもとに、日々の授業について見直していきたいと思いました。
- 最新の英語教育の内容が分かって、とてもためになりました。
- 今年度初めて小学校外国語を担当することになりました。大変不安があり、今後も勉強していきたいと思っております。よろしくお願いいたします。
- 学習指導要領の見方・recastの重要性について大変よく分かりました。
- 大変役に立つ内容をありがとうございました。今後更に研修を積み、外国語活動の授業に生かしていきたいと思います。
- 数年ぶりに外国語活動を指導することになり、毎週不安を抱えています。今回の研修もついていけるかとても心配でしたが、とても分かりやすくお話をしてくださって勉強になりました。ありがとうございました。引き続きよろしくお願いいたします。
- 指導要領の改訂に伴い、指導の在り方が大きく変わってきたことを理解することができました。
- 評価や言語活動について、機会がありましたらお聞きしたいです。
- 担当管理職として受講させていただきました。我が国の外国語教育の課題が明確に示され、学習指導要領の目指すところが整理され、再度理解することができました。
- 外国語活動を行う上で、どのようなことを主と考えればいいのかが分かった。今後に生かしていきたい。
- 少しずつ、苦手意識をなくしていけるようにしていきます。
- 今は外国語を専科の先生がやっていただいていますが、実際自分がやることになったときに、今回学んだ授業方法を用いられたら子どもたちも楽しく授業を受けられるのだろうなと思いました。とても勉強になりました。
- このような学ぶ機会を得ることができ、たいへんありがたく思っています。

第２回講座　評価アンケート　結果分析

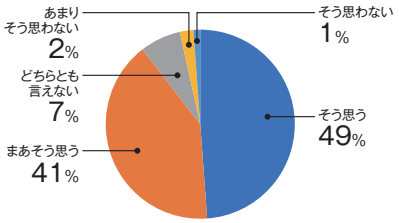
質問１　講座内容は理解できましたか。

「そう思う」（59%）と「まあそう思う」（40%）を合わせて肯定的回答が99%を占めた。否定的な回答はゼロであった。



質問２　講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「そう思う」（49%）と「まあそう思う」（41%）を合わせて肯定的回答が90%であった。否定的回答は3%であった。

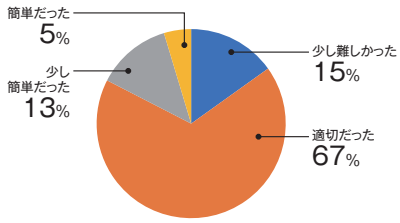


質問３　質問２で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 資料の内容は理解でき、評価の仕方、ポジティブフィードバック等、大変参考になりました。しかし拠点校に参集、オンライン講座で行う必要性は感じられず、資料のみで十分かと思います。
- コミュニケーションタスクは既に現場で実践している内容であったと感じます。
- 既に実践している内容であったため、新たな発見等が少なかった。（第２回の内容は、学生や初任者向けかなと…）

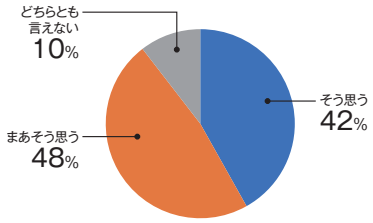
質問４　講座内容はご自分にとって適切でしたか。

「適切だった」との回答がちょうど3分の２あった。「少し難しかった」が15%占めた。「少し簡単だった」が13%、「簡単だった」が5%あった。



質問５　講座で提示された資料は今後活用できますか。

肯定的回答が90%を占めた。否定的回答はなかった。

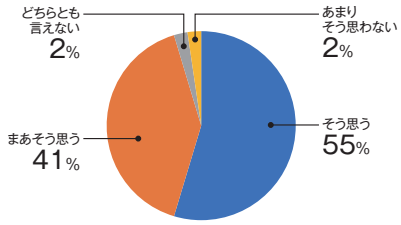


質問６　質問５で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

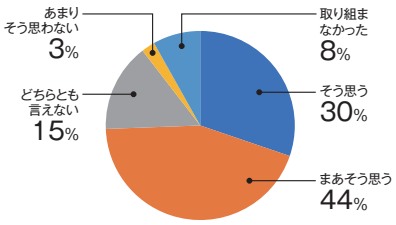
質問７　講師の説明は分かりやすかったですか。

「そう思う」が55%で、「まあそう思う」が41%となり、肯定的回答は合わせて96%となった。否定的回答が2%あった。



質問８　講座前タスクは役に立ちましたか。

肯定的回答が74%占めた。「どちらとも言えない」も15%あった。また、「取り組まなかった」も8%を占めた。

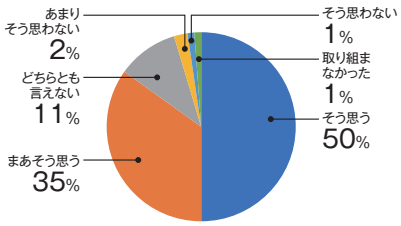


質問９　質問８で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 内容としては良いが、タスクをこなす十分な時間が中々取れなかった。

質問10　講座中のタスクは役に立ちましたか。

85%は肯定的に回答した。否定的回答が3%あった。「取り組まなかった」は1%あった。

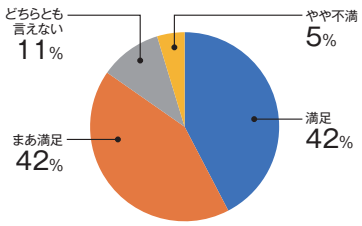


質問11　質問10で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- ほめ方が大袈裟だと思いました。一言子どもが言っただけなのにawesomeなのかと驚きました。
- テンポが悪く、このタスクをオンラインで行う必要があるのかと思った。

質問12　総合的にこの講座に満足できましたか。

第2回講座の総合的満足度だが、肯定的回答が84%を占めた。「どちらとも言えない」は11%、否定的回答は5%あった。

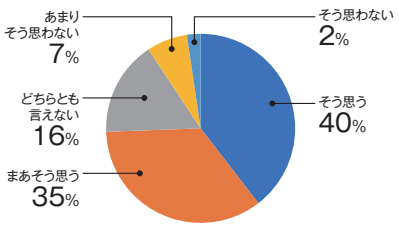


質問13　質問12で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- オンラインでの講座はたくさんのご準備、ご苦労があることと存じます。今後も現場の子どもたちの為に多くの学びを得たいと思っております。
- 本日の講座内容（質問と応答、励ましや評価の言葉等のコミュニケーションタスク）は、日々の授業の中で実践しているものでした。初任者から３年目程度の外国語指導経験者向けかと思います。
- 拠点校に参集、オンラインで行う必要性は感じられませんでした。
- １時間の中で、どのような学びが適切か、現場の困り感に沿った内容、オンラインによるメリットが感じられる内容であるとよいと感じました。
- 今後の研修で、より実践的なものを扱うことになると思うが、今回の研修のみに参加した人にとっては、あまり身になる研修だったとは言い難かった。全体として、研修の回数を減らし、内容を吟味するべきだと思う。
- 実践に生かすことがしにくい印象です。評価に関して。

質問14　このような機会がまたあれば、受講したいですか。

75%の受講者が肯定的に回答した。「どちらとも言えない」は16%であった。否定的な回答は9%を占めた。



自由コメント

- オンラインでのコミュニケーションは難しいところがあると感じた。特に外国語はトークが主となるため、どちらか一方の音声しか届かないオンラインでの実演は難しいと感じた。
- 普段から疑問に思っているところを説明していただき勉強になりました。評価については常に悩んでいる部分です。講習でもあったように計画をしっかりとすることが大切なのだなと思いました。
- 子どもたちの頑張りに対して、どう評価し、プラスのフィードバックをしてあげるかについて分かりやすく、実践も含めて学ぶことができました。ありがとうございました。
- 非常に勉強になりました。生徒のモチベーションを上げる方法として活用したいと思います。
- 外国語専科がいるので、共有しながら活用していきたいと思います。
- 実際に近い形で生徒に対しての指導が学べてよかったです。
- 児童をほめたり励ましたりするポジティブフィードバックにより、児童が自信をもつだけでなく、学習改善も促すことができるというのは役に立つと思いました。授業の中で意識して使用していきたいと思います。
- 声が聞き取りにくかったです。
- 母語ではない言語を学ぶ場で、不安な子どもたちにとって、発言を肯定的に受け止めてくれるHRTやALTの存在は大切なものだと感じました。これからの授業で積極的に活用していきたいと思います。
- 早速本日の外国語の指導から研修での学びを生かしたいと思います。
- いつも楽しく参加させていただいています。学んだことを授業に生かし、たくさん英語でほめてあげたいと思いました。
- 間違いにさせずに正していく受け答えの方法がわかってよかったです。他教科等でも、受け止め方は生かしたいと思いました。
- 教師が子どもをほめる言葉やフォローの言葉をたくさん知ることができ、すぐに実践したいと思いました。ありがとうございました。
- 勉強不足だった部分がたくさんあり、今回の講習で評価について研修することができ、とてもよかったと感じています。先生方が英語がお上手で、フィードバックのほめ言葉のやり取りも素晴らしかったです。自分はなかなか自信がもてずモヤモヤしてしまうこともありますが、前向きに頑張ります。
- 長すぎず、短すぎないちょうど良い研修時間に思います。
- 効果的にほめるためにはどうしたらよいのかを学ぶことができました。

第2回講座の詳細分析

ここからは、質問12.「総合的にこの講座に満足できましたか。」の肯定的回答が90%未満であった第2回と第4回、そして第6回講座をより詳細な分析のために、「受講者の外国語(活動)指導経験年数」(第2回のみ「外国語(活動)のTT経験年数」)と以下の3つの質問(質問1と質問4と質問12)とのクロス集計表を作成し、カイ2乗検定を行った。

まず、第2回講座の詳細分析を記す。第2回講座の内容はALTとのティームティーチング(TT)に関することであったので、属性項目の「外国語(活動)のTT経験年数」と上述の3つの質問との関係を調べた。

質問1.「講座の内容は理解できましたか。」と受講者の「外国語(活動)のTT指導経験年数」とのクロス集計表を作成した。カイ2乗検定により項目間の関係を分析したが、有意な関係は見られなかった。

次に、質問4.「講座内容はご自分にとって適切でしたか。」とのクロス集計を行った(**表3**)。そして、上記同様にカイ2乗検定により項目間の関係を分析した。すると、有意な関係があることを発見した(**表4**;有意水準5%)。**表3**によれば、有意な関係(調整済み残差:±1.96以上)にある項目間は4つある。ここから2つの特徴が見えてきた。1つは、「0~3年」の受講者は「適切だった」を統計的有意に選んでおり(調整済み残差:2.2)、「簡単だった」を統計的有意に選ばないことである(調整済み残差:−2.7)。つまり、「0~3年」の経験の浅い受講者はこの講座を「適切だった」と捉えていたことが分かった。

一方、「10年以上」の経験のある受講者は「適切だった」を統計的有意に選んでおらず、負の関係(調整済み残差:−2.3)がある。また、「簡単だった」を統計的有意に選択した(調整済み残差:2.6)。つまり、「10年以上」の受講者には、この講座は「簡単だった」ということが分かった。

表3 外国語(活動) TT経験年数(日本人とのTTも含む。)と質問4. クロス表

			4. 講座内容はご自分にとって適切でしたか。				
			少し難しかった	適切だった	少し簡単だった	簡単だった	合計
外国語(活動)TT経験年数(日本人とのTTも含む。)	0~3年	度数	9	41	4	0	54
		調整済み残差	.5	2.2	−1.9	−2.7	
	4~6年	度数	3	10	2	2	17
		調整済み残差	.3	−.8	−.1	1.6	
	7~9年	度数	1	4	1	0	6
		調整済み残差	.1	.0	.3	−.6	
	10年以上	度数	0	3	4	2	9
		調整済み残差	−1.3	−2.3	3.0	2.6	
合計		度数	13	58	11	4	86

表4 カイ2乗検定

	値	自由度	漸近有意確率(両側)
Pearsonのカイ2乗	22.817[a]	9	.007
尤度比	21.300	9	.011
有効なケースの数	86		

最後に、質問12.「総合的にこの講座に満足できましたか。」との関係を分析した（**表5**）。ここでも上記同様にカイ2乗検定により項目間の関係を分析した。すると、統計的有意な関係があることが発見できた（**表6**）。表5によれば、有意な関係にある項目間は2つある。「0~3年」の受講者は統計的有意に「どちらとも言えない」を選ばない傾向にあり、つまり、「0~3年」の受講者は、「どちらとも言えない」以外を選ぶ傾向にあった。**表5**によれば、「0~3年」の受講者は1名だけが、「やや不満」を選んでいて、ほとんどの受講者が「満足」と「まあ満足」を選択していることから、肯定的回答を選択する傾向にあることが見える。反対に「10年以上」の受講者は統計的有意に「どちらとも言えない」を選ぶ傾向があることが分かった。

表5　外国語（活動）TT経験年数（日本人とのTTも含む。）と質問12.のクロス表

			12. 総合的にこの講座に満足できましたか。				
			満足	まあ満足	どちらとも言えない	やや不満	合計
外国語（活動）TT経験年数（ネイティブだけでなく日本人とのTTも含む。）	0~3年	度数	24	26	2	1	53
		調整済み残差	.7	1.6	−2.6	−1.6	
	4~6年	度数	5	7	4	1	17
		調整済み残差	−1.2	−.1	1.9	.3	
	7~9年	度数	4	1	0	1	6
		調整済み残差	1.3	−1.3	−.9	1.4	
	10年以上	度数	3	2	3	1	9
		調整済み残差	−.6	−1.3	2.3	1.0	
合計		度数	36	36	9	4	85

表6　カイ2乗検定

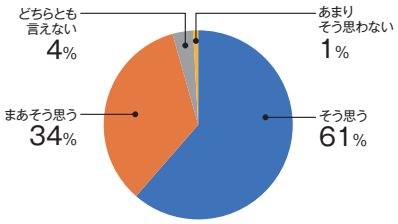
	値	自由度	漸近有意確率（両側）
Pearsonのカイ2乗	17.754[a]	9	.038
尤度比	16.566	9	.056
有効なケースの数	85		

上述の結果をまとめると、受講者は「外国語（活動）のTT経験年数」に関わらず講座内容を理解できた。また、「0~3年」の経験の浅い受講者には、講座内容は「適切だった」が、「10年以上」の経験者には「簡単だった」ようだ。この講座の満足度は受講者の「TTの指導経験年数」に影響を受けており、初心者ほど満足度が高くなる傾向であった。以上のことから、第2回講座は、TTの経験の浅い初心者にとってより有益であったことが分かった。

第３回講座　評価アンケート　結果分析

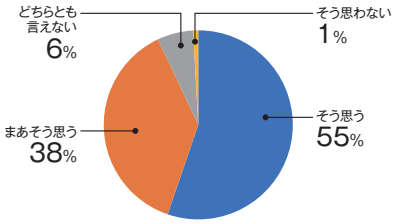
質問１　講座内容は理解できましたか。

「そう思う」（61%）と「まあそう思う」（34%）を合わせて肯定的回答が95%を占めた。否定的な回答は1%であった。



質問２　講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「そう思う」（55%）と「まあそう思う」（38%）を合わせて肯定的回答が93%であった。否定的回答は1%であった。

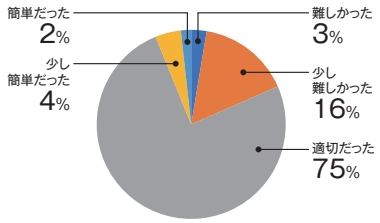


質問３　質問２で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 教科書をどう使って指導するのか、実際に使える話が聞きたい。

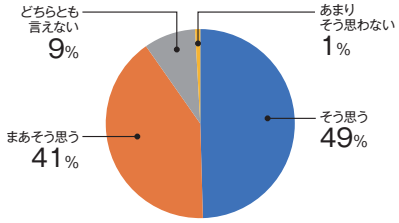
質問４　講座内容はご自分にとって適切でしたか。

「適切だった」との回答が75%あった。「難しかった」と「少し難しかった」を合わせて19%占めた。「簡単だった」と「少し簡単だった」が合わせて６%あった。



質問５　講座で提示された資料は今後活用できますか。

肯定的回答が90%を占めた。否定的回答は1%あった。

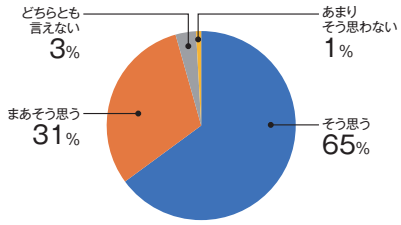


質問６　質問５で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 使う場面を想像できない。

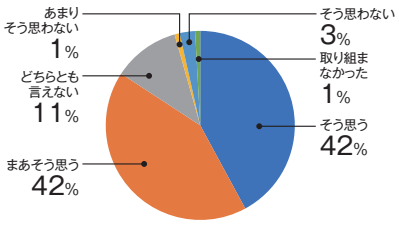
質問７　講師の説明は分かりやすかったですか。

「とてもそう思う」が65%で、「まあそう思う」が31%となり、肯定的回答は合わせて96%となった。否定的回答が1%あった。



質問８　講座前タスクは役に立ちましたか。

肯定的回答が84%を占めた。「どちらとも言えない」は15%あった。否定的回答が4%あった。また、「取り組まなかった」は1%だった。

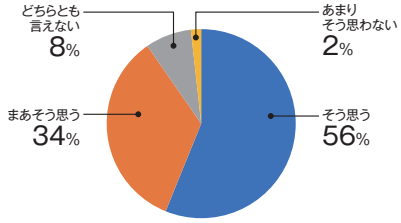


質問９　質問８で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 例文を発表していたが目的が分からなかった。
- 役に立たなかったから。
- 自分の勉強にはなりましたが、講座で動画の内容に触れているような実感がなかった。

質問10　講座中のタスクは役に立ちましたか。

90%は肯定的に回答した。否定的回答が2%あった。

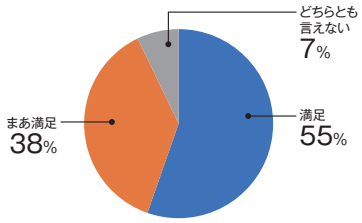


質問11　質問10で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- どの場面で使うのかわからない。
- 流れがよく分からないままスタートになることが多かった。

質問12　総合的にこの講座に満足できましたか。

第3回講座の総合的満足度だが、肯定的回答が93%を占めた。「どちらとも言えない」は7%、否定的回答はなかった。

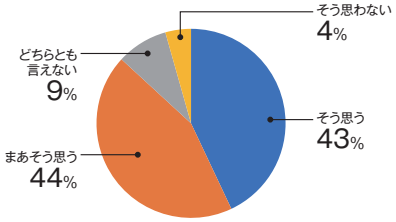


質問13　質問12で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 明日から使えるかわからない。私の水準が低いのだとは思うが。
- 時間が長いわりに学びが少ない

質問14　このような機会がまたあれば、受講したいですか。

87%の受講者が肯定的に回答した。「どちらとも言えない」は9%であった。否定的な回答は4%を占めた。



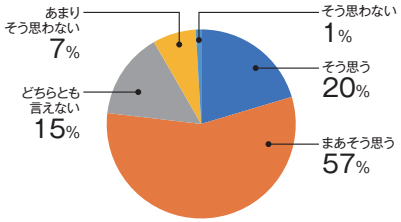
自由コメント

- 英語を話すことへの苦手意識を取り払うためには、英語に触れて、聞いて、使っていくことが大切だと思います。本講座を受け、子どもたちの実態や思いに即した題材や場面の設定を大切にしたいと思いました。
- 小学校でこのように英語を学んできていることがわかり、勉強になりました。
- 聞くこと、話すことにおいての授業の作り方、進め方についての説明がとてもわかりやすくためになりました。今の自分の授業が子どもの発達段階として合っているのか不安だったので、参考にさせていただきます。
- とても具体的な内容でとてもわかりやすかったです！
- 僕自身が外国語に苦手意識を感じていて、特に「話すこと」ができないと思っていました。けれど、できないではなく「言ってみる」を大切にし、たくさん子どもたちと聞いて子どもたちと一緒に楽しく話す外国語の授業をつくろうと思いました。二学期の外国語が楽しみです。
- 小学校の外国語教育の実態がわかりました。中学校国語科として、体験を交えて話をするという点は共通しているので、参考になりました。
- とても分かりやすかったです。
- 教材を開発する力はなかなか持てないと思う。教科書をどう使うのか知りたい。
- 子ども達には、もっとたくさん聞かせる時間を十分にとりたい。その上で、自信をもって自分の気持ちや考えを伝えたいと思えるように指導を重ねていきたい。
- １年生の担任をもったことしかないので外国語活動や外国語科をやったことがなく、教え方を全然知らなかったので、とても勉強になりました。スモールトークでは、すぐに絵や写真を使わずに、言葉だけで伝わるかどうかを試すのもいいなと思いました。２回目に絵や写真を見せることでだんだん言語の意味を理解させるのも面白いと思いました。対話形式で楽しく参加させていただきました。
- 少し難しすぎるようにも感じましたが勉強になりました。
- とても勉強になりました。夏休みの導入から子どもたちの思いや考えがだせ楽しい授業になりそうです。
- 自分の勉強不足な部分が多かったので、勉強していきます。
- 子音を意識して学ぶことが新鮮でした。
- 子どものことがよく分かるという利点を生かし、子どもたちが、話したくなるような内容を考える教材研究をしっかりしようと改めて思いました。マップを作って、話したいことを整理してから、英語を話す活動に入る流れがよいと思いました。
- 言いたくなる活動を考えていきたいと思います。
- ことばを学ぶ順番があることを知り、なるほどと思いました。聞くこと･話すことを工夫して行っていきたいと改めて考えました。ユニットの導入の一工夫が参考になりました。
- 井熊先生のお話を聞いて、「赤ちゃんと同じ状態でスタートする」というお言葉があって、講話内容がとてもスッと入ってきました。池田先生のお話から、オンセット･ライムについて研修を深めることができました。今回も大変実りある研修をさせていただきました。
- 「目的」のためには「言いたい活動」が必要ということを念頭に置きながら、今後も指導に当たっていきたいです。
- 言語習得の過程からも、音声をたくさんインプットさせていくことが大切だと改めて感じました。２学期の授業に生かしていきます。
- 担任だからこそできることを工夫していきたいと思います。
- 明日から実践したいと思う内容でした。
- 授業の組み立て方の参考になりました。

第４回講座　評価アンケート　結果分析

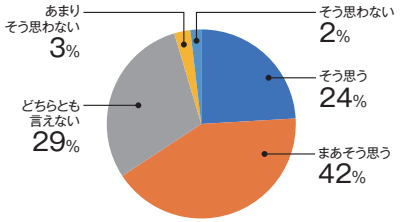
質問１　講座内容は理解できましたか。

「そう思う」（20%）と「まあそう思う」（57%）を合わせて肯定的回答が77%を占めた。否定的な回答は8%であった。



質問２　講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「そう思う」（24%）と「まあそう思う」（42%）を合わせて肯定的回答が66%であった。「どちらとも言えない」も29%と比較的多かった。否定的回答は5%であった。

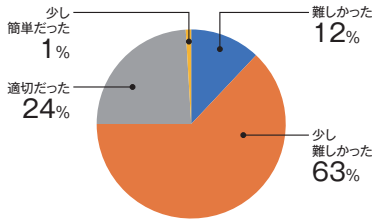


質問３　質問２で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 取り入れていくのは難しいと思う。そこまで細かく実践することができない。
- 小学校段階で、音韻や正しい発音の認識は難しいと感じた。

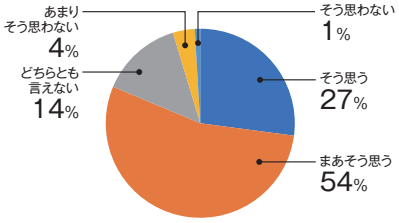
質問４　講座内容はご自分にとって適切でしたか。

「適切だった」との回答が24%あった。「難しかった」と「少し難しかった」を合わせて75%占めた。「少し簡単だった」が1%あった。



質問５　講座で提示された資料は今後活用できますか。

肯定的回答が81%を占めた。否定的回答は5%あった。

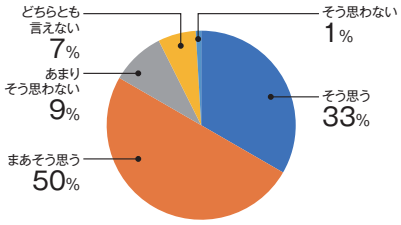


質問６　質問５で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 英語の音を確実に発音できる人材が必要だから。
- 内容が難しすぎて、どう活かしていけば良いかわからない。
- 以前都小研で音についての講義があり参加したことがありましたが、そこまで細かくやることは理想だと聞きました。音への意識をさせて文字を認識していくことは必要だと思いますが、授業時数などを考えると現実的ではないと思うからです。

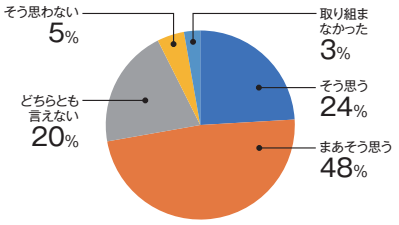
質問７　講師の説明は分かりやすかったですか。

「そう思う」が33%で、「まあそう思う」が50%となり、肯定的回答は合わせて83%となった。否定的回答が10%あった。



質問８　講座前タスクは役に立ちましたか。

肯定的回答が72%を占めた。「どちらとも言えない」は20%あった。否定的回答が5%あった。また、「取り組まなかった」は3%だった。

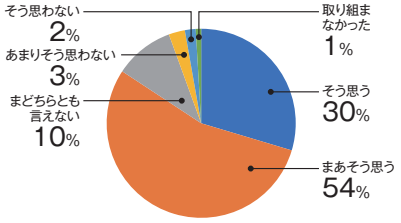


質問９　質問８で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 画像から英語の発音、綴りがわからず、私には難しい。
- 動画の内容との関係を見いだせなかった。

質問10　講座中のタスクは役に立ちましたか。

84%は肯定的に回答した。否定的回答が5%あった。

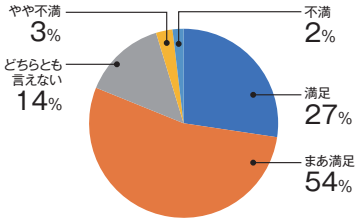


質問11　質問10で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 何をするのか、どういう発音なのか、綴りが分かりにくかった。

質問12　総合的にこの講座に満足できましたか。

第4回講座の総合的満足度だが、肯定的回答が81%を占めた。「どちらとも言えない」は14%、否定的回答は5%であった。

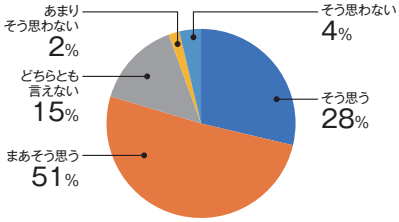


質問13　質問12で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- かなり理論の話が多く、もっと学校での実践例を写真などで見せて欲しかった。
- 内容が難しすぎて、今後にどう活かしていけば良いかわからなかった。

質問14　このような機会がまたあれば、受講したいですか。

79%の受講者が肯定的に回答した。「どちらとも言えない」は15%であった。否定的な回答は6%占めた。



自由コメント

- 英単語の子音についての知識を身に付けると、日本語の音声、古語、文法の活用等についての理解が深まると思いました。
- 僕自身が今まで、発音に関して苦手意識がありいつまでも日本語読みから離れられていなかったです。はじめの音と区切るだけで少し意識が変わったので子どもにも伝えたいと思いました。
- 読むこと、話すことは専門的な知識が必要だと改めて感じました。今後も研修を重ねていきたいです。
- 技術と知識が必要な実践の難しい内容だと感じましたが、今日学んだことを少しずつ私もできるところから前向きに取り入れていきたいです。
- 大変勉強になりました。発音を理解したり、練習したりする必要性を感じました。
- とても分かりやすく、ゲームが難しくて楽しかったです。
- 英語の音韻認識タスクに慣れ親しませることの大切さを理解することができました。今後、自分で実践してみるに当たって、参考になる教材や教科書を使った指導法など、教えていただけると、自分でも継続して実践できそうな気がします。
- 外国語は日本語と言語獲得のプロセスが違うし、自分の受けてきた外国語教育と受けた内容が違うので、難しく感じました。発音記号?も分からないので、分かりませんでした。
- フォニックスの大切さを改めて実感しました。また、英語の発音の難しさを体験して、３年生の担任をしているので、ローマ字の学習を何か工夫しながらできないかと考えてみようと思いました。
- 外国語が教科化されてから、高学年を担当したことがないので、「書く」「読む」の実態がわからない中の受講でしたので、自分にとって新たな視点からの学びとなりました。
- 外国語の指導をしたことがなく、普段も授業で取り組んでいなかったため、話の内容が難しく感じましたが、今後の指導に生かしていきたいと思います。
- これまで音声と文字とを関連付ける指導をする機会がなかったので、難しいです。指導計画にどのように位置付けていくのがいいか、考えていきたいと思います。
- 読むこと、書くことの指導イメージが少しできました。難しいですが、面白かったです。
- 外国語を聞き取ることが自分も苦手です。聞けないと言えない、書けないと思うので、音は大切だなと思いました。カード等を用いて児童に音の練習を広めていきたいと思います。
- 小学校段階で発音意識が高まれば、より会話に対する関心が高まると感じた。
- ３年生を担任していて２学期にはローマ字を習うので、お話にあったことを意識して指導してみたいと思いました。
- 指導にすぐ活かせそうなことばかりで大変勉強になりました。
- 勉強になりました。

第４回講座の詳細分析

ここからは、第4回講座をより詳細に分析する。まず、質問１「講座の内容は理解できましたか。」と「受講者の外国語（活動）指導経験年数」とのクロス集計表を作成した。カイ2乗検定により項目間の関係を分析したが、有意な関係は見られなかった。

次に、質問４「講座内容はご自分にとって適切でしたか。」とのクロス集計を行った。ここでも、カイ2乗検定により項目間の関係を分析した。しかし、有意な関係は見られなかった。

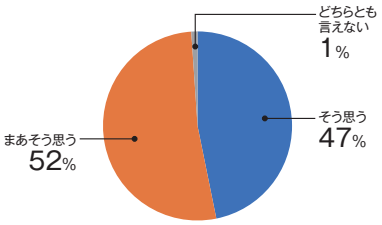
最後に、質問12「総合的にこの講座に満足できましたか。」との関係を分析した。ここでも上記同様にカイ2乗検定により項目間の関係を分析した。しかし、ここでも有意な関係は見られなかった。

以上の結果から、第4回講座の上記の３つの質問の回答結果と「外国語（活動）指導経験」との関係はないことが分かった。つまり、受講者の指導経験は第4回講座を評価する際に影響を与えなかったようだ。

第５回講座　評価アンケート　結果分析

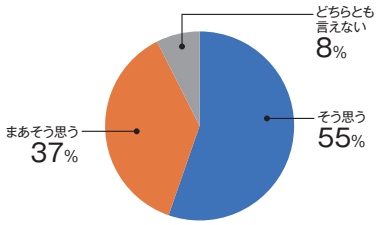
質問１　講座内容は理解できましたか。

「そう思う」（47%）と「まあそう思う」（52%）を合わせて肯定的回答が99%を占めた。否定的な回答はなかった。



質問２　講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「そう思う」（55%）と「まあそう思う」（37%）を合わせて肯定的回答が92%であった。「どちらとも言えない」は8%であった。否定的回答はなかった。

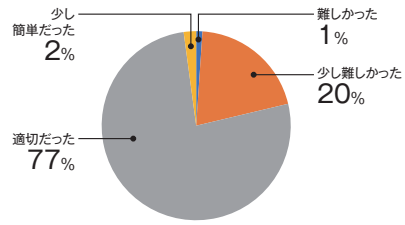


質問３　質問２で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

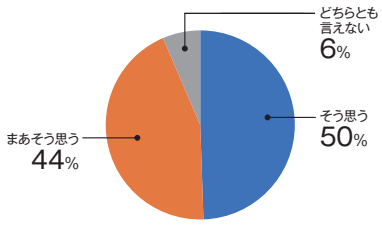
質問４　講座内容はご自分にとって適切でしたか。

「適切だった」との回答が77%あった。「難しかった」と「少し難しかった」を合わせて21%占めた。「少し簡単だった」が2%であった。



質問５　講座で提示された資料は今後活用できますか。

肯定的回答が94%を占めた。否定的回答はなかった。

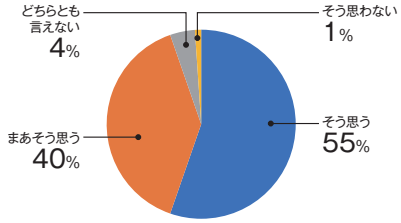


質問６　質問５で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

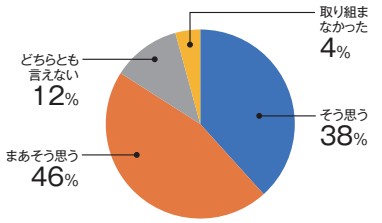
質問７　講師の説明は分かりやすかったですか。

「そう思う」が55%で、「まあそう思う」が40%となり、肯定的回答は合わせて95%となった。否定的回答は1%であった。



質問８　講座前タスクは役に立ちましたか。

肯定的回答が84%を占めた。「どちらとも言えない」は12%あった。否定的回答はなかった。また、「取り組まなかった」は4%だった。

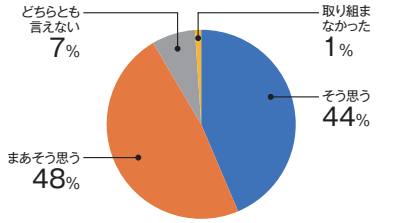


質問９　質問８で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- あることに気づいていませんでした。申し訳ありません。

質問10　講座中のタスクは役に立ちましたか。

92%は肯定的に回答した。否定的回答はなかった。「取り組まなかった」が1%あった。

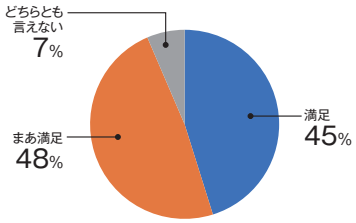


質問11　質問10で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問12　総合的にこの講座に満足できましたか。

第5回講座の総合的満足度だが、肯定的回答が93%を占めた。「どちらとも言えない」は7%、否定的回答はなかった。

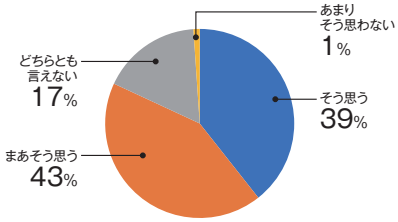


質問13　質問12で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問14　このような機会がまたあれば、受講したいですか。

82%の受講者が肯定的に回答した。「どちらとも言えない」は17%であった。否定的な回答は１%であった。



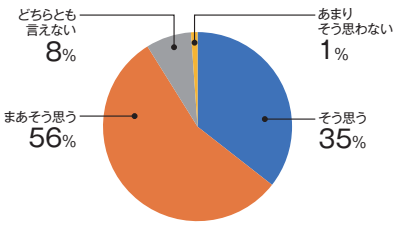
自由コメント

- とても勉強になる内容でした。ここで勉強したことを活かせるように、頑張っていきたいと思います。
- 実際の授業の様子や具体的な評価の方法が示されていて大変わかりやすかった。
- 実際の授業からのお話だったので、実践的で分かりやすかったです。
- 特別支援学級担当なので英語指導に触れる機会が少ないのですが、今日の講座はとても参考になりました。
- 難しい言葉が出てきましたが、具体例を沢山入れて話してくれるともっと分かりやすかったと思います。
- 今回の講座も普段の授業に役立てられる内容であると感じました。しかし一方で現在の教育現場では難しいのではないかとも思いました。教科担任制なども導入され、多くの児童を見るという視点からみるとどうしてもパフォーマンス評価に頼ってしまうのではないかと思います。今回講師の先生の話は理想的でためになりました。
- ビデオでの具体例がとても分かりやすかったです。
- パフォーマンス評価実施のプロセスを具体的に説明していただいて大変勉強になりました。
- 授業のビデオの中で、自分の学校だけがNo1であるかのように指導するところに違和感を感じました。「モチベーション」をあげるためかと思いますが、「それぞれの良さがあってよい」「共通点や相違点もある」「その良さを互いに認め合う」方向で進めてほしいと感じました。
- 分かりやすく説明してくださったので、時間がたつのが早く感じました。
- 言語活動の捉えを改めて確認しました。できることから準備をして、実践していきます。
- 外国語の授業展開例、パフォーマンス評価実施のプロセスがとても分かりやすく、校内で伝達したいと思いました。
- やはり教師側の英語力もそれなりに必要だし、ALTの人材もそろっていないと子どもたちの使える英語力は身に着かないのではないかと感じました。
- インプット提示型のrecastとアウトプット誘導型のElicitationという言葉を初めて聞きました。どちらも、普段の活動の中で実施していることだったので、名目がつくと「自分たちがんばっているな」と言う達成感につながります。
- 個人面談や区小研事前検討会等で全ての会を受講できず、大変申し訳なく思っております。
- 言語活動と練習を明確に意識して授業づくりを行っていきたいと思います。また、フィードバックやパフォーマンス評価についての理解も深まりました。

第６回講座　評価アンケート　結果分析

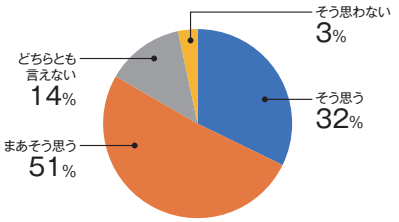
質問１　講座内容は理解できましたか。

「そう思う」（35%）と「まあそう思う」（56%）を合わせて肯定的回答が91%を占めた。否定的な回答は1%であった。



質問２　講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか。

「そう思う」（32%）と「まあそう思う」（51%）を合わせて肯定的回答が83%であった。「どちらとも言えない」は14%であった。否定的回答は3%であった。

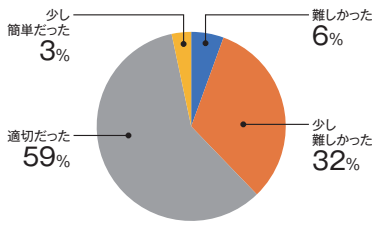


質問３　質問２で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 連携の必要性はこれまでも感じてきたことです。その中でどのような具体例があるか、どのように連携していけば良いのか、現場で使える内容の研修であって欲しかったです。
- 連携しているのを前提に話が進んでいたから。
- 校区によって抱えている課題が異なり、異なる地域の状況を聞いても自校の課題解決につながらなかった。

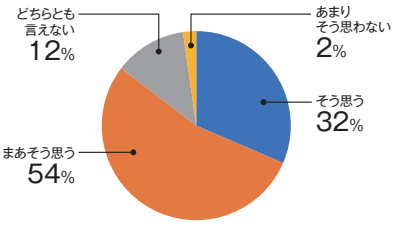
質問４　講座内容はご自分にとって適切でしたか。

「適切だった」との回答が59%あった。「難しかった」と「少し難しかった」を合わせて42%占めた。「少し簡単だった」が3%であった。



質問５　講座で提示された資料は今後活用できますか。

肯定的回答が86%を占めた。否定的回答は2%であった。

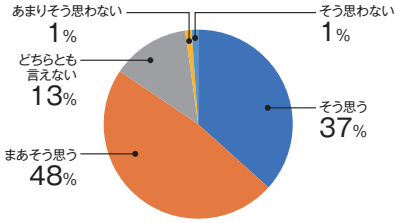


質問６　質問５で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- まだよく分からない。

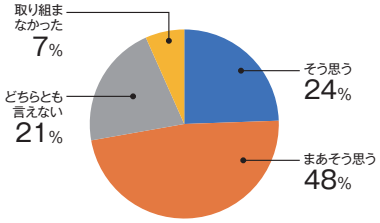
質問７　講師の説明は分かりやすかったですか。

「そう思う」が37%で、「まあそう思う」が48%となり、肯定的回答は合わせて85%となった。「どちらとも言えない」が13%で、否定的回答は2%であった。



質問８　講座前タスクは役に立ちましたか。

肯定的回答が72%を占めた。「どちらとも言えない」は21%あった。否定的回答はなかった。また、「取り組まなかった」は7%だった。

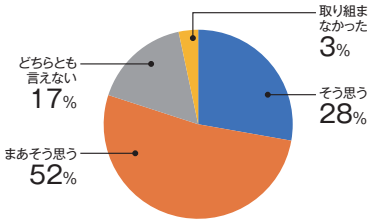


質問９　質問８で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 講座前タスクに気づいていませんでした。

質問10　講座中のタスクは役に立ちましたか。

80%は肯定的に回答した。「どちらとも言えない」が17%あった。否定的回答はなかった。「取り組まなかった」が3%あった。

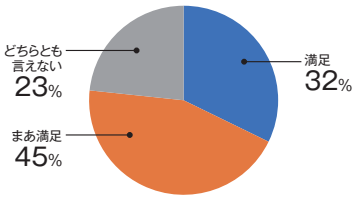


質問11　質問10で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問12　総合的にこの講座に満足できましたか。

第6回講座の総合的満足度だが、肯定的回答が77%を占めた。「どちらとも言えない」は23%、否定的回答はなかった。

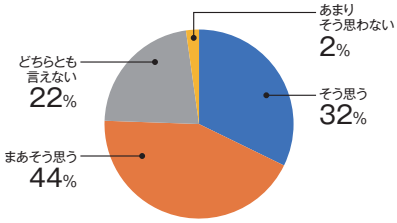


質問13　質問12で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問14　このような機会がまたあれば、受講したいですか。

76%の受講者が肯定的に回答した。「どちらとも言えない」は22%であった。否定的な回答は2%であった。



自由コメント

- 小中学校の連携は大切だと思うのですが、時間の確保が課題です。
- どうしても連携という面では課題があるなと改めて感じました。大切なのは子どもたちが必要な力を身につけることと将来に生かすことだと考えると現状のままではよくないと思います。普段の授業から意識してみたいと思います。
- 学校間の接続は難しいなと改めて感じました。気軽に授業参観などができる環境が作られるといいなぁと思いました。
- コロナ禍で学校間の交流が減り、他校の外国語活動を知らない状況では話すのが難しいと感じる面がありました。
- 生徒指導上、教科指導上において小中連携は必要かと思いますが、特に外国語は「接続」という点で重要であると研修を受けて改めて感じました。
- 山口県での小中連携例が秀逸でした。人や物にカテゴライズされていて、わかりやすいと感じました。
- 小・中の連携についての講義でしたが、小学校の立場からは、楽しんで英語ができる程度のレベルで学習したいという希望があります。
- 今回の講義内容は英語科担当の出席が望ましかったのかと感じた。事前に「〇〇向け」というように伝えて頂けるとありがたい。
- 学校間の接続・連携の大切さを改めて感じる研修でした。地域や学校によって取り組み方に差が出てしまうのは仕方のないことかもしれませんが、できる限り児童・生徒のために学校間の連携をとれるような時間の確保や意義のある話し合いの機会がとれたらいいなと思いました。私はまだ経験が浅いので、そのような場を設定したり設けたりすることは難しいのですが、中学校・高校へと進んでいく児童のこれからの学びを見通した授業を行うことが今の自分に必要なことであると感じた研修でした。

第6回講座の詳細分析

ここからは第6回講座を詳細に分析する。まず、質問1.「講座の内容は理解できましたか。」と「受講者の外国語（活動）指導経験年数」とのクロス集計表を作成した。カイ2乗検定により項目間の関係を分析したが、有意な関係は見られなかった。

次に、質問4.「講座内容はご自分にとって適切でしたか。」とのクロス集計を行った。ここでも、上記同様にカイ2乗検定により項目間の関係を分析した。しかし、有意な関係は見られなかった。

最後に、質問12.「総合的にこの講座に満足できましたか。」との関係を分析した。ここでも上記同様にカイ2乗検定により項目間の関係を分析した。しかし、ここでも有意な関係は見られなかった。

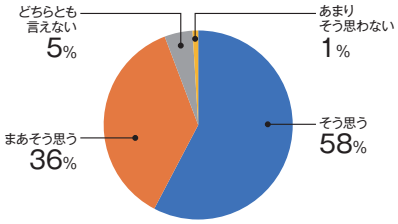
以上の結果より、受講者の「外国語（活動）指導経験年数」と上記の３つの質問との間に有意味な関係は見られなかった。つまり、外国語（活動）指導経験は第6回講座の評価には影響を与えなかったことが分かった。

ここからは、第7回から第12回の講座評価アンケートの結果と分析を記す。第7回から第12回は授業研究形式であるため、第1回から第6回とは異なる質問を設定した。

第７回講座　評価アンケート　結果分析

質問１　授業動画で授業者が行った言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」（58%）と「まあそう思う」（36%）を合わせて肯定的意見が94%を占めた。「どちらとも言えない」が5%で、否定的回答は1%であった。

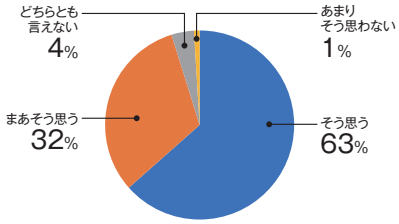


質問２　質問１で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- いつもやっていることだったので、改めて活用しようと思うことはありませんでした。

質問３　動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が63%で、「まあそう思う」が32%で、肯定的回答は合わせて95%とかなり高かった。一方、否定的回答は1%であった。

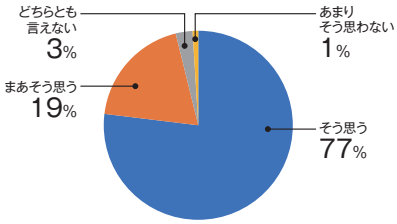


質問４　質問３で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- もっと協議の時間が長いとよいと思いました。

質問５　講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が77%を占めた。「まあそう思う」が19%で肯定的回答が96%であった。「どちらともいえない」は3%で、否定的回答は1%であった。

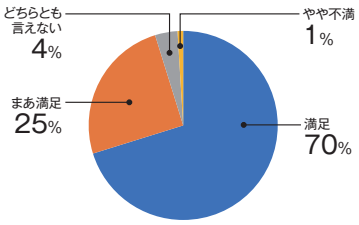


質問６　質問５で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- いつもやっていることだったので、改めて活用しようと思うことはありませんでした。

質問７　**総合的にこの講座に満足できましたか。**

「満足」が70%で、「まあ満足」が25%となり、肯定的回答は合わせて95%であった。一方、「どちらとも言えない」は4%で、否定的回答は1%であった。

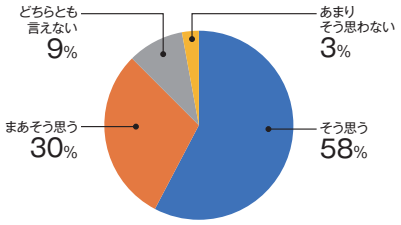


質問８　**質問７で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。**

- せっかく授業をしてくださったので、もっと協議が双方向でできるとよいと思いました。

質問９　**このような機会があれば、また受講したいですか。**

肯定的回答は合わせて88%と高かった。一方、「どちらとも言えない」は9%で、否定的回答は3%であった。



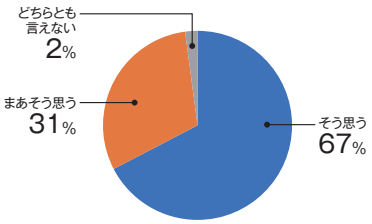
自由コメント

- 実際の授業を用いての解説、とても参考になりました。
- 授業の改善点を実演されていて、とても参考になりました。
- やはり、外国語の授業は専科が必要だと強く感じました。ALTとの打ち合わせも、子どもたちに正しい発音を覚えさせるためにも、外国語に長けた先生が専科として各学校に配置されることが望ましいと思いました。
- 児童へのほめ方や、ALTとの役割分担などを勉強させていただきました。今後の自身の授業に取り入れて活かしていきたいと思います。
- 小西先生のポジティブな声掛けやALTとの役割分担について大変勉強になりました。教員のポジティブな声掛けのおかげで、授業の活動の雰囲気が良くなっていると感じました。さらに、「グッジョブ」のような声掛けが活動の中で自然と行えるようになると良い、という講師の先生のお話も参考になりました。
- 授業提案、ありがとうございました。子どもの「伝えたい」、「話したい」を引き出すための取り組みについて外国語の授業のみならず、学級経営も踏まえた雰囲気づくりをしていることが伝わってきました。今後自分の学級にも落とし込んで活かしていきたいと思います。
- 先生だけではなく、子ども同士のリアクションがとても勉強になりました。講師の先生から助言いただいたように、どんなところがgoodなのか、意味（価値）付けできるとよう心掛けたいと思いました。
- 書いたものを示しながら、コミュニケーションをとることが大切だと感じました。
- これまでの講習を生かした授業実践を見せていただき、具体的なイメージをもつことができました。ご助言も具体的で理解が深まりました。大変多くのことを学び得た時間だったと思います。
- 実際にTTではどのような役割をするか、どのようなフィードバックが効果的か実演をしていただきながらお話いただいたことが大変分かりやすかったです。いかにALTと授業のイメージを共有するかが私の課題だと感じました。
- 貴重な授業を見て考える機会を与えていただきありがとうございました。
- 講師の先生方が、実際の授業のデモンストレーションを見せてくださって勉強になりました。
- 実践から多くのことを学ばせていただきました。
- 講座当日、所用により欠席だったため、本日動画を閲覧させていただきました。

第８回講座　評価アンケート　結果分析

質問１　**授業動画で授業者が行った言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。**

「そう思う」（67%）と「まあそう思う」（31%）を合わせて肯定的意見が98%を占めた。「どちらともいえない」が2%で、否定的回答はなかった。

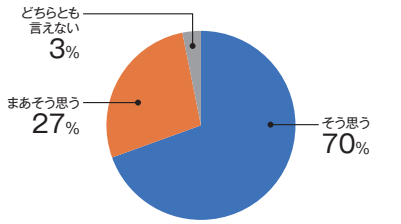


質問２　**質問１で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。**

- 回答なし。

質問３　**動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。**

「そう思う」が70%で、「まあそう思う」が27%で、肯定的回答は合わせて97%とかなり高かった。否定的回答はなかった。

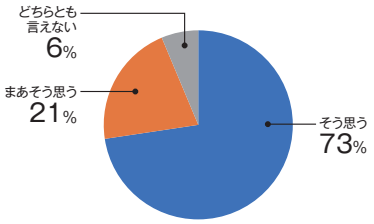


質問４　質問３で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

• 回答なし。

質問５　講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が73%を占めた。「まあそう思う」が21%で肯定的回答が94%であった。「どちらとも言えない」は6%で、否定的回答はなかった。

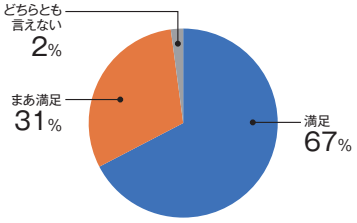


質問６　質問５で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

• 回答なし。

質問７　総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が67%で、「まあ満足」が31%となり、肯定的回答は合わせて98%であった。一方、「どちらとも言えない」は2%で、否定的回答はなかった。

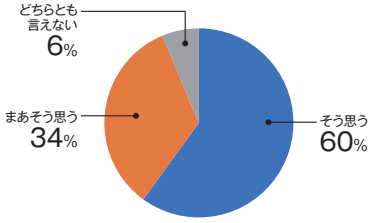


質問８　質問７で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

• 回答なし。

質問９　このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて94%と高かった。一方、「どちらとも言えない」は6%で、否定的回答はなかった。



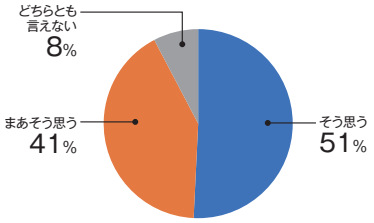
自由コメント

• 「何のために書くか」という目的意識や、「どのようなことを意識して書くのか」といったことを児童と共有するという視点がとても勉強になりました。高学年を担任するときはもちろん、中学年でも参考にさせていただき、取り入れられるところは取り入れていきたいと思います。
• 意欲的に言葉を獲得しようとする子どもの姿を見ることができました。講師の池田先生が4回目講座と関連させて指導くださったので、より納得できました。思考力、判断力、表現力の育成を意識して授業をつくることが重要だと思いました。
• 自然な流れで、必要感があり、子どもたちが主体的に取り組む姿が素晴らしかったです。私が6年担任の時に、ペアトークができるように、まず書かせてから話すという流れでやっていました。しかし、授業者の下田先生のように十分考え、あれこれ話し、共有してから書かせる方が意欲、思考力の面で良いということを学びました。大変勉強になりました。
• 子ども達がなんとかして自分の考えを伝えようとしている姿は私の考える外国語科の理想に近く、伝え合うことの喜びを児童が実感しているからこそだと思いました。私自身４年生の学級担任ですが、外国語活動の段階から伝える喜び、分かり合う楽しさを実感できる授業をしていきたいと改めて感じました。
• 事前に授業動画が配信されていましたので、動画を視聴する時間を取らなくても良かったのではないかと思いました。事前に見て整理しておくようにという指示通り試聴していた人にとっては少し手持ち無沙汰な時間になっていました。
• 授業者の先生の願いとして「正しさより伝えたい思いを大切に」ということでしたが、ジェスチャーや表情で補足できる口語（話す）と違って、文字にする（書く）ときはより正確であることが求められると思います。動画内では文法的には誤りである表現が見られたと思いますが、どこまで許容できるのか、と疑問に思いました。
• 足立区はALTの授業機会が年に2回ということで、浦安市がどれだけ恵まれているかということを実感しました。そうした厳しい環境におかれましても、下田先生の素晴らしいご指導の下、子どもたちが「生きた英語」に親しもうという意欲が伝わってきました。チャレンジという合言葉もとても素晴らしいと思います。今回の研修を通して学んだことを二学期以降の授業に役立てていきたいと思います。
• 学習に必要感をもたせる課題設定や児童の意欲を高める取り組みなど、大変参考になりました。自分たちで使える表現を用いて考えていこう、先生に頼らずPicture Dictionaryで調べてみようとする学級の雰囲気も素晴らしかったです。私の授業でも生かしていきたいと思うことがたくさんありました。
• 授業をしてくださった先生方、そして講師の方々、貴重な研修を準備してくださりありがとうございました。
• 生き生きした子どもたちの活動を見ることができて、自分の学習活動ではこのような姿を目指したいなと思いました。書く目的を明確にした授業を心がけたいと思いました。該当の小学校には年に２回しかALTが勤務しないということで、週に２回ALTに来てもらって授業ができている当校は、恵まれている環境にあるなぁと感じました。講座の終了時刻を守っていただけるとありがたいと思いました。予定時刻を過ぎてもなお一方的にお話を続けられるというのは、せっかくのよい研修の機会なのに最後にもやもやしてしまって、残念でした。
• 高い意欲をもって楽しみながら学習している子どもたちを見て、普段の学習の中で様々な工夫と丁寧な指導をなさっていることが伝わってきました。素晴らしい実践例を見させていただきありがとうございました。
• 同じ区の先生方の授業が見られて、自分のスキルアップにつながったと感じました。生かした授業をこれから行っていきたいと思います。
• 2回目の参加でした。このような機会を与えてくださり感謝しています。
• 講座当日欠席だったため、本日動画を閲覧させていただきました。

第9回講座　評価アンケート　結果分析

質問１　授業動画で授業者が行った言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」（51%）と「まあそう思う」（41%）を合わせて肯定的意見が92%を占めた。「どちらとも言えない」が8%で、否定的回答はなかった。

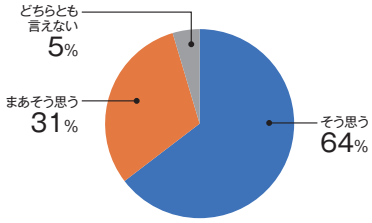


質問２　質問１で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

• 回答なし。

質問３　動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が64%で、「まあそう思う」が31%で、肯定的回答は合わせて95%とかなり高かった。否定的回答はなかった。

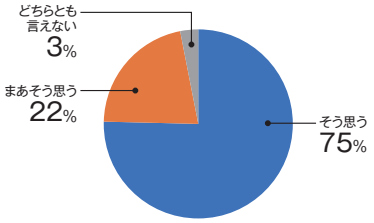


質問４　質問３で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

• 回答なし。

質問５　講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が75%を占めた。「まあそう思う」が22%で肯定的回答が97%であった。「どちらとも言えない」は3%で、否定的回答はなかった。

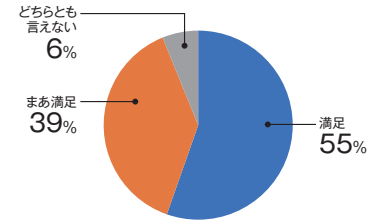


質問６　質問５で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

• 回答なし。

質問７　総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が55%で、「まあ満足」が39%となり、肯定的回答は合わせて94%であった。一方、「どちらとも言えない」は6%で、否定的回答はなかった。

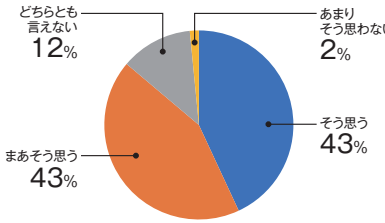


質問８　質問７で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

• 回答なし。

質問９　このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて86%であった。一方、「どちらとも言えない」は12%で、否定的回答は2%であった。



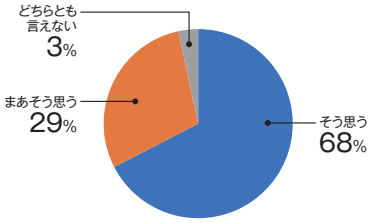
自由コメント

• 授業動画を視聴して先生方の様々な話をお聞きできてよかったです。
• 16:20が終了時刻だと思います。時間意識が足りないと思います。
• 本日は、授業提案ありがとうございました。大変、参考になりました。
• 今年は専科がいるので、指導はしていないのですが参考になりました。
• 大変勉強になりました。
• 今日学んだことを自分の授業でも生かしていきます。
• 中学年の外国語の授業をしたことがないので、大変勉強になりました。Smalltalkの重要性や扱いたい文法をどのように自然に取り入れていくかなどの様々なアイデアを知ることが出来、勉強になりました。
• 学校の行事や出張と重なり、なかなか研修に参加できず残念に思っています。限られた機会を有意義に使っていきたいと思います。
• 授業の進め方や子どもたちへの支援の仕方などが参考になりました。

第10回講座　評価アンケート　結果分析

質問１　授業動画で授業者が行った言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」（68%）と「まあそう思う」（29%）を合わせて肯定的意見が97%を占めた。「どちらとも言えない」が3%で、否定的回答はなかった。

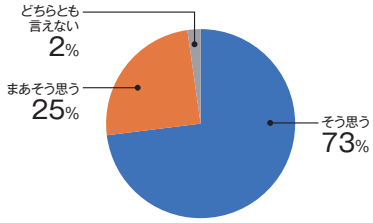


質問２　質問１で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問３　動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が73%で、「まあそう思う」が25%で、肯定的回答は合わせて98%とかなり高かった。否定的回答はなかった。

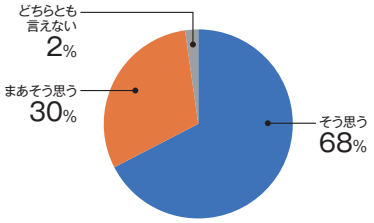


質問４　質問３で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問５　講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が68%を占めた。「まあそう思う」が30%で肯定的回答が98%であった。「どちらとも言えない」は２%で、否定的回答はなかった。

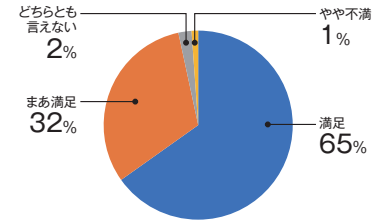


質問６　質問５で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問７　総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が65%で、「まあ満足」が32%となり、肯定的回答は合わせて97%であった。一方、「どちらとも言えない」は2%で、否定的回答は1%であった。

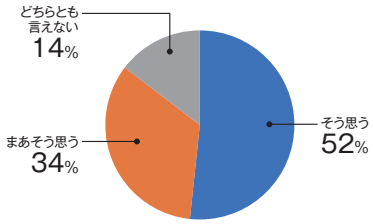


質問８　質問７で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- この講座はとても勉強になり満足しています。事前に資料をプリントアウトして持参するように指示がありましたので数日前に印刷して持参しました。しかし、それは第９回のものでした。帰校後確認しましたが第10回のものは前日に提示されていました。それならば、前日にプリントアウトするように指示が欲しかったです。

質問９　このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて86%であった。一方、「どちらとも言えない」は14%で、否定的回答はなかった。



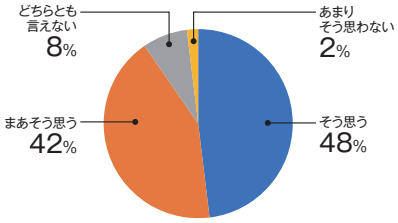
自由コメント

- ALTとの活用や活動の組み立てなどとても勉強になりました。
- あまり見る機会がないので、とても勉強になりました。
- 低学年の実践例もあればいいなと思います。
- 外国語の授業は、まだ担当したことがないのですが、授業の流れなどとても参考になりました。
- 大変参考になる授業でした。参観させて頂きありがとうございました。本研修を生かして、学習活動をよりよいものにしていきたいと思いました！
- 現在、特別支援教育を担当していますが、導入部がどの子どもにとっても分かりやすいものですてきだと感じました。
- 実践を見せていただくことができ、たくさんの学びがあります。
- 子どもたちが楽しそうに学び合っている姿が印象的でした。知りたい・聞きたい気持ちをもたせることの大切さを再認識しました。
- 授業を提供いただき、ありがとうございました。大変参考になりました。
- 今回学んだHRTとALTとの役割分担を自分の授業でもできるようにしたい。
- 題材設定の仕方等、大変参考になりました。
- 第９回も受講させて頂き、同じ単元で違う活動内容を知ることが出来てとても勉強になりました。また、ALTとの関わり方についてもとても参考になりました。
- 研究授業やその講話はとてもためになるものでした。

第11回講座　評価アンケート　結果分析

質問１　授業動画で授業者が行った言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」（48%）と「まあそう思う」（42%）を合わせて肯定的意見が90%を占めた。「どちらとも言えない」が８%で、否定的回答は2%であった。

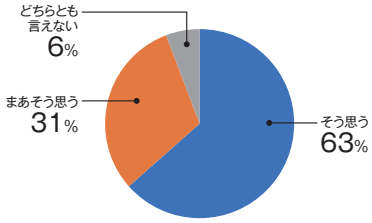


質問２　質問１で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 動画視聴の内容が、全てでないので、そこから判断することが難しい。また、時間的に忙しく、授業の考察が十分にできなかった。

質問３　動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が63%で、「まあそう思う」が31%で、肯定的回答は合わせて94%とかなり高かった。否定的回答はなかった。

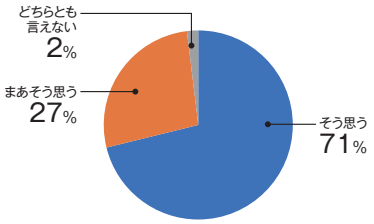


質問４　質問３で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問５　講師の指導・助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が71%を占めた。「まあそう思う」が27%で肯定的回答が98%であった。「どちらとも言えない」は２%で、否定的回答はなかった。

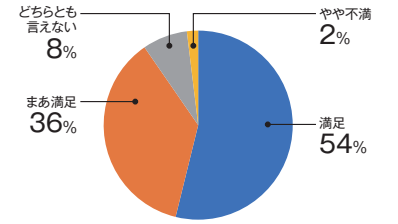


質問６　質問５で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問７　総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が54%で、「まあ満足」が36%となり、肯定的回答は合わせて90%であった。一方、「どちらとも言えない」は8%で、否定的回答は2%であった。

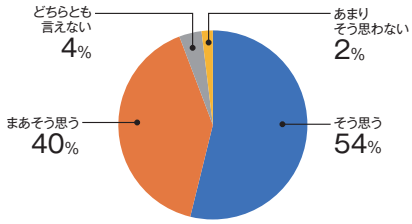


質問８　質問７で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 私の能力も関係あると思うのですが、自分の実践に生かせるかどうか現時点ではわからない。

質問９　このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて94%であった。一方、「どちらとも言えない」は4%で、否定的回答は2%あった。



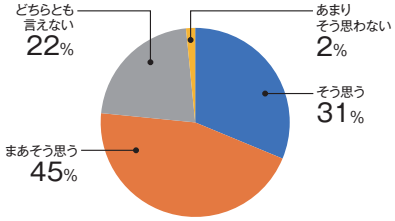
自由コメント

- なかなか英語の授業を見る機会がなかったので、ありがたかったです。
- Who am I?クイズというと、出題者からヒントを出す形ばかりを考えていたので、質問をする形は新鮮でした。
- 今回もたくさんのことを学ぶことができました。
- これまでほとんど参加させていただきました。可能な限り我々が参加しやすいように開始時間を工夫してくださっているのだと思いますが、終了時刻を意識していないということは参加者としては少々不満があります。このように学ばせていただけることは大変ありがたく思っております。
- 取組が参考になります。
- 普段からの西巻先生の丁寧な指導が動画を通して伝わってきました。ゆっくり、はっきりした発音などで児童が安心して取り組めるように意識されているのではないかと感じました。
- 講義型やワークショップ型よりも、授業研究を見て協議する形の研修の方が実践をイメージしやすいため、本研修のようなものを増やしてほしいと思いました。
- 先生方の外国語の授業を拝見する機会はそんなに多くないので、15分の短い時間ではありますが、授業を見て考えたり話を聞いて納得したり、とても有意義な研修をさせていただいています。

第12回講座　評価アンケート　結果分析

質問１　授業動画で授業者が行った言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。

「そう思う」（31%）と「まあそう思う」（45%）を合わせて肯定的意見が76%を占めた。「どちらとも言えない」が22%で、否定的回答は2%であった。

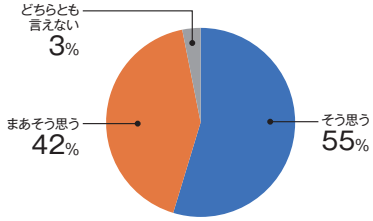


質問２　質問１で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 同じような機会がない。

質問３　動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。

「そう思う」が55%で、「まあそう思う」が42%で、肯定的回答は合わせて97%とかなり高かった。否定的回答はなかった。

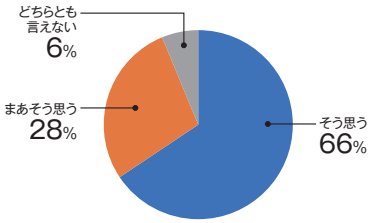


質問４　質問３で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問５　講師の指導･助言は役に立ちましたか。

「そう思う」との回答が66%を占めた。「まあそう思う」が28%で肯定的回答が94%であった。「どちらとも言えない」は6%で、否定的回答はなかった。

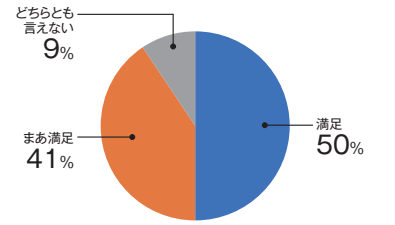


質問６　質問５で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問７　総合的にこの講座に満足できましたか。

「満足」が50%で、「まあ満足」が41%となり、肯定的回答は合わせて91%であった。一方、「どちらとも言えない」は9%で、否定的回答はなかった。

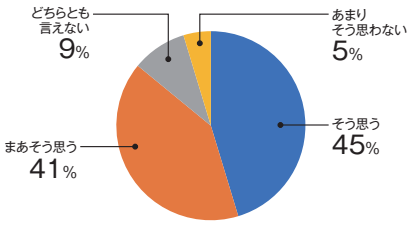


質問８　質問７で「やや不満」か「不満」を選んだ方へ質問です。その理由を教えてください。

- 回答なし。

質問９　このような機会があれば、また受講したいですか。

肯定的回答は合わせて86%であった。一方、「どちらとも言えない」は9%で、否定的回答は5%あった。



自由コメント

- 小中連携について実践を伴って学ぶことができた。
- 貴重な研修の機会を与えていただき、ありがたく思う。様々な予定と重なってしまい、すべての回に参加できなかったのが残念。
- 小学校と中学校の連携として、一緒に授業している様子を初めて参観し、とても勉強になりました。連携の仕方について今後の参考になりました。
- 小学生と中学生が一緒に授業を行う実践例はこれまで見たことがなかったので、大変勉強になりました。
- 全12回に渡り、多くのことを学ばせていただきました。本講座で学んだことを今後の指導に生かし、より子どもたちが主体的に学び、力をつけていけるように努力していこうと改めて思いました。

V 講座運営に対する評価

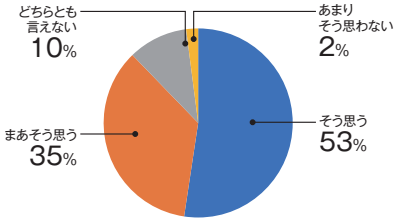
講座全体の運営に関して、受講者から意見や感想をもらうために全講座終了後に全講座総合評価アンケートを実施した。受講者には第12回講座終了後の約2週間以内に回答をしてもらった。このアンケートは、最初に属性に関する質問４つ、次に講座時間の長さや実施時期、実施時間帯、そして講座の実施形態、最後に講座内容の要望に関する18問の質問、計22問で構成された。アンケートに回答してくれた受講者数は合計147人であった。以下に、その詳細を記す。

全講座総合評価アンケート　結果分析

受講者の属性に関しては、「Ⅳ.講座内容に対する評価」の中で全12回の講座に参加しアンケートに回答してくれた受講者の回答結果を既に報告している。この全講座総合評価アンケートに回答してくれた受講者も共通の回答者であるため、ここでは受講者の属性に関する質問の回答結果は割愛する。

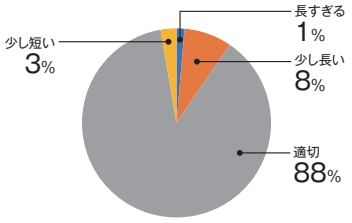
質問１　講座受講の選択制は適切でしたか。

「そう思う」が53%で「まあそう思う」が35%で肯定的回答は合わせて88%であった。「どちらとも言えない」は10%あり、否定的回答は2%であった。この結果から、受講者の約9割は講座の選択制について肯定的であることが分かった。



質問２　講座の長さ（60分 - 70分）は適切でしたか。

「適切」の回答が88%ととても多かった。「長すぎる」と「少し長い」を合わせて9%となった。一方、「少し短い」が3%あった。回答者のほとんどにとって、講座の長さは適切であったと言える。しかし、「長い」と感じた受講者が一定数（9%）いることが分かった。逆に「短い」と感じた受講者も3%存在した。
このような結果の理由は、以下の質問3の回答から明らかだ。以下の回答によれば、夏季休業中の講座の長さに対しては、時間的余裕を感じたようだ。しかし、それ以外の時期に関しては授業や児童対応などの業務が多く講座の受講でさえも難しかったようだ。また、働き方改革の影響を受け研修の時間そのものを短くすることを望む声もあった。そのため60分以下の長さを求める声が一定数存在した。一方、「短い」と感じた受講者は、全6自治体各地の受講者ともっと協議をしたかったようで協議時間を長くしてほしかったようだ。

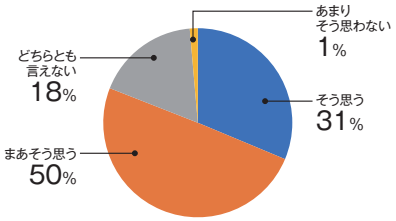


質問３　上記の質問２で「適切」以外を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。（＊代表的なコメントのみ掲載）

- 休憩無しはやや長い。
- せっかく各地の学校をつなげているので、協議ができるとよかった。ただ、平日に時間をとるのは難しいですね。
- 講師の解説が予定時間を超えていた。間に合わないのであれば、解説資料を授業資料とともにサイトに上げるなどして時間を守られる工夫があるとよい。
- 特別時程を組まずとも児童を下校させた後に開始し、勤務時間内に終了することができるのがありがたかった。
- 夏季休業中の研修は参加しやすいのですが、通常の平日夕方は業務が立て込んでおり、そのため特に学級担任の参加率が低い現状となっています。45分から60分程度、終了時刻厳守で行われるのであればもう少し参加しやすくなると思います。
- 協議の時間をもう少しとって頂けるとありがたいです。
- 時間超過が多くあった。
- 全12回は多いので、せめて1講座の時間を短くして欲しい
- 自分が参加させていただけた日は暑かったので、30分ごとに休憩などが欲しかったです。
- The meetings are all in Japanese so it is hard to follow and keep up. It often feels really long.
- 1時間以内で終わるとありがたいです。働き方改革と研修の充実のバランスから。

質問４　講座の実施時期は適切でしたか。

「そう思う」と「まあそう思う」を合わせて81%であった。大部分が講座の実施時期を「適切」であると感じていたことが分かった。しかし、「どちらとも言えない」が18%あった。一方、「あまりそう思わない」が１%あった。
この結果に関しては、次の質問5の回答がわずかしかなかったため実施時期が「適切」とは言えない理由がはっきりは分からない。

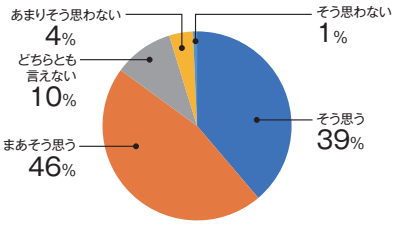


質問５　質問４で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。（＊代表的なコメントのみ掲載）

- 授業期間中であるため。
- 講座回数が多かった。拠点校での参加教員が必ず一名という指定があり、小規模校としては負担があった。

質問６　講座の実施時間帯は適切でしたか。

肯定的回答が合わせて85%あった。「どちらとも言えない」は10%あり、否定的回答は1%あった。この結果から、概ね適切な時間帯であったと言える。
ただ、次の質問7の回答から実施時間帯にいくつかの問題点を挙げる受講者もいた。それによれば、授業時間との重複がまず挙げられる。また、勤務時間を超えての受講もあったようだ。
しかし、本事業の受講者の対象地区が全国規模であり、それぞれの授業時間や勤務時間の開始と終了に違いがある。そのため、全ての地区の要望に応えるような講座の実施時間帯を設定することが非常に困難であると言えよう。

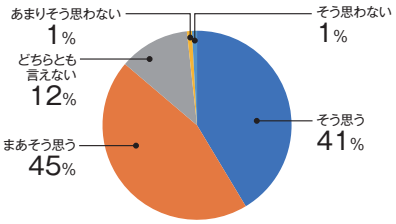


質問７　質問6で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。（＊代表的なコメントのみ掲載）

- 授業時間帯であるため。
- ６時間目と重なり、中高年の学級担任は参加しにくい日もあったため。
- 時間超過があるので開始を早めるか内容を再考していただけると良いと思います。
- 子供を帰してすぐだったので、20分か30分に開始してほしかったです。
- オンライン参加でしたが、下校指導と開始時刻が15分ほど重なってしまうので、15時半～16時半などにしていただくと補教を立てずに参加でき、ありがたいと感じました。
- 休業中に行う場合はよいが、通常の授業日に行う場合に休憩時間にかかってしまっており、勤務時間（4時半）以降にのびたこともあった。
- 勤務の関係上、休憩時間と重なってしまうため。

質問８　拠点校で講座を受講された方にお聞きします。講座の受講は適切でしたか。

肯定的回答が合わせて86%あった。「どちらとも言えない」は12%あり、「あまりそう思わない」と「そう思わない」はそれぞれ1%あった。これらの結果から、拠点校での受講は概ね適切であったようだ。
次の質問9の回答によれば、回数が多く日常業務にしわ寄せがいくという声があるが、本事業は講座の選択制を採用しているのであるから、業務に負担を感じられる時期は受講をせず、時間的余裕があるときに受講するという選択をすることができたはずである。この趣旨が十分に伝わっていなかったのかもしれない。

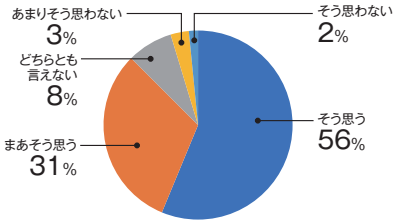


質問９　質問8で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- 回数が多く、日常業務にしわよせがいくことがあった。
- リモートで短時間の受講は技術の向上にはつながらない。意識の変化は期待できるが、専科ではない担任が指導技術の向上図るには、長期で直接学ぶ必要があると考える。

質問10　拠点校以外（ご自分のPCやスマホなどを使って）で講座を受講された方にお聞きします。講座の受講は適切でしたか。

肯定的回答は合わせて87%であった。「どちらとも言えない」は8%あり、否定的回答は5%あった。これらの結果から、拠点校以外での受講についても概ね適切であったようだ。
ただ次の質問11の回答にあるように、個人のスマホでしか見られない場合は画面が小さいく見づらいこともある。もし拠点校に集まることが難しく、学校のタブレットを使っての個人受講を希望する場合は当該教育委員会と協議してもらう必要があるであろう。

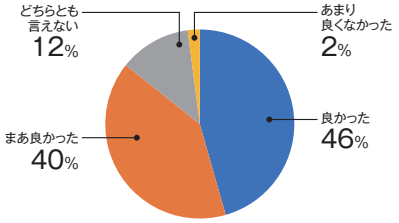


質問11　質問10で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。（＊代表的なコメントのみ掲載）

- 画面が小さいので自分のスマホではなく、学校のタブレットなどで行いたい。

質問12　Zoomの映像はいかがでしたか。

肯定的回答は合わせて86%となった。「どちらとも言えない」は12%あり、「あまり良くなかった」は2%あった。Zoomの映像は概ね適切であったようだ。
次の質問13の回答結果から、録画した授業の画質が良くなかったという声が聞かれた。本事業に提供していただいた録画授業は全て実施本部から貸与したiPadで録画してもらい、それを配信業者に編集してもらったものであった。画質が良くないことがあったとのことであるので、原因については調べる必要があるかもしれない。

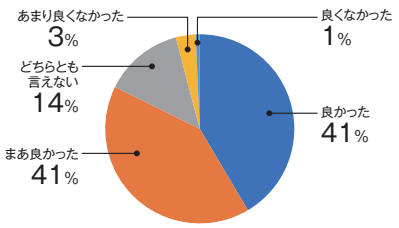


質問13　質問12で「あまり良くなかった。」か「良くなかった。」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- 画質がよくないことがありました。
- 録画の授業が見づらい。
- Usually the video quality makes it hard to see what the teachers or ALTs in the video are holding or to see what the kids are doing.

質問14　Zoomの音声はいかがでしたか。

肯定的回答は合わせて82%であった。「どちらとも言えない」は14%あり、否定的回答は4%あった。これらの結果からZoomの音声に関しても概ね適切であったと言える。
しかし次の質問15への回答から録画授業の音声が聞き取りづらいという声が複数あった。教室全体の音声を拾っているため特定の子どもの音声を拾うことは難しい授業動画があったのであろう。また、講座開始の前半で接続に戸惑ったところがあったことは否めない。また、各会場のインターネット回線の環境はそれぞれ異なっていたため、それに左右されて接続が不安定であった可能性も除外できない。

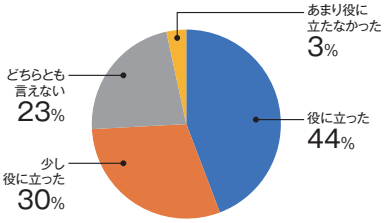


質問15　質問14で「あまり良くなかった。」か「良くなかった。」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- 音割れが激しく、音声が聞き取れないところがありました。
- 講座の参加者間での音声はクリアで問題ありませんでしたが、授業研究での録画された動画の音声については、拾いたい音声をねらって撮ったものではないので、児童の音声がよく聞き取れなかったものが多かったです。字幕を入れてもらったりしていましたが、授業の様子を録画するのは難しいと感じました。
- 授業の様子など音声が聞き取りにくかった。
- The Audio quality sometimes is very hard to understand.
- オンライン上なので仕方ないと思いますが、話す人の切り替えの際に音声が出ないことで時間がとられるのもあったので、もう少し通信状況がよくなってほしいと思います（足立区の問題かと思いますが…）
- 音声がこもって、聞きにくい時があった。
- 聞き取れないことがあったり、接続に手間取ることがあったりしたように思う。（特に前半は仕方がなかったのかもしれないが）
- 研究授業の子どもたちの声がもっとはっきり聞けると嬉しいです。

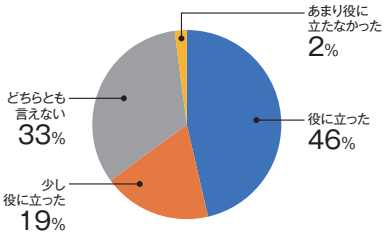
質問16　本事業で作成したWebページはいかがでしたか。

肯定的回答は合わせて74%であった。「どちらとも言えない」が23%とこれまでの回答の中ではかなり大きな値となった。否定的回答は3%だった。これは、昨年度も同じ傾向であったのだが、多くの受講者はWebページを活用し、それについてある程度満足したが、一定数の受講者はあまり活用しなかったのではないか。そのため、「どちらとも言えない」という判断しかねる回答が多かったのではないかと推察できる。



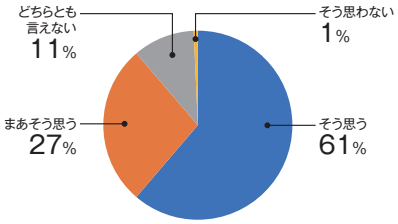
質問17　拠点校で講座を受講された方にお聞きします。本学からお貸しした機器（テレビ会議システム、iPad、ICレコーダー）はいかがでしたか。

肯定的回答は合わせて65%であった。「どちらとも言えない」が33%であった。否定的回答は2%であった。この回答結果も昨年とほぼ同様となったが、受講者全員が本学からの貸与機材を一様に使用したわけではなく、各教育委員会の担当者や授業録画に関わった一部の受講者のみであった。そのために多くの受講者はテレビ会議システム以外は本学からの貸与機器を使用しておらず判断できなかったと推察できる。



質問18　全12回の講座の中に「授業研究」の講座（第7回～第12回）を入れたことは適切でしたか。

肯定的回答は合わせて88%となった。「どちらとも言えない」が11%あったが、否定的回答はわずかに1%であった。
P.66の自由コメントにあるように、実際の授業を録画し、それを見ての授業研究の形式は実りの多いものであったようだ。

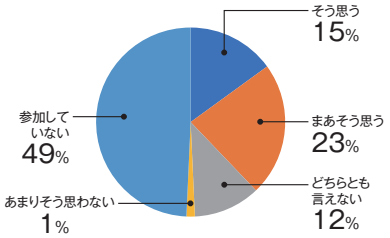


質問19　質問18で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- 協議会で質問しても、時間切れで回答がもらえなかったから。

質問20　「Zoomによる小学校英語・何でも相談交流室」は役に立ちましたか。

肯定的回答が38%であった。「どちらとも言えない」が12%で、否定的回答は1%であった。一番多かった回答は、「参加していない・分からない」で49%であった。
この企画は昨年まではなかったもので、本年度から始まった取組みである。12回の講座とは別に3回時間を設けて実施した。残念ながら相談者は毎回2、3名という少人数であった。結果として、少人数しか利用することがなかった企画となったためか、「参加していない・分からない」という回答が半分を占めた。質問21への回答にあるように、そもそもこの企画自体を知らなかった受講者もいたようである。



質問21　質問20で「あまりそう思わない」か「そう思わない」を選ばれた方は、ご意見をお聞かせください。

- 何でも相談交流室？は活用していないから。

質問22　次回講座を受けるとしたら、どんな内容を希望しますか。（＊代表的なコメントのみ掲載）

- 英語指導の経験がない人でも、基本的にこうやっていけば大丈夫という流れを学びたい。
- 日々の授業に活用できる実践的な内容を紹介して欲しい。
- 小中連携での交流の仕方の講座。
- 小学校の外国語が苦手な児童の会話。
- 外国語の評価方法や評価の実際について
- 必然性を児童が感じる授業作り。外国とZoomでつながることができる人脈作り。
- 1、2年生も外国が活動をしているので、低学年の授業の様子。
- レッスンプラン例やチャンツの紹介。
- 発音に関わる講座。
- ICTを活用した活動、実践。
- ALTとの事前・事後の打合せで確認しておくべきこと等、授業準備や事後評価のことについて具体的に知りたい。
- ALTとの連携について、TTの外国語活動の在り方。
- 子どもが楽しめる、ねらいに合ったアクティビティの紹介。
- 今回と同様の内容で、授業実践をまた見せてもらいたい。
- 今回の講座と同様に実践を踏まえて協議→講義の形が良い。
- ポジティブフィードバックやCAN DOリストの作成と活用、評価の具体的な方法。
- 教科書を使った授業研修。
- パフォーマンステストの具体的な評価の仕方。
- 県外の小学校の授業は今までにない経験だったのでとてもいい経験になりました。今までの方法でいい。
- 今回のように理論と実践の両方を学べる機会があるとありがたい。
- 英語の授業での言語活動を充実させるためにどのように取り組んでいくか。
- 具体的な指導内容(例えばcanなど)に絞った指導法についての講座。
- 指導と評価の一体化。どのような視点で具体的に子どもたちの学習をみとっていくのか。
- 実際の授業を見て評価の観点や視点を具体的に学べる講座。
- 小学校１年生から中学３年生の授業の活動が観たい。
- 英会話などの実践的な英語の講座。
- 今回のように、色んな学年の様々な単元の授業の様子を見させていただいたり、指導のコツなどを教えていただきたい。
- 学年を追っての積み上げや、成果、効果的な指導について知りたい。
- 拠点校・拠点校以外の２択制がよかった。移動時間を考えずすぐ参加することができました。授業についてもすべての時間ではなく、１５分程度でポイントを絞った内容でよかったので、また同じ内容を希望したい。
- 今回選択できなかった内容。
- 専科の先生による公開授業。

最後に、受講者からの自由コメントを掲載する。（＊代表的なコメントのみ掲載）

〈肯定的回答〉

- 毎年受講しています。各地域での授業実践を拝見することができるようになり、その度に外国語の指導がより充実してきているのを感じて、あらためて研修しなければという気持ちを強くしています。
- なかなか観察することのない英語授業を見させていただき、大変有り難く感じました。
- 外国語活動に対する意識向上に役立った。
- 研修の機会をいただき感謝します。勉強になりました。若手に大いに参加してもらいたいです。
- 各地の先生方と繋がりながら最先端の内容を学べることができました。
- 本研修でご指導いただいた内容を、当該職員から校内へ還元し広めさせる所存でございます。
- 実践につながる内容で多くの学びを得ることができました。
- たくさんの授業を実際に見て、協議を通して考えることで、自分の授業でどのように生かせるのかを具体的に理解することができました。
- 現在は外国語の指導を専科の先生に担っていただいております。今後、TTで指導する場面があったさいにはこの研修での学びを活かして「日本人教員（私自身）が進んで英語を活用し、自信をもって行う授業」を実践したいです。
- 全12回の講座を開講いただき、ありがとうございました。講座時間の所でも記入させていただいたのですが、協議の時間をもう少しとっていただけると幸いです。グループ４人程度で検討する場合だと、良かった点・改善点・疑問点などを話し合うとすると一人あたり１分程度しか話すことができず、協議というより意見発表に終始してしまいます。講師の先生の専門的で、最新の理論も大変勉強になるのですが、同じ自治体の他校の取り組みや他の先生方の実践を聞くことも大変参考になりますので、協議時間をもう少し確保していただけると助かります。
- 様々な指導法や考え方を学ぶことができて、外国語のみならず、他の授業にも転用可能な考え方も学ぶことができました。ありがとうございました。
- 全12回、大変勉強になりました。今後の指導にできることから取り入れていき、子どもたちがより外国語学習に興味関心をもって取り組めるように努力していきます。
- 大変学びの多い研修でした。一つでも多く取り組み、今後の実践に活用していきたいと考えます。
- 研修を通して授業の仕方を分かりやすく学ぶことができました。ありがとうございました。
- 毎回、すぐに実践に活かせることばかりで大変勉強になりました。
- 毎回の講座ありがとうございました。講師の方の講話や授業研究などを通して、外国語の授業に対する理解と自信を深めることができました。
- この研修のよさを多くの学校に知ってもらいたいです。希望者の参加ではなく、校内研修として職員みんなで受講できたらよいなと思いました。間違いなく、担任の先生方の外国語教育に対する見方が変わり、意欲と指導力向上につながると思います。すべての講座に参加することはできませんでしたが、たいへん勉強になりました。
- 毎回の外国語の授業に大変役立ちました。
- 関係者の皆様お疲れ様でした。アクティビティやコミュニケーションの取り方等授業で生かしています。
- 外国語について様々な角度から授業に生かせることを教えていただきました。
- 授業研究が面白かったです。理論を学んだあとに、実践をして、振り返るという形態はよかったと思っています。

〈改善を求める回答〉

- 講師の方や学校のご紹介はHPを通じてでも十分かと思います。オンラインでやり取りする内容を精選していくと時間内に終了できるかと思います。
- 講義のご指導のパワーポイントなどの資料も後日ホームページに掲載してほしいと思いました。
- 貴重な機会をいただきありがとうございました。都合により参加できなかった回のアーカイブ配信などがあるとうれしいです。

〔※事業局注：上記二つのコメントは事実誤認であり、本事業HPで講座パワーポイントを掲載しており、講座録画のアーカイブ配信を行っている。〕

Ⅵ 講座全体の総括

これまで、各講座評価アンケートと全講座総合評価アンケートの結果と分析を提示した。これらを踏まえて、以下に、本事業「MEIKAI-JOEプラス2022小学校外国語科等講座」の全体総括をまとめる。

1 参加者属性

① 全受講者延べ人数で1065人がアンケートに回答した。その中で足立区からの受講者が28%、浦安市16%、横手市16%、妙高市14%、狛江市14%、そしていわき市12%という結果であった。

② 「3·4年学級担任」が全体の30%で最大であった。次に、「5·6年学級担任」が23%で続き、「1·2年学級担任」が16%、「他教科専科·アドバイザー·その他」が14%、「英語専科」が11%、中学校教員3%、「管理職」3%であった。小学校で「外国語活動」を担当する「3·4年学級担任」と「外国語」を担当する「5·6年学級担任」が全体の半分以上を占めた。また、本事業に参加した一部の教育委員会ではその管轄地区小学校で1年生から「英語」に関わる授業を展開しており、「1·2年学級担任」の参加も多かった。さらに、「英語専科」の割合も昨年に比べて増加し、今年度から初めて中学校教員の参加もあった。小中連携が大事な事柄であることから、小学校教員のみならず中学校教員もこの事業に参加したことは大きなことであったと言える。この結果から、今回の講座を今まさに必要とする現場の様々な立場の教員が受講していたことが分かった。

③ 「0 ～ 3年」が最大の48%を占めた。次に、「4~6年」が23%、10年以上が19%、「7~9年」が10%と続いた。この結果から、比較的経験の浅い受講者が多かったことが分かった。また、7年以上の経験のある受講者もある程度受講しており、「10年以上」というベテラン教員も19%という高い割合を占めていた。この事業の大きな目的の一つは、比較的外国語の指導経験の浅い教員にある程度自信を持って外国語の指導にあたってもらうことであった。そのため、今回の受講者は主催者側が望んでいた結果であった。ただ、受講者の中には「10年以上」の指導経験者が19%も占めていたのはある意味驚きであった。それだけの経験者でも外国語の指導についてもっと学びたいと思う人は多いということを示しているのかもしれない。

④ TT指導経験は上記③とほとんど同じであった。

2 第1回から第6回講座(講義形式)評価アンケートから(以下、括弧内は肯定的評価の数値である。)

① 講座の内容を理解できたかに関して、第1回(97%)、第2回(99%)、第3回(95%)、第4回(77%)、第5回(99%)、第6回(91%)であった。第4回以外どれも高い数値となった。

② 講座の内容が現場のニーズに合っていたかに関して、第1回(95%)、第2回(90%)、第3回(93%)、第4回(66%)、第5回(92%)、第6回(83%)が肯定的であった。特に第1回と第3回、第5回が特に高い数値となった。第4回は「読むこと·書くことの指導」に関してだったが、上述した通り①の講座内容の理解に関してもあまり高い数値とならなかった。内容が受講者の求めるレベルを超えていたようである。

③ 講座内容が適切であったかに関して、第1回(66%)、第2回(67%)、第3回(75%)、第4回(63%)、第5回(77%)、第6回(59%)であった。第３回と第5回の数値が高かった。第6回が他の回と比べると若干低かった。

④ 講座で提供された資料が今後活用できるかに関しては、第1回(88%)、第2回(90%)、第3回(90%)、第4回(81%)、第5回(94%)、第6回(86%)とどの回も評価が高い。特に第５回が高く、第4回が若干低かった。

⑤ 講師の説明の分かりやすさに関しては、第1回(95%)、第2回(96%)、第3回(96%)、第4回(83%)、第5回(95%)、第6回(85%)であり、どの回も高評価であった。第4回と第6回は若干低かった。

⑥ 講座前タスクに関しては、第1回(71%)、第2回(74%)、第3回(84%)、第4回(72%)、第5回(84%)、第6回(72%)であった。どの回も高値であるが、第３回と第5回が特に高かった。

⑦ 講座中タスクは、第1回(80%)、第2回(85%)、第3回(91%)、第4回(84%)、第5回(92%)、第6回(80%)となり、どの回も高値であり、講座前タスクよりも高かった。特に、第3回と第5回は高値であった。

⑧ 総合的満足度は、第1回(92%)、第2回(84%)、第3回(93%)、第4回(81%)、第5回(93%)、第6回(77%)であった。特に、第１回と第３回、第5回は90%を超える高評価だった。第6回は80%に満たなかった。

⑨ 次回も同じような講座を受けたいかに関しては、第1回(89%)、第2回(75%)、第3回(87%)、第4回(79%)、第5回(82%)、第6回(76%)であった。どの回ももっと学びたいという意見が大部分を占めた。

⑩ クロス表とカイ2乗検定の結果から、第2回講座は受講者のティームティーチング(TT)の指導経験が講座の評価に影響していることが分かった。第2回講座はより経験の浅い初心者にとってより有益だった。

3　第7回から第12回講座(授業研究形式)評価アンケートから(以下、括弧内は肯定的評価の数値である。)

①「授業動画の中の言語活動は今後ご自分の授業で活用できそうですか。」に関しては、第7回(94%)、第8回(98%)、第9回(92%)、第10回(97%)、第11回(90%)、第12回(71%)であった。第12回を除きどの回も90%以上の高値であった。第12回は小中連携がテーマで、提供された録画授業は小学生と中学生が一緒に授業を受けるという斬新な取り組みであった。そのため、受講者が自分もやってみたいと思ったとしても、簡単に実践できる内容ではなかった。こういうわけで、第12回の授業は活用できるという回答にはつながらなかった可能性がある。

②「動画視聴後の協議で出た他の先生方からのコメントは参考になりましたか。」に関しては、第7回(95%)、第8回(97%)、第9回(95%)、第10回(98%)、第11回(94%)、第12回(97%)となり、どの回も高値であった。この協議の時間がとても評価が高いことが分かった。協議を通して、自分が気付いた点だけでなく他の受講者の気付いた点を共有することで自分でも気付かなかった学びができたようである。

③「講師の指導･助言は役に立ちましたか。」に関しては、第7回(96%)、第8回(94%)、第9回(97%)、第10回(98%)、第11回(98%)、第12回(94%)となり、どの回も高値であった。

④ 講座の総合的な満足度に関しては、第7回(95%)、第8回(98%)、第9回(94%)、第10回(97%)、第11回(90%)、第12回(91%)となり、どの回も90%を超える高値であった。特に第7回と第8回、第9回、第10回は高値であった。

4　全講座総合アンケートから

① 講座の選択制

88%が肯定的回答であった。受講者に概ね支持されたと言える。しかし、ある受講者はこの選択制について知らなかったようである。さらなる周知が必要であった。

② 講座の長さ

88%が適切と回答した。特に、授業研究での受講者同士での十分な協議の時間の確保などを考えると60分は協議時間が短かすぎたかもしれない。しかし、会場が複数に分かれており、接続などのトラブルなどで開始時間が遅れることがあった。それによって、後ろに時間が伸びてしまったことは残念であった。

③ 講座の実施時期

81%が適切と回答した。このことに関しては、一定の評価を得られたと考える。しかし、授業期間中の講座の受講は、通常業務と重なり難しいため長期の休業中などに行うことが望ましいという声も一部あった。本事業では、第3回講座から第8回講座までの6回を夏季休業中に実施したが、全ての回を夏季休業中に実施することは非現実的であった。

④ 講座の実施時間

85%が適切と回答した。本事業には全国に渡って6教育委員会が参加しており、その管轄の小学校教員が対象であった。そのため授業の開始時間や就業時間など各学校で違っており、講座の企画の段階で各教育委員会にアンケートを実施して、最善だという時間に講座を設けるに至った。こういう経緯があったことを全ての受講者が承知していたわけではないので、ある程度否定的回答は想定できた。しかし、よりよい講座の実施に向けては講座実施時間の検討は必要かもしれない。

⑤ 拠点校での講座受講

86%が適切と回答した。他の受講者と協議をすることができるなど拠点校に集まって受講することにはメリットが多かったようだ。拠点校での受講は概ね適切であったようだ。

⑥ 拠点校以外での講座受講

87%が適切と回答した。拠点校での受講のように他の受講者と協議することはできないが、拠点校に参集する必要がないなどの大きなメリットがあり、拠点校外での受講は概ね適切であったようだ。

⑦ Zoomの映像・音声

映像に関して86%、音声に関して82%が適切と回答した。概ね適切であったようだが、授業録画の画像が良くなかったという声があった。また、音声も特に授業の録画する際には更なる工夫が必要のようだ。

⑧ 本事業のWebページ

74%が役に立ったと回答した。肯定的回答の割合を上げるためには、Webページの使い方について具体的な解説なども必要かもしれない。

⑨ 全12回の講座の中に授業研究（計6回）を入れたこと

88%が肯定的回答をした。概ね適切であった。また、授業研究各回の評価結果からも分かるように、授業研究の講座は毎回90%を超える満足度であった。昨年度同様に受講者が実際の授業を見て学ぶ形式を好んでいることが分かった。

⑩「Zoomによる小学校英語・何でも相談交流室」

49%が「参加していない・分からない」と回答し、肯定的回答は38%であった。肯定的回答につながらなかった要因はいくつか考えられる。一つは、この取組の周知の仕方に課題があったかもしれない。また、実施の時期や回数なども検討する必要があるだろう。

Ⅶ 教育委員会 受講者等の総括

1．東京都足立区教育委員会総括

足立区教育委員会学力定着推進課（以下、区教委と表記）では、英語教育の推進を施策の重点項目の一つとして、「英語大好き小学生の育成」を掲げ、７年間を見通した足立区の英語教育モデルを推進している。今年度も年間３回の小学校外国語活動・外国語科研修を柱とし、小学校外国語活動・外国語科におけるICT機器の活用について理解を深め、ICT機器を効果的に活用した「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進してきた。

また、英語が堪能な日本人である小学校英語教育アドバイザーを全68校の小学校に配置するとともに、ALTを派遣している。さらに今年度より、各校を訪問し、学級担任及び英語専科教員への指導・助言や授業支援を行う教科指導専門員を配置している。

このような状況の中で取り組んだ本講座について、足立区の実践を踏まえて総括する。

【成果】

① 充実した講座内容と成果の還元

本講座には拠点校として１校、拠点校外でのZoomによる参加校として20校から、延べ636名が参加した。今年度は受講者が希望する講座を受講する「選択制」とし、幅広く受講者を募った。参加した学校数は昨年度と同数だが、受講者は19人増えた。昨年度に引き続き、本講座に対する需要の高さが伺えた。本講座は学習指導要領で示される領域ごとの指導と評価のポイントについて、系統的かつ体系的に理解できる充実した内容であったことが受講者のアンケートから伺えた。

次に成果の還元について述べる。拠点校では質疑応答の時間が設定されていたため、受講者が感想を述べたり、疑問点を質問したりすることで、受講者全員が研修内容について理解を深めることができた。また、拠点校外からは事前にMEIKAI-JOEホームページに掲載される授業動画を観て、事前に質問や意見を区教委担当に伝えることで、講座当日の質疑応答に拠点校外の受講者の意見を反映できる機会を設けた。また、今年度の講義・演習の内容や授業研究について、各校の授業研究会や小中連携研究会等で紹介し、本講座の成果を幅広く周知した。

② 理論と一体化した授業研究

今回の講座は、英語教育に関する講義・演習が６回、講義・演習を踏まえた授業研究が６回で構成された。授業研究は講座前半の理論編を踏まえて行い、研究協議は講義・演習を担当した講師から指導・講評をいただけたことで、理論と実践が結び付き、一層理解を深めることができた。本区の実践は「話すこと・聞くこと」でご講義いただいた井熊ひとみ氏の第３回講座及び「読むこと・書くこと」でご講義いただいた池田周氏の第４回講座を踏まえたものである。本区では、児童が伝え合う表現を広げたり、内容を深めたりすることで、より充実した言語活動を行う授業を目指している。そのため、コミュニケーションを図る目的、場面、状況を明確にして最終活動を設定し、「本当に伝えたいことを伝える」言語活動を本区の授業研究に取り入れた。

池田周氏からは、「活動の目的（ALTに宝物クイズを出すこと）が明確になっていること、中間指導が活動の中に有効に組み入れられていたこと」について評価をしていただいた。さらに「ALTに伝わるように、表現の適切さや正確さ、クイズの内容的な伝わりやすさ等、様々な伝わりやすさの例を挙げて子どもたちに考えさせることができる」と具体的なご指導をいただいた。

このように、学んだ理論と実践が一体となる授業研究と研究協議の形式は受講者にとって明快であり実践的かつ深い研修となった。

【課題】

課題としては、拠点校での参加者が拠点校の教員のみであり、他校からの参加がなかったこと挙げられる。拠点校では研究協議の視点に基づき、各自の考えをグループで交流し、全体共有をするという形式で研究協議を行った。受講者は受講者同士での活発な意見交換や、授業研究を担当した自治体への質疑応答を通して自身の疑問を解決したり、各自治体の受講者の様々な意見を聞いて自身の考えを整理したり深めたりすることができた。

今後の研修については、受講者に拠点校で受講するメリットを周知したり、拠点校を区の中心部に設置し、拠点校へ出張しやすいようにしたりすることも必要である。

また、今回の講座は選択制であったことから、外国語活動・外国語科の指導に関心のある受講者を幅広く募ることができた。一方で、全ての講座を受講した受講者は５割程度であり、本講座の目的を受講者全員が十分に達成できたわけではない。

2. 東京都足立区受講者感想

講座の前半の講義・演習では理論的な内容を、後半の授業研究では様々な自治体の学校の実践を学ぶことができ、非常に実りの多い講座となった。外国語活動・外国語科の授業では、これまでは授業の具体的なイメージが湧かないことがあり、指導書通りの進め方をしたり、過去の事例を参考にしたりすることが多かった。特に意図を考えることなくチャンツを入れたり、多くの歌を歌ったりと、毎時間、ルーティンで活動をしてしまうことも多くあった。

しかし、今回の講座を通して動機付けの大切さや、言語活動を充実させる方法などを多く学ぶことができた。また、外国語活動・外国語科の授業に対する意識も変わった。今後は、より多くの児童がめあてを意識して外国語活動・外国語科の授業を楽しみながら受けることができるよう、講座で学んだことを日々の実践に生かしていく。

足立区立寺地小学校　上田 賢治

3. 千葉県浦安市教育委員会総括

本市は、浦安市教育振興基本計画（浦安市教育ビジョン）が掲げる基本理念「学び 育み 認め合い『未来を創造する』人づくり」のもと、設定された4つの目指す子ども像の実現に向け、小中学校の教育を推進している。目指す子ども像のひとつ「豊かなかかわり(参画・交流・郷土愛・多文化共生)」では、適切に表現する力を身に付け、人や社会に積極的に関わるとともに、我が国やふるさと浦安に誇りをもち、多様な文化を大切にする態度・能力を高める教育の充実を進め、国際理解教育や外国語教育を推進している。小学校1・2年生においては、特別の教育課程を編成し、外国語活動を実施している。市独自のカリキュラム（小学校「１・２年生で年間14時間）を活用しながら、児童の発達段階に応じた外国語による様々な活動を充実させ、外国語に慣れ親しむだけでなく、3年生からの外国語活動への滑らかな接続を目指している。また、市立全小中学校に、外国語指導助手（ALT）を派遣し、ティーム・ティーチングによる授業を基本としている。現在は、ICT機器の積極的な活用を推進しながら、児童生徒の多文化理解及び外国語によるコミュニケーション能力の育成を図っている。

【成果】

本年度より、各学校の実情に応じて本研修への参加者を柔軟に決定するよう各学校へ依頼した。その結果、英語専科教員が在籍する学校では英語専科教員が毎回研修に参加することで、さらに専門性を高めることにつながり、英語専科教員がいない学校では、様々な立場の教員が交代で研修に参加することで、幅広く研修の意義や効果を実感してもらうことができた。

講座全体では、学習指導要領の原点について吉田研作先生からお話をいただき、ティーム・ティーチング、4技能(5領域)に関する具体的な指導法、評価や学校段階間の接続など、どれも外国語を教える上での基盤となる大切な事柄を学ぶことができた。中でも、第7回～第12回講座では、それまでの研修内容を踏まえて、教員が授業を実践し、学校や自治体の枠を超えて協議できたことは大変有意義であった。

協議の場面では、各校の授業の様子や困り感を共有しながら、視聴した授業について意見を交換し合うことができた。また、各自治体の先生方と意見交換したり、講師の先生方から御指導をいただいたりすることは、研修参加者の授業に対する不安感の解消や、授業を行う上での自信に繋がるものであった。

今年度、学校訪問の際に、児童の発話場面が多く見られる素晴らしい授業を参観する機会があった。授業後、授業者に話を聞くと、「これはMEIKAI-JOEの講座で学んだ内容を取り入れた実践です」と話され、講座での学びが実際の教室で生かされていることがわかり、本講座が教員へ与える影響力の大きさを再認識できた。

【課題】

小学校での外国語活動や外国語をリードしていきたいという熱意をもった教員を増やすとともに、日々の授業にまだ自信がもてない教員の悩みを解決していくことが引き続き課題である。特にパフォーマンステストについては、多くの学校で実施されているものの、よりよい評価の仕方がないかと質問をいただくことがよくある。教員の困り感を解消するために、必要とされる知識や実践方法を伝えていくことも課題である。

また、本市はALTが各校に１名ずつ配置されているが、外国語に自信がない教員は、授業の計画や進行のほとんどをALTに任せすぎてしまう傾向がある。自身が間違えることを恐れず、積極的に英語を使って、ALTと共に授業づくりができる教員をさらに増やしていくことを推し進めていく。

4. 千葉県浦安市受講者感想

本講座は、全12回というボリュームのある講座設定で大変学びの多いものであった。前半は大学の先生方による外国語学習の理論に関する講義。後半は前半の内容を受けて設定された授業研究だった。後半の授業研究の様子を視聴しながら、前半の指導内容と合わせ、より深く学ぶことができた。

ALTとのティーム・ティーチングにかかわる授業実践では、実用的なクラスルームイングリッシュを取り上げていたので、どのような場面でどのように使うことができるのかを知ることができた。また、児童の意欲の引き出し方については、指導技術だけでなく、その根底にある理論についても解説があり、とても納得できた。

上記のほかにも「聞くこと・話すこと」「読むこと・書くこと」「学校段階の接続」などについて、実践報告を交えた説明は、今後の授業実践に生かせるものであり、たくさん学ぶことができた。このような機会をつくってくださったことに感謝したい。

浦安市立日の出小学校　阿部 大輔

実際に授業を視聴して話し合いを行う授業研究がとてもよかった。特に、12回目の研修では、小・中学生が一緒に外国語を学ぶ交流授業が題材であり、小中連携の取組みの中でもとても珍しい取組みであり、興味深かった。映像では、「He」や「She」の文のきまりについて、中学生が小学生に教える場面があった。どのように説明をすれば小学生にわかってもらえるかを考えながら、小学生に一生懸命伝えている姿がとても素敵であった。

今回の授業の目標は、小・中学生が協力し合い、他者紹介をするというものであったが、実際に小・中学生はお互いのことをよく知らないので、紹介し合うという言語活動に必然性が生まれていてよかった。

また、小学生にとっては、中学校で外国語をどのように学習しているのかを体験できたこともよいことだと思う。1

度でもこのような授業を受けることができれば、中学校へ進んだときに安心して授業に臨むことができると思った。私の学校でも、このような取組みを実践していきたい。

浦安市立見明川小学校　西岡 光一

5. 秋田県横手市教育委員会総括

本市では、横手市立横手南小学校を拠点校とし本研修を実施した。参加者は、拠点校の教員10名、市内小学校教員14名、専科教員2名の計26名であり、そのうち、外国語活動・外国語の指導経験が３年未満の教員の割合は38%、５年未満の割合は65%であった。学習指導要領の趣旨を踏まえた指導の在り方について、指導理論と授業研究の両面から体系的に学ぶ本研修の成果を本市全体で享受することができるよう、昨年度、一昨年度と同様に全小学校から参加者を募り、各校における外国語教育の充実・発展を目指した。

【実施方法】

本市では、全12講座を、参加者全員が受講する必修講座（６講座）と参加者が自らの課題に応じて受講する選択講座（６講座）に分けて実施した。必修講座は、初回講座を自校で実施し〔自校型〕、その後は拠点校での集合研修〔集合型〕とした。選択講座はすべて自校型とし、参加者が必要な研修を選択しやすい形態にした。これは、昨年度の本研修（MEIKAI-JOEプラス）を、講座の実施日、研修内容等に応じて、３通りの方法（①拠点校での集合型、②自校型、③組合せ型）で実施したことを踏まえたものである。必修講座の集合型では、各講座の理解を深めることができるよう、本市として必要な内容を講座の前後で確認しながら、参加者が一体となって学んだ。また選択講座では、参加者が自ら目的をもって選び、授業日であっても時間を有効に活用し、必要な研修を受講した。本市では、２カ年かけて実施方法を試行することにより、12回にわたる本研修講座を効果的に活用することができたといえる。

【研修成果】

今年度の研修は、第１回から第６回の指導理論と、第７回から第12回の授業研究に大別される。本市における成果について簡潔に記す。

① 第１回から第６回講座（指導理論）

本市の現状と照らし合わせ、特に研修効果の大きかったものとして、「第１回講座：学習指導要領の原点」と「第３回講座：聞くこと・話すことの指導」が挙げられる。「学習指導要領の原点」では、「Fish Bowl（金魚鉢）からOpen Seas（大海）へ」のキーワードが示すように、これからの外国語教育で目指す姿とその実現に向けて、児童生徒の心をいかに耕し導くかという指導の根幹を学んだ。「聞くこと・話すことの指導」では、幼児がことばを学ぶ過程を例にしながら、「外国語習得の効果的な道のり」、「言いたい活動＞言わせる活動」、「もっと知りたいからスタートするコミュニケーション活動」など、授業を構想し実践する際の大切なポイントを学んだ。これらは授業改善の方向性を明確にし、今後の研究の拠り所となる内容であった。

② 第７回から第12回講座（授業研究）

第10回講座で実施した本市の授業研究では、「ALTとのティーム・ティーチングの充実」をテーマに掲げ、第４学年の授業を提案した。学級担任が主たる指導者として、両者の強みを生かした授業づくりを目指した。本実践で特に大切にしたことは、（1）学級担任の役割の明確化、（2）必然性のある言語活動の設定である。（1）学級担任の役割としては、他教科同様、児童の思考の流れとつぶやき・気付きを大切にして展開し、児童とALTを意図的につないでいくこととした。本授業者は、児童の理解の様子をよく観察しながら進め、児童に問い返したり、英語で言えるかをたずねたり、必要に応じて繰り返させたり、ALTとのやり取りの機会を設定したりしながら、本実践を通して自らの役割を獲得していった。（2）必然性のある言語活動の設定については、新しい発見や気付きのあるやり取りを通して、他者との協力的なコミュニケーションが図られることを目指した。第１回講座でご指導いただいたように、「Fish BowlからOpen Seas

へ」を意図しながら、本言語活動を展開した。今後はさらにOpen Seasで学びながら、必要な語彙を必要な時に獲得することができるように、活動中、活動後の指導を充実させていく。講師の方々や参加者のみなさんからは、昨年度以上に多角的な視点でご意見をいただくことができ、横手市全体の授業改善につながるものとなった。また他自治体の優れた実践からは、大きな刺激と学びを得ることができた。

今後も、小学校教員の確かな指導力と高い協働性を生かしながら、創造的で温かい外国語教育の充実・発展に向けて本市の施策を推進していきたい。

6. 秋田県横手市受講者感想

第６回講座までは「読むこと」「書くこと」「聞くこと・話すこと」「TTの在り方」など授業作りや指導に生かせる実践的な内容だった。単元構成の在り方、単元や１時間毎のねらいの設定の仕方など具体的な指導内容を例に挙げながらご指導いただいたことで、日々の授業ですぐに活用できるアイディアを得ることのできる講座となった。第７回講座以降は計６回の授業研究であった。年間６回もの外国語の授業を参観したのは初めてで、どれも興味深かった。授業を参観するにあたり与えられた視点だけではなく、これまでの講座の重点などを想起しながら、一緒に参観した先生方と協議を重ねたことで私自身の授業の見方も鍛えられた。また、複数県の先生方とのZoomによる意見交流を行い、共感したり、新たな視点を学んだりしたことで研修が深まった。それぞれの協議において地域性、経験年数など違いはあれど、ひとつの授業について県を超えて語り合えるという貴重な経験ができた。　**横手市立横手北小学校　藤原 智子**

本研修では、「学習指導要領の趣旨」に関する講義から、「児童の学習改善を促し自信を育むためのポジティブ・フィードバック」「“たくさん聞いて、まねてみる”“使って覚える”を基本とした聞くこと・話すことの指導法」「読むこと・書くことにおける“音声”の意義と具体的な支援」など、講義・演習を通してより実践的な指導方法を学ばせていただいた。また本校は、拠点校として「ティーム・ティーチング」をテーマとした授業研究の機会をいただいたことも研修の充実につながった。HRTとALTの明確な役割分担、ALTのより効果的な活用場面、必然性のある場面設定などについて全教員で研修を深められただけでなく、参観された先生方からの協議報告や講師の先生方からの指導助言は大きな励みとなるとともに今後の指導の方向性を確認する場となった。それは、他県の授業研究を参観する講座においても同様である。このような貴重な研修の機会をいただいたことに心より感謝し、子どもたちが大海で泳げるようになるための英語教育（Can-do)につながる授業作りに努めていきたい。　**横手市立横手南小学校　小坂 真希子**

7. 福島県いわき市教育委員会総括

いわき市教育委員会として、小学校教員の外国語の指導力向上を目的とした教職員研修を実施しているところではあるが、外国語の授業を担当している小学校教員が全員悉皆で受講することについては、なかなか難しい状況である。そのような中、今年度も、拠点校方式及びサテライト方式により、本事業に参加させていただく機会を得ることができ、大学教授等による専門的な指導に加え、授業研究を通した他地域での取組みについての情報交換を通して、外国語の指導力向上を目指し研鑽を重ねることができた。

【成果】

本事業の研修内容や実施方法において、成果と考えられる点は次のとおりである。

①月によっては、学校行事等のため講座への参加が難しい月もあるので、サテライト研修と集合研修を選ぶことができたので、研修者は参加しやすかった。

②講義では、日頃悩んでいる課題について具体的にご教示いただき、授業づくりの視点や留意点を学ぶことができた。

③研究授業を通した研修では、他地域の先生方の様々な授業実践の内容や、事後協議では授業改善のための具体的な助言を聞くことができた。
④オンラインによる研修のため移動時間がないことに加えて、拠点校（市総合教育センター）に集合して研修できない場合でも所属校で参加でき、計画通りに研修を行うことができた。
⑤いわき市については、昨年に引き続き拠点校以外（所属校）をサテライト校と位置づけ、拠点校に集合できない場合は各校での研修として実施した。視聴のみとなってしまう一方で、所属校で複数の教員による研修も可能となるなどの利点も見られた。
⑥拠点校をいわき市総合教育センターとしたことで、講座に参加する学校にオンライン研修の準備等の負担をかけることなく実施することができた。
⑦拠点校に集合しての研修として市内61校に参加案内をし、市内18校からの参加を得た。本講座で研修を積んだ教員が、校内の研究授業で外国語の授業に挑戦するなど、積極的な取組みが見られた。

【課題】

本事業が大変有意義な研修であることから、さらに効果を上げるための視点から、考えられる改善点は次のとおりである。
①研究授業をとおした研修については、協議の時間が短く、深まりの点で課題が残ると感じた。また、視聴する授業は45分間を通して視聴した上での協議の方が、研修の効果があると感じた。
②授業動画は事前課題とし、それをもとに協議する形ではどうか。

8．福島県いわき市受講者感想

様々な内容の講義を受講し、外国語指導を進めるためのポイントを学ぶことができた。また、外国語活動・外国語科の指導について相談したり話し合ったりする機会が少ない中で、他校や他地域の先生方の意見を聞くことができた。この学びを日々の授業の中に取り入れることで自分自身のスキルアップにつながり、以前にも増して目的・場面・状況を意識できた。教師主導ではなく、子ども主体で課題設定を行うことで、ゴールがより明確となり、意欲的に言語活動に取り組む姿が見られるようになった。

いわき市立小名浜第一小学校　平樂 裕美

ALTと共有できる形成的評価のためのチェックシートや文を書くときのチェックリスト、小中連携を意識した授業など、講座で学んだことを自分の授業に反映させることができた。前半に様々なテーマの講義を受講し、後半に実際の授業の様子を見て意見交換すると言う経験を積むことで、普段の授業を振り返る際の改善の視点が明確になった。

いわき市立郷ケ丘小学校　大瀧 美穂

講座で学んだ知識やノウハウを授業実践に生かすことで、学級の実態に応じた指導方法を探究することができた。また、提案授業を通して、理論を実践につなげるための大きなヒントを得ることができた。自分自身が外国語科や外国語活動の授業を楽しんで考えるようになったことが一番の成果である。講座を通して理論→実践→改善のPDCAサイクルを行えたことで、他の単元でも指導のポイントを見失わずに授業づくりができた。

いわき市立中央台東小学校　福永 祐一郎

本講座では、学習指導要領に示された指導の在り方や学習評価に係る講義、授業動画の視聴などがあり、日々の授業に取り入られる内容が多く、それらを授業に生かすことができた。また、TTによる実践例やT2との連携のポイントなどの教示があったため、ALTとの授業の進め方について理解を深めることができた。「なんでも相談交流室」にも参加できたため、普段の授業で困ったことなどを自由に交流でき、大変ありがたかった。　**いわき市立三和小学校　齋藤 亮**

外国語科の授業を行う際、英語を使う必要性を感じさせる授業展開が重要であることを改めて感じた。ALTが授業に加わらないことを欠点として捉えていたが、ALTに紹介したり、質問したりする場面を設定することで、英語を使う必要性を感じさせながら授業を展開することを心がけるようになった。また、評価ではALTと評価のポイントを事前に

打ち合わせし、児童の学習状況の評価と自身の授業改善に取り組むようになった。

いわき市立好間第四小学校　北田 樹

講座では、講義だけでなく演習もあったため、実際に授業に取り入れる方法を具体的にイメージすることができた。後半の講座では、各自治体の実際の授業を見ることができ、とても参考になった。授業について協議することができたので、児童への声かけや掲示物、目的意識をもたせるための手立てなど、有効性を感じることができた。

いわき市立大浦小学校　佐藤 美玲

講師の講義は大変勉強になった。また、各地の先生方の授業提供及び意見交流を通して様々なことを考え、学ぶことができた。単元のはじめに単元のゴールとなる活動を示して意欲を高めたり、ポジティブ・フィードバックを実践したりと、学んだことを授業に生かすことで、子どもたちが英語に慣れ親しみ、楽しく活動する姿がみられるようになった。

いわき市立勿来第二小学校　伊藤 瑠美

9．新潟県妙高市教育委員会総括

当市は、社会を主体的に生き抜く基盤となる資質・能力として「外国語を使って何ができるようになるか」を子どもたちと共に考えながら、子どもたちに実生活に役立つ「使える英語力」を身に付けさせることが、喫緊の課題と捉えている。その主たる理由は、当市を取り巻く現状として妙高高原地域を中心としたインバウンドの波が顕著に押し寄せており、実生活に役立つ英語力の育成が年々その重要度を増していることである。

子どもが実生活に役立つ英語力を身に付けるためには、幼児のうちから外国語に慣れ、親しむことが重要である。当市では、園（年20～50時間）と小学校低学年（年20～28時間）で「まねる」ことと「楽しむ」ことを主目的とした外国語活動を定期的に実施し、園と小学校低学年のスムーズな接続を意識して取り組んでいる。また、小学校中学年（年35時間）から高学年（年70時間）にかけては、様々なトピックに基づくスモールトーク等を通じて意味のある英語に継続的に触れさせることで、児童の主体的な「気付き」を引き出すことを重視している。中学校（年140時間）での本格的な外国語学習を前に、もっと外国語が使えるようになりたいという一種の「憧れ」を児童に獲得させ、その上で中学校での「使える英語力（即興的な英語力）」の育成につなげるべく、市内全中学校区において、学習指導要領が各発達段階で求めている目標を意識した授業改善を推進する中で、連続性のある英語教育に組織的に取り組んでいる。

MEIKAI-JOEへの参加は、昨年度に引き続き2年目となる。本年度も、受講者が希望する講座を選択して受講する方式が採用され、個々の教員のニーズに応じた参加が可能で、全12回の講座に延べ人数で307名の小学校教員（ALTを含む）が参加した。実際、前半の指導方法等に係る講座で得られた知見を、自身の授業で活用した教員が少なくなかった。また、後半の授業研究では、参加した６つの市区の先生方が授業を公開し、それをもとに各市区のグループ協議で出された意見交流を通じて、日々の外国語の授業作りに直結する知見が得られ、大いに学びを深めることができた。

【成果】

- 希望する講座にのみ参加する方式は、とても有効であった。講座の回数が増えるとその分受講者の負担が大きくなるので、持続可能な研修という観点からも、受講者個人の実情に応じて講座を選べるシステムは、今後も継続させてほしい。
- 大学教授等による最先端の指導技術に係る講義では、日ごろの授業実践を通じて明らかになった疑問点に対して、具体的に回答をいただくことができて有り難いという意見が多数を占めた。
- 受講者の外国語教育に対する認識は十人十色であるが、園段階からの定期的な英語教育の実施やALTが毎週すべての小学校に訪問している実態からも、当市が外国語教育に力を入れていることは周知のことであり、概して、市内小学校教員の外国語教育に対する意識は高い。その意識の高さについて、この２年間に多くの教員が本講座に参加した事実を考慮すれば、本講座の果たした役割や意義は大きい。

・本講座の授業研究の授業者選定について、当市では１つの校区を外国語教育の重点地区に指定し、指定された校区の小学校の教員に授業公開を依頼し、それを録画して、当講座の授業研究の題材とした。重点校では、年間を通じて３回（低・中・高学年）の授業公開を実施した。実施にあたっては、事前の校内指導案検討会の段階から市の外国語活動コーディネーター及び指導主事が支援し、その後の授業にも積極的に参観し、必要な指導・助言を提供した。授業者からは、「こんなに真剣に外国語の授業に向き合った経験は初めてで、外国語の授業に対する認識が変わった。いい機会をいただいて本当に良かった。」と、肯定的な評価を得ている。

【課題】

特に後半の授業研究の講座について言えることであるが、１時間という設定時間内で終了することができないケースが少なからず認められた。その原因はいくつか考えられるが、それらを踏まえて、決められた時間内で収まるようにするための具体的な手立てが求められる。

・学校現場では、全ての児童が一人一台端末を有しており、その活用が進んでいる。外国語の授業も例外ではなく、その有効活用策に対する関心が高まっている。以上のことから、一人一台端末を含むICTの有効活用を、次年度の講座内容を決定する際の視点にしていただきたい。極めて実践的で、現場の関心も高いので、受講希望者も多くなることが予想される。２回に分けて行う等の対応があってもいいと考える。

・２年間の受講を経て感じたことであるが、特に第１回から６回までの大学教授等による講義については、前年度の内容との重複部分が多く、継続参加の受講者にとっては、目新しい内容が少なかった感がある。教員として学び直しが重要であることは理解できるが、この点に再考が必要だと感じた。

・「読むこと・書くこと」の指導内容は、専門的な部分があり、難しく感じたところもあったが、本事業が「専門人材育成・確保事業」であることを考えれば、専門的な講座も必要なのは納得できる。講座によって、その内容に係る専門性の高低に顕著な差があることは否めない。

10．新潟県妙高市受講者感想

ワークショップ、講義、演習、授業研究など、様々な形態での講座であったので、複数回の受講でもポジティブな気持ちで参加することができた。また、勤務校では外国語に関して明るい職員は少なく、今回の講座のように、多くの大学の先生方から学んだり、他地域の実践を知ったりする機会は、とても有効であると感じた。

ALTとともに受講していたため、受講内容をすぐに共有でき、授業に活かすことができた。例えば、ポジティブなフィードバックについて学んだ後、どんな場面で、どんな言葉がけをすると効果的かをALTと話し合い、実際に授業内で試したことがあった。

今年度３・４・６年生の外国語を担当しており、学年の発達段階に合わせて、学習の流れを効果的に組んでいくことを意識したいと感じた。また、評価に関する様々な知見を学ぶことができ、自身の評価に活かしたいと感じた。

妙高市立新井中央小学校　笠原 賢一

今年度、3年生１クラス、4年生２クラスの外国語活動の授業を担当している。講座を受講しながら、日々の実践を振り返ったり、授業にどう生かそうか再考したりする機会を得ることができた。その中で、特に自身の実践に生かせたものが2点あった。

1点目は、「気付き」である。第１・3回講座では、意味ある文脈から得られるInputから促された気付きが理解、定着へと結びついていくことを学んだ。LT2 Unit6.Alphabetでは、”I have three letters.” “I have two words.”などとヒントを出しながら、いろいろな店のサインをクイズ形式で探させる活動を通して、letterとwordの意味理解を促してみた。「letterは文字のことかな」と推測しながらクイズに楽しんで挑戦する児童の姿が見られた。

2点目は、ポジティブフィードバックである。第2回講座で学んだことを意識して、積極的に児童を賞賛するようにしたところ、授業に活気が出て、意欲を高めることができたという手応えを感じた。今後も授業に生かしていきたい。

妙高市立新井小学校　杉本 美幸

MEIKAI-JOEでは、日頃の授業展開がどうであったかを学習指導要領の様々な視点から振り返ることができた。第6回の「学校段階間の接続の重要性」では、小・中・高の学校段階における外国語科の言語活動の在り方について確認し、中学校への円滑な接続の重要性とともに、児童生徒に「使える英語」を身に付けさせるためには、言語活動の充実に加えて、教師の英語使用や内容のバリエーションを増やすことが重要であることを学んだ。

また、「使える英語」や「学校段階間の接続」のために、第5回で「バックワード・デザイン」によるゴールを意識した指導と子どもたちが主体的に学ぶことを可能にする「ルーブリック」の活用の意義について再確認できた。

自身の授業で、実際にゴールを意識して授業展開を工夫したり、子どもたちとゴールを共有したりしたことで、子どもたちの活動意欲がさらに高まったと感じている。今後も継続させていくとともに、ALTや子どもたちと英語でコミュニケーションをとることの喜びを感じ合うために、自身の英語力も向上させていきたい。

妙高市立妙高高原北小学校　丸山 瑛子

11. 東京都狛江市教育委員会総括

狛江市では、第３期狛江市教育振興基本計画（狛江市教育大綱）の中に【基本方針】（１）生きる力をはぐくむ質の高い学校教育の推進【施策】③国際社会で活躍できる力の育成として、グローバルに活躍できる資質・能力を伸ばす教育の推進を掲げている。具体的な施策としては、狛江市は日本で二番目に面積が小さい自治体であり、小学校６校・中学校４校というスケールメリットを生かし、小中連携を推進するために「かけはしプロジェクト」として各校から代表者が集まりテーマを設定し集中して研究を行っている。令和３・４年度はプロジェクトのテーマとして外国語教育を設定し、１年目である令和３年度は小学校から中学校への「学びの接続」のために、「教材」の共有、「内容」の共有、「指導法」の共有と３つの視点を設定して研究を進め、小中連携授業案の作成等を行った。２年目である令和４年度は、連携授業案の検証授業を行うとともに、明海大学の本講座を活用することで、本市の外国語教育の一層の充実を図った。

【講座の実施について】

① 受講者について

受講者については、前述の「かけはしプロジェクト」の委員と、市教委主催の研修との共催を基本として実施した。そのため講座内容に合わせて受講者を設定することができたため、より受講者のニーズに合った研修とすることができた。また、選択講座制のメリットを生かして毎回受講者を募ったため、教員個々のニーズに合わせて希望する講座のみに参加することが可能であり、初任の教諭から中堅教諭までの幅広い層に受講の機会を設定することができた。

② 講座における小中の連携について

「かけはしプロジェクト」の委員も講座の受講対象としたことから、中学校英語科の教員も受講し小学校英語の指導方法等についての理解を深めることができた。中学校の教員は、講座を受講する中で、小学校英語の指導方法、クラスルームイングリッシュ、ALTとの連携、目標についての理解が深まり、接続期の指導方法の改善に向けての意欲が高まった。また、小学校の教員は、中学校の入学段階で子ども達に身に付けさせておきたい資質・能力について、講座の中で中学校の教員と意見交換をすることで具体的な指導方法の改善についての手立てを考えることができた。

③ 効率的な受講時間の設定について

講座の実施時間が１時間とされ、教員の負担感が少なく気軽に自分の課題に合った講座を受講することができた。また、教育委員会事務局より各回の講座の実施前に開催通知を発出し、講座評価アンケートとリフレクションシートについて二次元バーコードで示し、受講者が受講日当日に講座の一環として回答できるようにすることで、講座内容の定着を図った。

【総括】

コロナ禍によりオンラインで実施される研修等が増加したが、録画された内容を視聴する方法ではなく、リアルタイムのオンライン講座として直接講師の先生方や、全国各地の拠点校の先生方の生の声を聴くことができたのは本講座の特性上、非常に有効であると感じた。本講座を受講し、所属校の教員に還元すること、自ら実践したことを丁寧に振り返り評価することについては受講後の課題として、今年度の受講者に指導を行った。

今回、貴重な機会を御提供いただいた明海大学の皆様、講師の皆様、様々な授業実践を御提供いただいた連携区市の皆様に感謝申し上げたい。

12. 東京都狛江市受講者感想

講座をとおして、授業を行う上でその活動に取り組む必然性が重要であるということ、相手意識、目的意識をもって学習に参加できるような場の設定が大切であるということについて改めて気付きました。英語の学習は、児童によっては「なぜ英語の勉強が必要なの」と考えてしまいがちですが、英語を使うことによって自らの世界を広げること、異文化理解の一環であることなどを丁寧に示すことで学習意欲を高めていきたいと思いました。

授業研究では４年生でも活発に英語を使って会話しようとする姿を動画視聴で、直接見ることができて素晴らしいと思いました。普段の授業では、英会話ということで固くなりがちですが日常会話はもっと気軽に、単語からいろいろなことを話していくことが大切だと思いました。

狛江市立緑野小学校　平林 隆太

実際の授業をとおしての講座だったので、実践的で分かりやすかったです。児童が興味をもって学習に取り組むための工夫や評価規準への理解を深めることができました。評価については、目標をCan-Do形式で設定して、単元末に目標の達成度を評価することについて学びました。その際、単元の評価規準を達成できているかどうかについて、パフォーマンス評価だけではなく、単元全体をとおして見取ることについて学びました。改めてCan-Doの目標が具体的な評価規準として活用できるかを確認し、児童にも共有しながら何を身に付けさせるべきかを明確にして指導を行っていきたいと思いました。また、児童が自信をもって活動に取り組むことができるよう、十分に練習の機会を設定して自己評価を促し、自己肯定感を高めることにも繋げたいと思いました。

狛江市立狛江第一小学校　菅原 栄理佳

ネイティブのような発音ではなくても、自分の発音で話せるようになることができるようになればよいというお話を聞き、気持ちが少し楽になりました。正しいかよりも適切かどうかということを意識し、会話の中やその場面で伝わる表現を使えるようにしたいと思いました。また、やり取りがうまくいかない場合、日本語でもポジティブなフィードバックは難しいと感じることが多かったですが、まずは児童が活動したことを評価し、その児童の特性や個性を生かしてRecastしたり、改めて質問に戻るということを学ぶことができました。児童を認めポジティブフィードバックができるように、児童理解に努め準備をしていきたいと思います。

狛江市立和泉小学校　楢崎 友哉

13. 講師総括

1　吉田 研作

本年度の事業では、参加地域が昨年度以上に増え、各教育委員会や学校の教員の積極的な参加が目立った。理論的な講座に加え、実践的な講義やワークショップ、そして、教育現場の実践報告など、非常に充実したものになった。特にまた、現場の教員からの具体的で実践的な問題提起や質問により、講座全体の質がより高いものになったと思う。

第1回講座では、小学校英語教育の理念、そして学習指導要領の基本的な考え方について解説したが、その時にも述べた通り、日本の外国語教育の考え方は第2次大戦後一貫して4技能の育成を目標においたものだった。ただ、当時の日本の状況から教室以外で英語の使用が全くと言ってよいほど必要なかったために、どうしても教室のみで学ばれる英語

として構造主義的な考え方が強調され、文法等の言語構造の難易度によるシラバスが用いられた。その結果、あたかも英語教育の最終的目標が言語「知識」の獲得にあるかのような誤解を生んできた。しかし、現在のグローバル化の浸透にともない、日常的に日本国内でも英語の必要性が高まり、それに対応できる考え方として、今回の学習指導要領の改訂により、CEFRに基づいたコミュニカティブな目標に大きく舵が切られた。そして、それを最も具体的な形で実現してきたのが小学校の外国語教育である。まず、3･4年の言語活動という英語による実践的なコミュニケーション活動を通して英語を体験した上で、その体験をベースに5･6年生で教科として知的理解を含めた英語学習の流れが提起された。つまり、従来の演繹的学習過程から帰納的学習過程への転換が示されたのである。

本講座においてはこのような帰納的な英語学習のための具体的な講演や講義が組まれ、それに基づいた実際の授業を教育現場での実施を基に、そこで出てきた様々な問題や課題について話し合われ、内容の濃いプロジェクトになった。

以前、大学で英語科教育法を教えている教員と教育員会の指導主事と、さらには教育実習生を受け入れる現場の教員の3者による「交換日誌」による意見交換を図ったことがあるが、それぞれのニーズや制約が違うため、どうしても齟齬が生まれることが分かった。英語教育をよくするためにはこの3者が一致協力して日本の英語教育の改善に努めなければならない。そんな中で、今回の講座では、大学、教育委員会、そして教育現場の相互協力体制をより強くすることができたのではないかと思う。

2　百瀬 美帆／米村 珠子／パトリツィア･ハヤシ／タイソン･ロード

第２回講座では、本事業参加機関への調査結果を踏まえ、「児童･生徒の自信を育む評価～ティーム･ティーチングにおけるポジティブ･フィードバック～」と題して、講義に引き続き本学学生の参加によるモデル授業を提示し、各地区の先生方に実演していただくワークショップを行った。その結果、ティーム･ティーチングにおいてT1とT2が協力しながら役割分担し、適切に指導と評価を行うための方策の一つとして、ほめことばを適時適切に用いることが重要であることを受講者と共有することができた。このことは「英語での声掛けや児童の返答を受け止めること、ほめることの大切さを実感し、ほめ方のパターンを学んだ、他教科でも使える手法として今後活用していきたい」という受講者の振り返りや、「講座で示したタスクは役に立った（85%）」というアンケートの回答からも確認できた。

浦安市立日の出南小学校の小西了太先生による6年生のティーム･ティーチングの授業を素材とした第７回授業研究①では、ポジティブフィードバック、個別フィードバックを効果的に活用していることが確認できた。一方で、T1がリードするべき場面はどこか、活動と活動をどのようにつなげて必然性をもたせるか、などについて、受講者にとっても考えを深める機会となった。特に、ALTとJTEの発話量の適切なバランスや、全員でGood job!を多用する場面ではほめことばの意味付けの重要さについて受講者自身の気付きが多く見られたことは意義深い。

第10回授業研究④では、横手市立横手南小学校の菊地大地先生による4年生のティーム･ティーチングの授業を扱った。T1がリードしながらALTとよく協力しながら授業を進めており、モデルを示したり全体へのほめことばを適時用いたりするなど、児童の関心･意欲を高める取り組みにつながっていた。次のステップとして、目的、場面、状況に応じたやり取りになるよう練習させたり、会話を広げた発話を行わせたりすることにより、意味のあるコミュニケーション活動につなげることができる。

フィードバックやほめことばは、学習内容の定着を図るために行う「指導（学習）に生かす評価」の過程にある。そのため、ティーム･ティーチングにおいては、言語活動のファシリテーターとしての役割分担だけでなく、評価においてもT1(JTE)とT2(ALT)が協力して、どの場面でどの観点を評価するかを事前に話し合っておくことが重要である。今後の実践研究に期待したい。

3　井熊 ひとみ

第3回研修講座では「聞くこと･話すこと」をテーマに言語活動をどのように組み立てていけばよいかを中心にお話させていただいた。全国各地からの参加を鑑み、特定の検定教科書を使用せず「単元名･めあて･言語材料」を提示し、そのめあての作り方、単元計画、授業構成について受講された先生方にご提案を含め考え研究をしていただいた。その目的は、めあてを児童に与えた時、どのような言語活動が有意義か、評価基準をどのように設定したらよいか（授業と評価の

一体化)、その学習の課程の順番として導入から定着、そして発展への道のりを計画し授業において児童に思考させ、表現したいことが何なのかを共有することの重要さを、「言わせる活動より、言いたい活動が大切である」というメッセージと共にお伝えした。英語学習の前にまず言葉の教育として、子どもたちが考え、思うことが大事であり、そのための準備として「場面・状況」の設定が重要なポイントであることをご理解いただいた。講座では、母語を習得する過程の「赤ちゃんの発話動画」をご覧いただき、実態のイメージを思い浮かべて頂いた。外国語(英語)という児童にとっては普段使用していない言語を使いながら定着させていくプロセスと指導法のいくつかをご紹介した。母語以外の言語を獲得するために要する膨大なインプットは言語、非言語を通じて必須でありそれが発話につながるために内在化するインテイクのプロセスと、中間言語的なまちがいをひとつひとつ修正していく作業からも想像していただき、第二言語の習得には先生が授業内で使う英語、指示語、児童とのインタラクションのすべてが蓄積されていき時間をかけて粘り強く指導・支援にあたることが必要であることもご理解を得られたと思う。また、単元計画ではそのターゲットフレーズや言語材料を検討し選択して準備を行い導入時のsmall talkの工夫や方法、ICTを含めた教材の活用方法、意味理解を得てから定着の活動のバリエーションが必要であること、授業が子どもたち中心に進められること、覚えるためには言語活動を通じて「言いたい。言わなければならない必然性(meaningful purpose)」が求められること、45分の時間の中で子どもたちが繰り返し言う(言わなければならない)場面がどのように作られるのか、などをお考えいただいた。そのための教材としてどんなものが有効であるか、その見せ方や児童への投げかけ方なども練習をしていただきたいことをお伝えした。つまり、真似ることが上手である児童の特性(耳のよさ)をふまえて定着をするには何度もインフォメーションギャップを念頭においた活動を通じた練習と自分の思いや表現したいことを自分の言葉で伝えようとする事の「区別」をする必要性があり、定着ができてこその発展として授業の終末にかけて「話す」ということを「発表」や「やり取り」という評価基準に沿って「できるようにする」構成が必要であると実感をしていただけたかと思う。真似ることは上手でも、繰り返し使う場面がないと忘れてしまう外国語の習得には、いきなり個人活動に進まず、練習と意志に基づく発話の区別を指導側がよく把握し中間指導をしていくことが必要であると言える。アンケートにもその経緯のご理解を得られたコメントが多く寄せられた。

それを受けて授業実践では、「聞くこと、話すこと」をテーマにした第9回(いわき市立いわき中央台東小学校)、第11回(妙高市立妙高小学校)の授業動画を参加者全員で拝見し、各地現場からの感想、協議、提案など意見が多彩に繰り広げられた学び合いは大変貴重な機会となった。忙しい先生方にとって計画と授業案、構成は大変ご苦労であったかと思うが、担任の先生だからこその児童の実態を把握して上手に子どもたちの気持ちを引き出しながら授業を実施されたと思う。年齢からすれば一般的な成長の経緯からも、高学年になればなるほど間違いを恐れたり、恥ずかしさからの発話への躊躇が見受けられる傾向にあるが担任の先生方はその児童の特性をつかみながら大変有効な授業をされていた。児童の反応をとらえる素早さはさすがと思わせる場面がいくつも見受けられた。そのうえで、外国語(英語)を学ぶためにクラスルームイングリッシュをできるかぎり使い、子どもたちの「気づき」をひきだし、「言いたい気持ち」を育てていくことは担任の先生のご努力と、それを支援するALTやJTEの先生方との連携であろうと思う。今回の明海JOE-プラス2022で得られた機会と学びをさらにいかしていただき、授業を実践しながら生まれる課題も含めてこうした機会をもつことは重要である。児童期の土台づくりが、その先にある小中連携を含めて長い英語学習の道のりを歩む子どもたちにとって礎であることは間違いないと思われる。

そのことからもこの機を得て、各地域でのスキルアップ研修を継続していただきたいと心から願う。ご多忙の中でもご協力いただいた各地の教育委員会、教職員の皆さま、児童の皆さんに心から感謝の気持ちをお伝えしたい。

4　池田 周

第4回講座では「読むこと・書くことの指導」を扱った。まず小学校学習指導要領(平成29年告示)「外国語」の「読むこと」の目標イ「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする」に関して、同解説の外国語・外国語活動編で述べられている「語の中で用いられる場合の文字が示す音の読み方を指導する」(p.78)ことを取り上げた。この指導には、音と文字の対応を知識として教える方法と、ある音が特定の文字で表されることを気づかせる方法があるが、小学校では後者を目指しており、ある文字が特定の音を表すことをいきなり指導するのではなく、文

字の音への慣れ親しみが先であり、その段階で高めておくべき音韻認識の概説を行った上で、具体的な活動案を紹介した。

さらに「書くこと」については、書き写す活動において児童が「何を言いながら（何の音を発しながら）取り組んでいるか」を大きな問いとして提示した。まだ綴りのみを見て発音できない段階では、文字の名称を言いながら書き写し元の文字を認識し、それを書き出す児童が多い。沈黙の場合は、ことばの学びよりも形を模倣する活動になっているかもしれない。ならば、少しでも個々のアルファベットを書く負荷を下げることで、結果として語句や表現を書き写す活動を楽しむ余裕が生じる。そこで具体的な指導の工夫として、まずはぐるぐる運筆から／大まかな形を大きく／手本から目を離して／空書きでも「くっつくところ」や「大きさの違い」などを意識して／リズムよくメリハリつけて書くことなどを提案した。

第8回講座は、足立区立寺地小学校第6学年の下田先生のご実践に基づく授業研究であった。学びのポイントが一つ一つ丁寧に整理され、「できる」こと少しずつ積み重なるように指導計画が立てられていたこと。やり取りの活動では中間指導が重視されていたこと。さらにクラスルーム・イングリッシュを積極的に取り入れて、児童に英語のインプットを十分に届けるなど、外国語の指導で重要なことが意識的に取り入れられていた授業で、私自身も多くを学んだ。書くことを取り入れる場面では、何のために書くのか、どのようなことを意識して書くのかなどを、具体的なイメージとして児童と指導者とで共有することが、活動を有意義なものにする手かがりとなりそうである。講座担当者として、もっと実際の指導にすぐに生かせる指導例を含められればよかったと反省している。熱心に参加して下さった先生方に感謝申し上げる。

5　金子 義隆

第５回講座は、「言語活動の効果を高めるための工夫とパフォーマンス評価」に関してであった。「外国語」や「外国語活動」の授業において「言語活動」を中心に据えることの理解は小学校現場において少しずつ浸透してきている。しかし、その肝心な「言語活動」を実際の授業での具体的な進め方に関してはまだまだ改善の余地があるように思う。この講座では、実際の授業ビデオを利用して具体的に3点（①「必然性の設定」②「インタラクション中のuh-huhを大事にする」③「教師のフィードバックの活用」）に絞って「言語活動」の効果を高める工夫を紹介した。さらに、「言語活動」を評価するためのパフォーマンス評価の具体的なプロセスを紹介した。

講座評価アンケートの結果を受けて講座を簡単に振り返ると、「講座内容の理解度」は99%であった。また、「講座内容と学校現場のニーズの適応度」では92%が肯定的に回答した。よって、大部分の受講者は今回の講義を理解することができ、内容の必要性も認識できた。また、講師の説明に対して、95%が肯定的に回答した。総合的な満足度については、93%が肯定的回答をした。自由コメントからも多くの受講者がこの講座を通して学びを深めてくれたことが分かった。特に、「言語活動」の３つの工夫とパフォーマンス評価に関する具体的、実践的知識を深めてくれた。受講された先生方がそれぞれの学校現場で今回の講座を通して得た知識・技能を活用していただけると幸いである。

6　石鍋 浩／坂本 純一

第6回講座では、「学校段階間の接続の重要性」と題し、小学校から中学校・高等学校における指導へ円滑に接続できるようにするための指導方法や言語活動の在り方について述べさせていただいた。今回は、各地区における学校段階間の接続の成果と課題を出し合い、小学校から中学校以後の指導へ円滑に接続できるようにするための指導方法や言語活動等について考える内容とした。

その中で、今次の学習指導要領で示された、小・中・高に共通する「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」の読み取り方について解説したり、外国語（英語）に関する各地区の連携・接続の状況（授業参観、年間指導計画の交換、指導方法等の検討会、授業参観後の研究協議、小中連携したカリキュラムの作成、等）や、連携・接続の成果と課題について、地区ごとに出し合って共有したりした。

次に、講座前に寄せられた講座への希望調査への回答を行った。「小・中・高で目指す姿の具体が知りたい」「目指すべき子どもの姿につながる言語活動の例を知りたい」という希望については、学習指導要領解説に示されている学校段

階別の目標や５つの領域別の目標の一覧表や、言語活動の例や言語材料の一覧表を参考にしてもらうこと、「小･中接続の事例が知りたい」という希望については、「文部科学省平成26 ～ 29年度外国語教育強化地域事業」の中で示されている、「人」の連携、「もの」の連携、「方法」の連携の事例等を参考にしてもらうことなどを回答した。

第12回講座では、狛江市の小中学生が交流して行う英語の授業実践への講評をさせていただいた。小中学生が一緒の教室で英語の授業を受ける実践は、先行事例が限られている貴重なものであり、小学生、中学生、そして教員にとってもメリットが大きいことを述べた。

次に、小学校段階での「書くこと」が、学習指導要領解説でどのように示されているかを確認しながら小中学生が交流して行う授業を進めることが大切であることや、中学生が小学生に教えることの効用などについて述べた。

なお、講座評価アンケート質問2の「講座内容は学校現場のニーズに合っていましたか」には、第6回講座では83%、第12回講座の「講師の指導･助言は役に立ちましたか」には、94%の方が「そう思う」「まあそう思う」と肯定的な回答をしていた。

7　藤田 保

本年度は新たな試みとして「Zoomによる小学校英語･なんでも相談交流室」（以下、「相談交流室」）を７月、10月、12月に各回１時間ずつ、３回にわたって実施した。従来型の研修では、講師が行った講義等に対して質疑を行うことはできても、各教員が日常的に疑問に思っていても当該の講義と直接的に関連のない内容を尋ねるのが憚られたり、普段の授業を行う際に抱えている悩み等に対して他の受講者の前で質問しづらい、ということがあった。そこで、今回この「相談交流室」という形態を取ることで、少人数の肩ひじ張らない雰囲気の中で自由闊達に話し合い、少しでも疑問や悩み、不安などを解消する一助となることを目途としてこの時間を設けることとした。

ただ、このような従来型の研修の型にはまらないセッションにおいて、参加者は常に能動的且つ主体的であることが求められるため、講義型の研修に参加するより負担感を大きく感じる可能性のあり、それが原因で毎回の参加者の人数がかなり限定的になったのかも知れない。しかし、これからの時代に、子どもたちが自ら探究し、教わるのではなく学び取れるような指導を教員ができるようになるためには、教員自身が先ずそのような形態の学び方に経験をし、慣れ親しんでいくことが、最初の一歩になると信じる。このような参加型のセッションを負担と思わず、効率性を求めるだけの授業形態から抜け出せるようになってこそ、個別最適化された教育が実現されるのではなかろうか。

今回の相談交流室の実施に当たって講師（というよりファシリテーター）役の私自身が気をつけたのは、質問に対して正解めいた答えをすぐに与えない、ということである。質問に対してこちらから更なる疑問を投げ返すことで本人の中にある回答に自ら気づいてもらう援助をしたり、他の参加者にも意見や各自の経験に基づく助言を求めることで対話を生み出すことに注力した。

また、それぞれの相談交流室でなされた具体的な質問内容や参加者名等については、当初からここでは報告しないこととしてある。それは参加者の「心理的安全性」の担保がこのようなフリー･トーキングの場では何よりも重要であり、誰かの目に留まることを恐れて萎縮してしまったのでは目的を果たすことが不可能になるからである。その結果、初めは少し固くなっていたような参加者も時間の経過とともに少しずつ打ち解け、ある程度まで深い内容に入り込めたと自負している。なお、発言内容を評価せず、どのような意見も否定されない心理的な安全性は教室活動でも不可欠であり、特に外国語･外国語活動のようなコミュニケーションを最重要視するような授業においては、子どもたちが大人の顔色を窺うようにさせないことこそが何より大切である。

最後に、相談交流室に参加して下さった先生方、このような形式の研修をお許し頂いた明海大学の関係の皆様、そして各学校及び教育委員会の方々に感謝申し上げたい。

8　J-SHINE事務局

はじめに、本事業の委託を受け、講座の企画･実施をしていただいた明海大学の皆様に心より感謝申し上げます。また、実際に研修に参加していただいた、足立区･いわき市･浦安市･妙高市･横手市･狛江市の教育委員会の皆様、教員の皆様にも厚く御礼申し上げます。

本事業は３年目の実施となった。今年度の事業実施においても更に参加地域が増えていること、また新たにオブザーバー制度を活用して他地域の教員の皆様にも参加いただいていることは本事業の必要性と有用性の証であると考えられ、来年度以降の事業継続に大きな期待が寄せられる。

なお、今年度においては、新たな試みとして「なんでも相談交流室」が設置された。全体の講座とは別日に会が設けられ、参加を希望する教員を募って実施された。参加者は自らの言葉で講師に相談を投げかけ、その場で講師が回答して学びを深めていくという手法によって行われたこの相談室は、今年度は参加いただいた人数が限定的ではあったものの、実際に参加された教員ご自身においては非常に価値のある、貴重な経験の場になったことと考えられる。ぜひ次年度以降も継続的に相談交流室が実施されることを期待したい。

また、昨年に続いて今年度もオンライン会議システムZoomを通じた授業研究が行われた。昨年と同様の手法で行われた為、昨年以上にスムーズで効果的な授業研究・意見交換がなされた様子が見受けられた。今後、講師を務める先生や関係者の皆様が実際の授業に足を運んで授業研究や指導助言を行えるような取り組みにも期待が寄せられるであろう。実現に向けては様々な困難も予想されるが、更に現場感を持ち合わせ、教員のお困りごとに寄り添える事業に成し遂げる為に、ぜひ検討されたい。

最後に、J-SHINE事務局としては今後とも、明海大学の皆様と協力し、本事業の成果普及に努めて参りたいと考える所存である。来年度以降もこの研修事業が継続的に実施され、更なる発展を遂げることを切に願う。

9　運営会社（株式会社ハル）

1. 事前準備・講座配信

配信には、例年同様Zoomのウェビナー機能を活用した。配信にあたり、まず講座開始3時間前に入り、配信内容に合わせたカメラ・照明器具やマイク、その他機材の配置とリハーサルを行うことで、問題なく実施できることを確認した。また、撮影現場とは別に事務局を設けて、撮影現場との音声・映像テストを行うとともに、30分前には各拠点校が入室できるようウェビナーを開始し、事前に各拠点校との音声・映像の確認をすることで、開始後の音声・映像トラブルを最小限に抑えることができた。また、トラブルがあった際も、Zoomのチャット機能を使用して対応した。

2. 授業動画の作成

第7回～第12回の授業研究にあたり、各区市から授業動画素材と編集指示書をお送りいただき、担当者と連携を取りながら15分にまとめた動画を全6本作成した。編集・修正に迅速に対応し、講座開始1週間前までに仕上げることができた。また、個人名が出ている箇所のカットやぼかし加工を行うなど配慮し、細やかに対応した。

3. Webサイトでの情報提供

明海大学のサイト内にMEIKAI-JOE PLUS 2022特設ページを作成し、情報提供を行った。参加される先生方の予習時間を確保するため、各回1週間前には詳細ページを用意し、公開した。詳細ページでは事前課題や当日の資料、配信後のアーカイブ動画等を掲載した。また、協力機関であるJ-SHINE、公益財団法人日本英語検定協会からの「小学校英語に関する情報」等も掲載し、先生方の学びを深めていただけるような情報提供を行った。

終わりに

我が国の英語教育、とりわけ小学校段階における英語教育の導入については、平成4年の研究開発学校の指定にその端緒をみることができる。その後、長い年月を経て、学習指導要領の改訂が行われて、平成23年4月からは、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成し、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標として、小学校5年と6年に週1コマの「外国語活動」が導入された。

平成28年12月には、中央教育審議会が、小学校第3・4学年に外国語活動を週1コマ、第5・6学年に教科としての外国語（週2コマ）を導入するといった答申を行った。これを受け、平成29年3月に、小学校学習指導要領が改訂され、平成30年4月からの移行措置に伴い、「Let's Try ！」（中学年）と「We Can ！」(高学年)といった補助教材の配本・使用が始まった。令和2年4月から小学校学習指導要領が全面実施となり、小学校第3・4学年に外国語活動を週1コマ、第5・6学年に教科としての外国語（週2コマ）が始まり、現在に至っている。

令和2年からの小学校学習指導要領全面実施までの間、文部科学省の様々な環境整備についても計画的に実施されてきた。先に述べた補助教材の作成、英語教育推進リーダー養成研修、専科加配教員の配置、ALT等の配置拡大、英語教育強化地域拠点事業や外部専門機関と連携した英語指導力向上事業の立ち上げ、小学校外国語活動・外国語に関する各種映像資料の公表など様々な事業がその中心であった。加えて、現職の小学校の教員に対する研修を充実するとともに、教員を養成する大学の教職課程の改善にも着手した。具体的には、英語教育コアカリキュラムの中で、小学校教員を養成する大学にあっては、これまでは、履修の義務付けはされていなかった外国語を学修することが求められ、令和元年度の大学入学生からは、小学校免許を取得する者は必ず外国語を3単位履修するよう免許法が改正された。さらには、令和4年度からの小学校高学年の教科担任制の導入、特別免許状を取得した人材や力量のある特別非常勤講師を活用した取組も始まり、小学校における英語の指導体制については大きく変化してきた。

こうした中にあって、令和2年度、令和3年度に引き続き明海大学が、「令和4年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業（小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業）」を受託して、小学校等の先生方に講座を提供することができたことは、まことに光栄なことであると考える。今年度、合計12回に亘り講座を実施できたのも、公益財団法人日本英語検定協会、J-SHINEや小学校英語教育学会愛知支部理事の協力機関の皆さま、東京都足立区教育委員会、千葉県浦安市教育委員会、秋田県横手市教育委員会、福島県いわき市教育委員会、新潟県妙高市教育委員会や東京都狛江市教育委員会及びボランティア・オブザーバー参加の東京都神津島村教育委員会、茨城県土浦市教育委員会及び佐賀県伊万里市教育委員会の皆さまや、㈱ハルの皆さまからのご協力があったことに他ならないと考える。ここに篤く関係各位に対して深甚から感謝の意を表したい。

また、今回参加された延べ1,700名にも達する小学校等の先生方の指導力向上を祈念するとともに、日本の小学生が英語の使い手としてグローバルな世界の中で成長することを願って止まない。

本報告書は、文部科学省の初等中等教育等振興事業委託費による委託事業として、明海大学が実施した「令和4年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業（小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業）」の成果を取りまとめたものです。したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。

文部科学省委託

令和4年度教員養成機関等との連携による
専門人材育成・確保事業
（小学校外国語のための免許法認定講習等実施事業）
ー明海大学「小学校外国語科等講座：MEIKAI-JOEプラス2022」ー

成 果 報 告 書

令和5年3月

明 海 大 学
〒279-8550 千葉県浦安市明海1丁目

制作：㈱ハル